

博士論文

日本伝存古文献による唐代文学の研究

～『白氏文集』を中心として～

二〇一六年九月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

FU Jiayin

立命館大学審査博士論文

日本伝存古文献による唐代文学の研究

～『白氏文集』を中心として～

(On Tang's Literature in the Japanese Circulated
Sources: With A Focus on Hakushi-Bunnsyuu)

2016年9月

September 2016

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

FU Jiayin

研究指導教員：芳村 弘道 教授

Supervisor : Professor YOSHIMURA Hiromichi

日本傳存古文獻による唐代文學の研究

～『白氏文集』を中心として～

目次

序

第一章 『江談抄』所引白氏詩文考三則

はじめに

一、「江南遇天寶樂叟」詩の佚句について

二、『白氏洛中集』の流傳

三、白居易『賦買嵩』質疑

むすびとして

第二章 『天寶集』について

はしがき

一、『和漢朗詠集』古注釋に引く『天寶集』の佚文

1、佚文内容

2、「雁」詩の作者について

二、陽明文庫藏『註百詠』と『百詠和歌』に見える『天寶集』の佚文

三、『天寶集』の再検討

第三章 顧陶『唐詩類選』について

一、顧陶の生涯及び『唐詩類選』の編纂

1、基本資料及び舊説

2、新資料による『唐詩類選』の初稿及び補訂時期の検討

二、『唐詩類選』の内容

1、『唐詩類選』所收の詩人・作品

2、『唐詩類選』の編纂における留意点及び編纂基準

3、『唐詩類選』の編成

4、『唐詩類選』における元和文學の様相

三、唐代文學・文獻學に於ける『唐詩類選』の受容及び影響

1、『唐詩類選』による杜詩の校勘

2、『唐詩類選』における小詩人の収録

むすびとして

第四章 『文苑英華』に於ける『白氏文集』諸本の利用状況

一、『文苑英華』が依據した『白氏文集』の本文状況

1、『文苑英華』が依據した『白氏文集』の収録状況

2、『文苑英華』所據本の來源及び『白氏文集』北宋諸本との關係

3、『文苑英華』本の本文状況及び慧萼本との關係

二、『文苑英華』の校記に採用された『白氏文集』の参照本

1、参照本を明記する校記

2、参照本を明記しない校記

むすびとして

付論：林羅山『歌行露雪』について

一、『歌行露雪』の成立背景及び英甫永雄の白居易受容

1、『歌行露雪』の成立背景

2、英甫永雄の白居易受容

二、清原宣賢抄「長恨歌・琵琶行抄」と『歌行露雪』との関係

1、兩書の本文状況

2、兩本の注解状況

三、羅山の白詩受容における『歌行露雪』及び羅山手校本『白氏文集』との関係
むすびとして

結論

序

拙論は立命館大學文學研究科後期課程の學位請求論文として提出するものでありすでに公刊した論文二篇・未公刊の論文二篇・付論の三部分によって構成されている。

第一章「『江談抄』所引白氏詩文考三則」は、二〇一四年十一月二日の中國藝文研究會で口頭発表した「『江談抄』に於ける白氏詩文の考察」に基づき、『學林』第六〇號（中國藝文研究會、二〇一五）に「『江談抄』所引白氏詩文考三則」と改題し、修訂を加えて公刊した。『江談抄』は院政期の古文獻であるが、『白氏文集』などの唐代文學に言及する資料が少なからず存在している。本論文の執筆がきっかけとなり、日本傳存古文獻による唐代文學の研究に注目して進めた研究成果を次章以下に示してゆきたい。

第二章「『天寶集』について」は、二〇一六年二月十一日の中國藝文研究會で口頭発表したものである。『天寶集』は唐代の選集であるが、中國側の資料には全く痕跡を留めない。しかし、日本古文獻の『日本國見在書目錄』『通憲入道藏書目錄』の著録によって、『天寶集』が早くから日本に傳來したことが知られる。さらに、『天寶集』の佚文が『和漢朗詠集』や『李嶠雜詠』『百詠和歌』などの日本の古注釋に僅かながらも遺されており、これらの資料によって原書のある程度復元することができる。本論文は日本の古文獻に散見する資料を集め、唐代の佚書の『天寶集』の復元作業を試みるものである。

第三章「顧陶『唐詩類選』について」は、二〇一五年十月九日の第二十六回中唐文學會（於亞細亞大學）で

口頭発表し、その際に戴いた意見も参考して修訂を施し、『學林』六十二號（中國藝文研究會、二〇一六）に
 公刊した。本論文は日中兩國の古文獻の資料を合わせ、『唐詩類選』の輯佚を試みる。特に日本の『和漢朗詠集』
 古注釋に見える佚文は、『唐詩類選』所收作品の所屬卷數まで詳しく記載しており、日本傳存古文獻に見える
 唐代文學に關する資料が甚だ貴重であることを本論文に示したい。

第四章「『文苑英華』に於ける『白氏文集』諸本の利用狀況」は、二〇一五年十月十一日の第六十七回日本
 中國學會大會（於國學院大學）において、『文苑英華』及び校記に於ける『白氏文集』諸本の利用狀況」とい
 う題目で口頭発表した内容を修訂したものである。『文苑英華』編纂に際して用いられた『白氏文集』が抄本
 であることはすでに論ぜられているが、本論文は日本所藏の古抄本『白氏文集』を用いて『文苑英華』が利用
 した抄本の狀況・價値の解明を企図する。

附論として加えた「林羅山『歌行露雪』について」では、林羅山が幼少期に撰寫した「長恨歌」「琵琶行」
 の注釋書『歌行露雪』について、その成立背景や清原宣賢『長恨歌・琵琶行抄』との關係などを検討する。『歌
 行露雪』に關する研究は狹義の唐代文學の研究分野を越えるが、日本における唐代文學の受容に關する興味深
 い課題である。附論の研究を契機にして、今後の研究を和刻本や和漢比較文學の方向に展開させたいと思う。

拙論は唐代文學の研究資料を開拓することを念頭に置き、日本所藏の古文獻を積極的に利用して以上の研究
 を行うものである。これらの論考から、日本所藏の古文獻は中国所藏の古文獻を補充し、修訂することができ、
 今後の唐代文學の研究においては不可欠な資料であることを深く認識することができよう。

ただ、刻本資料を中心とする中国古文獻と異なり、日本古文獻には写本が数少なく存在している。この研究

にあたって写本の解読には相當な困難さを伴うが、写本には刻本資料には見られない内容を保存しており、その貴重な価値を認めるべきである。また、日本古文獻には唐代文學の影響を受けた内容が至る所に見られ、漢字文化圏において唐代文學の流傳・受容の状況を反映している。これらの資料は従来の唐代文學にそれほど重視されていないが、日本所蔵の古文獻の利用を通じて唐代文學の全体像を描き出すことができると思われる。

第一章 『江談抄』 所引白氏詩文考三則

はじめに

『江談抄』は、帥中納言大江匡房の談話を、進士藏人藤原實兼が筆記した院政期の故實書であり、公家社會の逸話や有職故實・漢文學に關する記事等、様々な方面にわたる内容が記載されている。^②特に『白氏文集』の傳來・受容や、「長恨歌」の「夜雨聞鈴腸斷聲」の異文など、白居易及び『白氏文集』について言及することが多く、白居易研究においてしばしば利用されている。『江談抄』に見える白居易に關する資料を中心とした研究論文には、山根對助氏「『江談抄』所引の漢籍文獻・白居易篇」（『學園論集』第一七卷、北海學園大學、一九七〇）、小川豐生氏「大江匡房の言説と白居易——『江談抄』をめぐる」（『白居易研究講座』第四卷『日本に於ける受容（散文篇）』、勉誠社、一九九四）及び陳獅氏「日本古文獻『江談抄』所見全唐佚詩句輯考」（『中國典籍與文化』二〇一三年第四期）などがある。

小論は『江談抄』に引用される白氏詩文の資料を検證し、諸先學が未だ言及していない二つの問題と、また修正を要する一つの問題を取り上げて考察を行うものである。なお、小論では『江談抄』のテキストとして、川口久雄・奈良正二兩氏『江談證注』（勉誠社、一九八四、以下、『證注』と略稱）を使用し、また山根對助・後藤昭雄兩氏校註の『江談抄』（岩波書店、『新日本古典文學大系』本、一九九七、以下、『大系』と略稱）も参照した。

一、「江南遇天寶樂叟」詩の佚句について

『江談抄』卷四第一七五條に次のようにある。

苑花如雪同隨輦。宮月似眉伴直廬。白。

此詩文集中有兩所云々。在天寶樂叟長韻詩。又在四韻詩云々。

(苑花雪の如くにして同じく輦に隨ふ。宮月眉に似て直廬に伴ふ。白。

此の詩、文集の中に兩所有りと云々。天寶樂叟の長韻詩に在り。又四韻詩に在りと云々。)

また同書卷五第二九九條にも、

文集無同詩哉事。

又被命云、文集無同詩ヤ。僕答曰、苑花如雪隨行輦、宮月似眉伴直廬。此詩在天寶樂叟長韻詩。又在四韻詩。

(文集に同じ詩無きやという事。

又命ぜられて云く、文集に同じ詩無きやと。僕答へて曰く、苑花雪の如くにして行輦に隨ふ。宮月眉に似て直廬に伴ふ。此の詩、天寶樂叟の長韻詩に在り。又四韻詩に在り。)

と見える。『大系』(頁一〇五)によれば、「苑花」の一聯は『千載佳句』上・人事部・近臣にも掲載されている。

上に引用した『江談抄』の二條は、「苑花」の一聯が、『白氏文集』の「天寶樂叟長韻詩」及び「四韻詩」の二ヶ所にあると記載している。『白氏文集』を検してみると、卷二二に「江南遇天寶樂叟」(〇五八二)^③と題される七言十六韻詩があり、これが『江談抄』にいう「天寶樂叟長韻詩」に當たる。また、卷一四に「答馬侍御見贈」(〇七四六)と題される七言四韻詩があり、こちらが『江談抄』にいうところの「四韻詩」に相當する。『白氏文集』における編次の前後は、『江談抄』が記載する順序と同じである。

ただ、現行の「天寶樂叟長韻詩」には、「苑花如雪同隨輦、宮月似眉伴直廬」の一聯は見えない。この點につ

いて『證注』は、現存する『白氏文集』には散佚した部分があると説明している（頁六〇九）。甲田利雄氏『校本江談抄とその研究』は、『白氏文集』巻一二の五十韻の長韻詩である「醉後走筆、酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十四先輩昆季」（〇五八四）（以下、「醉後走筆」と略稱）を考證し、この詩に「宮花似雪從乘輿、禁月如霜坐直廬」の一聯があると指摘している。⁵⁾

「江南遇天寶樂叟」詩の各韻字を検べてみると、後文に引用する全詩句から明らか如く、韻字の十六字はすべて上平十三元韻である。ところが、「苑花」の一聯の韻字「廬」は、上平六魚である。この韻部は十三元と通押しないので、⁶⁾「江南遇天寶樂叟」詩の各韻字とは合致せず、出韻となる。では『江談抄』の記載は、「醉後走筆」詩を「江南遇天寶樂叟」詩と間違えたのだろうか。

この問題を解決するために、もう一度『江談抄』の記載を検證してみたい。先に引いた『江談抄』巻五の第二九九條に、白居易の「苑花」の一聯の他、もう一例を挙げて次のように言う。

又云、一以老年淚、泣灑故人文。又哭晦叔、唯將兩眼淚、一灑秋風襟云。

（又云く、一に老年の涙を以て、泣いて故人の文に灑ぐ。又晦叔を哭すの唯だ兩眼の涙を將て、一に秋風の襟に灑ぐと云々。）

「一以老年淚」の聯は、『白氏文集』巻五一「題故元少尹集後二首」其の一（二二二一六）に「唯將老年淚、一灑故人文」とあり、また、「唯將兩眼淚」聯は、『白氏文集』巻六二「哭崔常侍晦叔」（二九六六）詩では「唯將病眼淚、一灑秋風襟」と見え、いずれも若干の文字の異同がある。この例から考えれば、『江談抄』に言う「同詩」とは、兩作にある詩句が完全に一致することではなく、意境や句意などが近くて少し文字の差がある場合でも構わないと考えられるだろう。前述した「醉後走筆」の「宮花似雪從乘輿」一聯も、「苑花如雪隨行輦」一聯とやや異なる。

また、『江談抄』巻五の同じ條では、『許渾集』にある「同詩」のことも挙げて次のように言う。

僕問、許渾集、一樽酒盡青山暮、千里書廻碧樹秋之句、在二ヶ處。帥被答云、然也。

(僕問ふ、許渾集に、一樽酒は盡く青山の暮れ、千里書は廻る碧樹の秋の句、二ヶ處に在りと。帥答へられて云く、然りと。

『證注』によれば、『許渾集』のことは卷四第二八七條にも既出し、そこではこの一聯が『許渾集』の三ヶ所に見える」と指摘されている。だとすれば、白居易の「苑花」の一聯は「醉後走筆」詩に類似する句が見えるけれども、もともと「江南遇天寶樂叟」にも類似句があった可能性も捨てきれない。

白詩において重出する類似句の場合、前述の「一以老年淚」と「唯將兩眼淚」のごとく、若干の文字の異同を伴うことがあるので、「苑花」聯にも、同様の例が想定できるのではないか。この點に注意して、もう一度「苑花」聯を検證してみる。まず、「答馬侍御見贈」を次に挙げよう。

答馬侍御見贈 馬侍御の贈らるるに答ふ

謬入金門侍玉除 謬つて金門に入りて玉除に侍す

煩君問我意何如 君を煩はして我に問ふ意何如と

蟠木詎堪明主用 蟠木詎ぞ明主の用に堪へんや

籠禽徒與故人疏 籠禽徒に故人と疏なり

苑花似雪同隨輦 苑花は雪に似て同じく輦に隨ひ

宮月如眉伴直廬 宮月は眉の如く廬に直するに伴ふ

淺薄求賢思自代 淺薄賢を求めて自ら代はらんことを思ひ

嵇康莫寄絕交書 嵇康絶交の書を寄すること莫れ

「苑花」聯は、侍御史である白居易が御苑で君主に隨い、宮殿に夜勤することを描く。その句は、君主の身近に仕える樂叟を描寫する詩に用いられてもよい。ただ、「苑花」聯の後句の「直廬」は、官人が夜勤する時に泊

まる處を指しており、樂叟にとっては相應しくない。また、前述の通り、「江南遇天寶樂叟」の詩韻とも一致しない。即ち、白居易が「江南遇天寶樂叟」を作った時、「直廬」という語を使わず、樂叟の身分に相應しく、且つ詩韻にも合う二字の語を充てはめて、「苑花如雪隨行輦、宮月似眉伴○○」と表現した可能性が考えられるのである。

白居易の作品の中には、類似表現句を繰り返して使う例がしばしば見える。例えば、卷六二「立秋夕有懷夢得」(二九六五)に「一與故人別、再見新蟬鳴」とあり、卷六九「開成二年夏聞新蟬贈夢得」(三五〇九)には「十載與君別、常感新蟬鳴」とある。また、卷九「和元九悼往」(〇四二二)に「馨香與顔色、不似舊時深」とあり、卷一九「元家花」(一二七〇)には「稀稠與顔色、一似去年時」とある。「苑花」聯もその一例である。^⑦

もし、『江談抄』の「天寶樂叟長韻詩」一聯の引用に誤りがないことを前提とした以上の推測が成立するとなれば、「苑花」の一聯は「江南遇天寶樂叟」のどの部分に挿入すればよいだろうか。以下に「江南遇天寶樂叟」の全文を分段して挙げ、それを考察してみたい。なお、韻字には圈點を付した。

第一段は、安史の亂以前、天寶樂叟自身が玄宗に奉仕したことを述べる。

白頭病叟泣且言

白頭の病叟泣き且つ言ふ

祿山未亂入梨園

祿山未だ亂せざるとき梨園に入る

能彈琵琶和法曲

能く琵琶を弾じて法曲に和す

多在華清隨至尊

多く華清に在りて至尊に隨ふ

第二段は、安史の亂以前、天下の太平及び楊貴妃が寵愛される様子を描く。

是時天下太平久

是の時天下は太平なること久しく

年年十月坐朝元

年年の十月に朝元に坐す

千官起居環珮合

千官起居して環珮合し

萬國會同車馬奔。

萬國會同して車馬奔る

金鈿照耀石甕寺。

金鈿照耀す石甕寺

蘭麝熏煮温湯源。

蘭麝熏煮す温湯源

貴妃宛轉侍君側。

貴妃宛轉として君の側に侍し

體弱不勝珠翠繁。

體弱くして珠翠の繁きに勝へず

冬雪飄飄錦袍煖。

冬雪飄飄として錦袍煖かに

春風蕩漾霓裳翻。

春風蕩漾として霓裳翻る

第三段は、安史の亂及び玄宗の死去を述べる。

歡娛未足燕寇至。

歡娛未だ足らざるに燕寇至り

弓勁馬肥胡語喧。

弓勁く馬肥え胡語喧し

幽土人遷避夷狄。

幽土より人遷りて夷狄を避け

鼎湖龍去哭軒轅。

鼎湖より龍去りて軒轅を哭す

第四段は、樂叟が各地に飄零し、昔の君恩を思い出すことを描く。

從此漂淪到南土。

此れより漂淪して南土に到り

萬人死盡一身存。

萬人死し盡くして一身存す

秋風江上浪無限。

秋風江上浪限り無く

暮雨舟中酒一尊。

暮雨舟中酒一尊

涸魚久失風波勢。

涸魚久しく風波の勢いを失し

枯草曾沾雨露恩。

枯草曾て雨露の恩に沾ふ

第五段は、白居易自身が驪山・長生殿などの現状を述べる。

我自秦來君莫問
我は秦より來る君問ふこと莫かれ

驪山渭水如荒村。
驪山渭水荒村の如し

新豐樹老籠明月
新豐の樹は老いて明月を籠め

長生殿暗鎖黃昏。
長生殿は暗くして黃昏を鎖す

紅葉紛紛蓋欹瓦
紅葉は紛紛として欹瓦を蓋ひ

綠苔重重封壞垣。
綠苔重重として壞垣を封ず

唯有中官作宮使
唯だ中官の宮使と作る有り

每年寒食一開門。
毎年寒食に一たび門を開くのみ

以上五段の敘述の流れから考えれば、「苑花」聯は第一段の最後に挿入してよいと思われる。第一段の後半では、樂叟が琵琶を能く弾いて法曲と和し、華清池で君主に従ったという事實を敍べている。その後、當時の樂叟の生活を具象化して、「苑花似雪隨行輦、宮月似眉伴○○」と表現することで、以前の太平盛世の一斑を讀者に鮮明に傳えたのではないだろうか。

二、『白氏洛中集』の流傳

『江談抄』卷四第一七六條に、

鳳池後面新秋月、龍闕前頭薄暮山。白。同斐李文拜綸閣詩。

此詩可尋之、文集歟。洛中集歟。見卷集云々。或名紫集。

(鳳池の後面は新秋の月、龍闕の前頭は薄暮の山。白。斐李文の綸閣を拜す詩に同ず。

此の詩之を尋ぬべし。文集か。洛中集か。卷集に見ゆと云々。或いは紫集と名づく。）

とある（なお文中に擧げる「卷集」「紫集」は『證注』『大系』及び前掲甲田氏著ともに未詳とする）。

本條に引用される詩句は、「同斐李文拜綸閣詩」と題されているが、このままでは意味が取りにくい。『證注』によれば、この詩句は『白氏文集』や『全唐詩』には見えず、『千載佳句』上・四時部・早秋及び下・宮省部・禁中に「聞裴李二舍人拜綸閣」と題して載せられる。また、『和漢朗詠集』卷下・雜・禁中にも見えており、『江注』（『和漢朗詠集古注釋集成』^⑧第一卷、頁二〇一）は詩題を「題東北舊院小亭」に作り、『私注』（『集成』第一卷、頁五〇七）も「題東北舊院小亭」に作る。『江談抄』の「同斐李文拜綸閣詩」という詩題は、『千載佳句』の記載によって、原來は「聞裴李二舍人拜綸閣」であったと考えてよいであろう。

匡房が「聞裴李二舍人拜綸閣」について、『文集』（即ち『白氏文集』）と共に言及する『洛中集』は、どのような詩集なのであろうか。

『洛中集』は、『新唐書』卷六〇「藝文志四」總集類と『宋史』卷二〇九「藝文志八」總集類とに記載されている。前者には、『劉白唱和集』三卷、劉禹錫・白居易。『汝洛集』一卷、裴度・劉禹錫唱和。『洛中集』七卷。『彭陽唱和集』三卷、令狐楚・劉禹錫。『吳蜀集』一卷、劉禹錫・李德裕唱和」とあり、後者には、『洛中集』一卷」とあるが、兩者とも編集者の名は記載されていない。

白居易自ら『洛中集』に言及するものとして、『白氏文集』卷七〇「香山寺白氏洛中集記」（三六〇八）があり、それに『白氏洛中集』の存在を記述して「『白氏洛中集』者、樂天在洛所著書也」（『白氏洛中集』なる者は、樂天の洛に在つて著はす所の書なり）と述べている。また、下文に引用することく、卷數は「七卷」や「一卷」ではなく、「十卷」である。

陳尙君氏「唐人編選詩歌總集敍録」（『中國詩學』第二輯、南京大學出版社、一九九二）は、『新唐書』が記載する『洛中集』七卷は、白居易が編纂したものと推論する。一方、賈晉華氏『唐代集會總集與詩人群研究』（北京大學出版社、二〇〇一）は、「七卷」の記載を批判し、『新唐書』に見える『洛中集』「七卷」は、「一卷」

の誤りであり、『宋史』の記載に従うべきであると述べる。『新唐書』「藝文志」が記すように、『洛中集』は『劉白唱和集』三卷・『汝洛集』一卷に續いて著録されている。且つ、復元された『洛中集』^⑨作品の製作年が『汝洛集』と接續することから見れば、『洛中集』は、『汝洛集』が『劉白唱和集』三卷本に續くその第四卷であるのと同じように、『劉白唱和集』の第五卷であったと考えられる。^⑩つまり、『劉白唱和集』三卷・『汝洛集』一卷及び『洛中集』一卷は、白居易が會昌五年（八四五）「白氏集後記」（三六七三）に言及する五卷本『劉白唱和集』（後文に引用）を構成する作品集群であると賈晉華氏は結論づける（前掲書頁一〇六一—一〇七）。したがって、『新唐書』・『宋史』總集類に著録されている一卷本『洛中集』は別集の『白氏洛中集』ではないということになる。

ところで、日本の平安時代の文献には、『洛中集』に關する記載が一、二見られる。その一つである『西宮記』^⑪卷一一藏人所講書には、次のように記されている。

天慶五年八卅、於殿上、大學頭大江維時初講洛中集。

（天慶五年（九四二）八卅、殿上に於いて、大學頭大江維時初めて洛中集を講ず。）

維時が講義をした『洛中集』が、別集である『白氏洛中集』なのか、或いは總集である『洛中集』なのか、この條文だけではよく分からない。また、『後二條師通記』^⑫にも、

洛中集一卷、自左大辨所得。

（洛中集一卷、左大辨より得る所なり。）

とある。左大辨は大江匡房を指す。したがって、ここに見える「洛中集一卷」と『江談抄』に見える『洛中集』とは、同一書である可能性が高い。匡房が所持する一卷本『洛中集』は、前述した『新唐書』「藝文志」・『宋史』「藝文志」總集類に著録されている「『洛中集』一卷」（即ち『劉白唱和集』第五卷）ではないだろうか。

もし、その推測が成立するとすれば、世襲化する「家學」を保持する江家の傳統を考えると、『西宮記』に記

載される匡房の祖先の維時が所有した『洛中集』も、總集『洛中集』一卷であったかもしれない。

一卷本『洛中集』の他に、別集の『白氏洛中集』十卷本も平安期に存在した。ただし現存していないが、その成立過程を詳述する資料として「香山寺白氏洛中集記」（卷七〇、三六〇八）がある。

白氏洛中集者、樂天在洛所著書也。大和三年春、樂天始以太子賓客分司東都、及茲十有二年矣。其間賦格律詩凡八百首、合爲十卷。今納於龍門香山寺經藏堂。（中略）大唐開成五年十一月二日、中大夫、守太子少傅、馮翊縣開國侯、上柱國、賜紫金魚袋白居易樂天記。

（白氏洛中集なる者は、樂天の洛に在つて著はす所の書なり。大和三年の春、樂天始めて太子賓客を以て東都に分司し、茲に及びて十有二年なり。其の間、格律詩を賦すること、凡そ八百首、合はせて十卷と爲す。今、龍門香山寺經藏堂に納む。（中略）大唐開成五年十一月二日、中大夫、守太子少傅、馮翊縣開國侯、上柱國、賜紫金魚袋白居易樂天記す。）

白居易の所謂「格律詩」は、現在の今體詩を意味する「格律詩」の概念とは異なり、古近體詩の全體を指している。^⑭ 花房英樹氏「繫年表」^⑮によれば、現存する白氏詩文に於ける、大和三年（八二九）から開成五年（八四〇）までの十二年間に作られた詩歌作品の数は、おおよそ八百首前後であり、^⑯『白氏洛中集』の収録數とほぼ一致する。また「白氏集後記」（卷七一、三六七三）には次のようにいう。

集有五本。（中略）其日本、新羅諸國及兩京人家傳寫者、不在此記。又有元白唱和因繼集共十七卷・劉白唱和集五卷・洛下游賞宴集十卷、其文盡在大集內。錄出、別行於時。若集內無而假名流傳者、皆謬爲耳。

（集に五本有り。（中略）其の日本、新羅の諸國及び兩京の人家の傳寫する者、此の記に在らず。又元白唱和因繼集共に十七卷・劉白唱和集五卷・洛下游賞宴集十卷有り、其の文盡く大集内に在り、錄出し、別に時に行はる。集内に無くして名を假りて流傳する者の若きは、皆謬りて爲すのみ。）

この「白氏集後記」は、白居易が最晩年の會昌五年（八四五）に『白氏文集』七十五卷という大きな全集を

編纂した後に、その編纂作業について詳しく記述した文章である。この「後記」において白居易は、『元白唱和因繼集』・『劉白唱和集』等の唱和集や、日本・新羅諸國の鈔本の存在にも觸れているが、「八百首」「十卷」のような大きな規模を有していた『白氏洛中集』については一切言及していない。

『白氏文集』七十五卷は、周知の通り、前集・後集・續集の三部分で構成されている。その後集（即ち卷五一から卷七〇まで）の部分は、大和九年（八三五）十卷本・開成元年（八三六）十五卷本・開成四年（八三九）十七卷本を経て、最後に會昌二年（八四二）の定本二十卷となった。前三種の後集各本は、『白氏文集』後集部分の中間的産物とみなして良いと思われる。それらの後集諸本は前集と合されて全て諸寺院に送られており、白居易が文集を保存しようとしていたことが窺える^⑩。また、『白氏洛中集』も編纂された後、すぐ龍門香山寺に送られたことから見れば、『白氏洛中集』も『白氏文集』の『後集』の中間的産物であると言ってよいであろう。『白氏洛中集』が収録する作品も、六十卷本・六十五卷本等と同様に、すべて『白氏文集』大全集の『後集』部分に含まれている。だから、大全集が成立した後、「後記」にわざわざ『白氏洛中集』に言及する必要がなかったのである。

別集である十卷本『白氏洛中集』は、中國歴代の書誌には一切記載されていないが、早く日本に傳來した。平安中期に成立した『菅家後集』（『日本古典文學大系』本、川口久雄校注、岩波書店、一九六六）「詠樂天北窗三友詩」に、

白氏洛中集十卷、中有北窗三友詩。

（白氏洛中集十卷、中に北窗三友詩有り。）

とあり、ここに別集『白氏洛中集』十卷が言及されている。また、平安中期の源爲憲が著した『世俗諺文』（『俚諺資料集成』本、ことわざ研究會編、大空社、一九八八）^⑪「文士數奇、詩人薄命」條には、

白氏洛中集序云、古人有言曰、文士數奇、詩人薄命、誠哉斯言。

(白氏洛中集序に云ふ、古人言有りて曰く、文士數奇、詩人薄命、誠なるかな斯の言。)

という。ここに引用される「白氏洛中集序」の一節は、前述の「香山寺白氏洛中集記」には見出せないが、白居易が大和八年に作った「序洛詩」(二九四二)に類似する内容が見えている。「序洛詩」には次のように述べる。

敘洛詩、樂天自序在洛之樂也。(中略)世所謂文士多數奇、詩人尤薄命、於斯見矣。(中略)自三年春至八年夏、在洛凡五周歲、作詩四百三十二首。(中略)甲寅七月十日云爾。

(敘洛詩は、樂天自ら洛に在るの樂しみを序す。(中略)世の所謂る文士は多く數奇、詩人尤も薄命とは、斯に於いて見る。(中略)三年の春より八年の夏に至るまで、洛に在ること凡そ五周歲、詩を作ること四百三十二首。(中略)甲寅七月十日爾云ふ。)

「序洛詩」は白居易が大和三年(八一九)から大和八年(八三四)まで洛陽に滞在していた時の詩を編纂した作品集の序文であり、収録されている詩は四百三十二首である。「香山寺白氏洛中集記」と「序洛詩」に記載する年代と作品の數とを對照してみると、「序洛詩」は開成五年に成立した『白氏洛中集』の稿本であることが窺える。また、芳村弘道氏「白居易の墓誌自撰」(『唐代の詩人と文獻研究』、中國藝文研究會、二〇〇七)によれば、『白氏洛中集』の序が「序洛詩」の後半の一節を用いた修補の文であることも明らかである。『世俗諺文』が引用する「白氏洛中集序」は、大和八年(八三四)に成立した『白氏洛中集』稿本の序文である「序洛詩」に少し修改を加えたものであろう。

さらに『和漢朗詠集』卷下「佛事」類に、

願以今生世俗文字業、狂言綺語之誤、翻爲當來世々讚佛乘之因、轉法輪之緣。香山寺／白氏洛中集記

(願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤りを以て、翻つて當來世々讚佛乘の因、轉法輪の緣と爲さん。香山寺／白氏洛中集記)

とあり、「誤」「翻」二字は、現存する『白氏文集』の諸刊本及び寫本では、皆「過」「轉」に作る。¹⁸『和漢朗詠集』の「香山寺白氏洛中集記」の異文は、『白氏文集』後集が成立する前の本、即ち單行していた十卷本『白氏洛中集』から出たものと推測できるのではないだろうか。

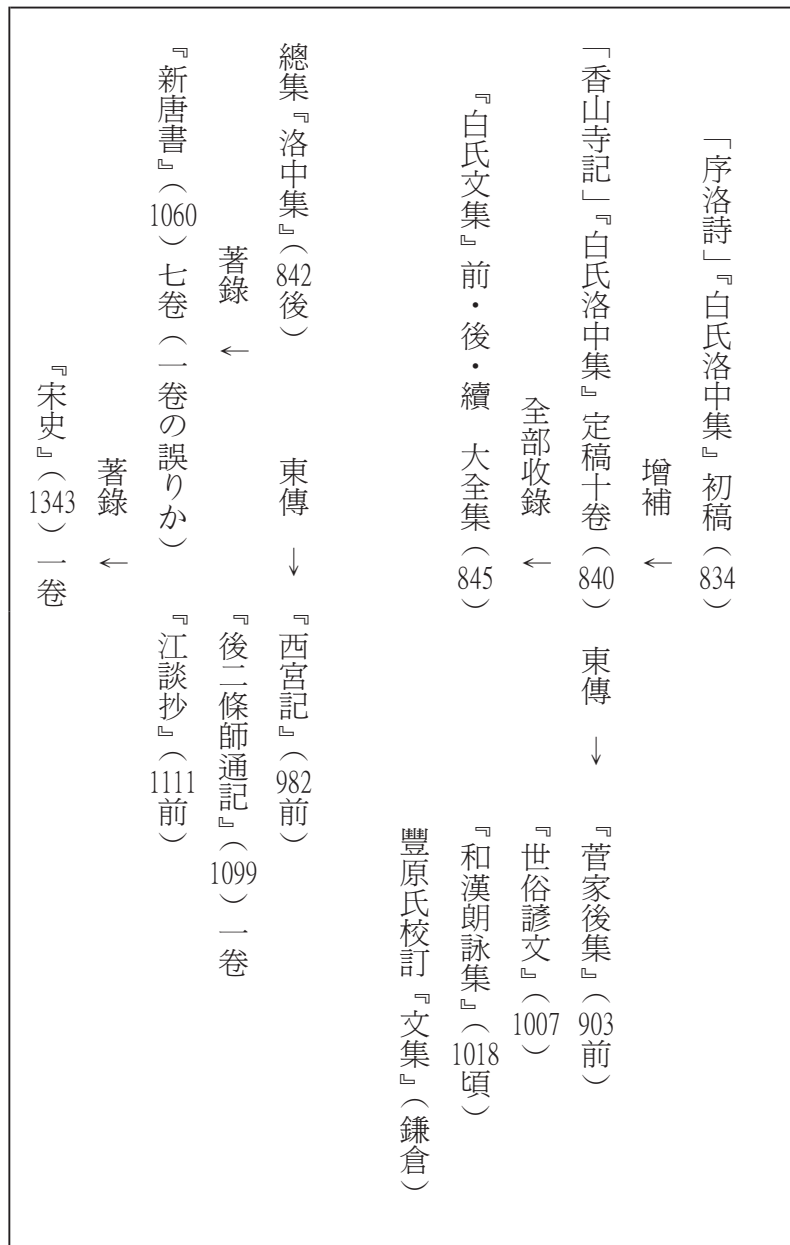
また、現存する金澤本『白氏文集』（川瀬一馬監修、勉誠社、一九八三―一九八四）には、鎌倉時代初期の豊原奉重が加える校訂が残されている。そのうち、『洛中集』に言及する部分が三ヶ所見える。卷五二「閑夕」（二三〇五）「心中無細故」の「細」に、「洛中作他字」と注する。卷六五「池上二絶」其二（三三二〇）「小娃撐小艇」の「撐」に、「洛集及他本作棹」と注する。卷六八「感舊石上字」（三四二九）「十五年前陳結之」の「陳」に、一本は「塵」に作るが、「洛作陳結之」と注する。「閑夕」¹⁹は大和六年（八三二）、「池上二絶」は大和九年（八三五）、「感舊石上字」は開成四年（八三九）に作られ、三作いずれも洛陽滯在中の詩であるので、²⁰『白氏洛中集』に収録されていた可能性がある。

『劉禹錫年譜』（『卞孝萱文集』第一卷、鳳凰出版社、二〇一〇）によれば、現存する劉禹錫集の中に、大和六年（八三二）・大和九年（八三五）及び開成四年（八三九）に、以上の三作と唱和する作品は見出されない。また、花房英樹氏や柴格朗氏が復元した『劉白唱和集』では、いずれも三作を収録していない。²¹三作の題目及び内容を吟味しても、唱和詩ではないことは明らかである。故に、豊原奉重が利用した『洛集』は、別集である十卷本『白氏洛中集』と推測される。中國で早くに散佚した『白氏洛中集』は、日本の鎌倉時代に至ってもまだ流傳していたことが分かるのである。

以上、日中兩國の資料をもとに、『白氏洛中集』及び『洛中集』の流傳を示すと、次頁の圖のような流れになる。

別集である『白氏洛中集』は、早くから日本に傳來し、平安時代の代表的知識人である菅原道真がその完本を手に入れ、集中に収録されている作品を手本として詩を作っている。源爲憲が『世俗諺文』を編纂した際には、『白氏洛中集』の序文を引いて「文士數奇、詩人薄命」という語を擧げており、平安中期、『白氏洛中集』

の序文が人々に熟讀されていたことが推測できる。また、豊原奉重が『白氏洛中集』を利用して『白氏文集』を校訂したことから、鎌倉時代に『白氏洛中集』がなお存在しており、その本文の価値がよく認められていたことが窺えるのである。



また、總集である『洛中集』も、日本に傳來していた。平安後期の大學頭である大江維時が、『洛中集』について講義をしている。その後、院政期に活躍した大江匡房が、白氏詩文の出所を探求する際に、『洛中集』と『白氏文集』との兩方に言及しているのである。當時、『洛中集』がいかに重んじられていたかが窺えよう。今

後、日本における『白氏文集』の傳來を研究する際には、『白氏文集』だけでなく、『白氏洛中集』及び『洛中集』といった單行の傳本の存在についても見逃してはならないであろう。

三、白居易『賦買嵩』質疑

『江談抄』卷六第三七三條に次のようにある。

曉入梁王之苑、雪滿群山。夜登庾公之樓、月明千里。白賦。買嵩。

檢秋賦、登字作歸字。雪滿群山、是文選文也。

（曉に梁王之苑に入れば、雪群山に滿つ。夜に庾公の樓に登れば、月千里に明らかなり。白賦。買嵩。秋の賦を檢するに、登の字を歸の字に作る。雪群山に滿つは、是れ文選の文なり。）

前掲の陳狝氏「日本古文獻『江談抄』所見全唐佚詩句輯考」は、本條に引用されている「曉入梁王之苑」聯の出典注を、「白賦、買嵩」ではなく「白、賦買嵩」と解し、「曉入梁王之苑」聯は、白居易の「賦買嵩」の逸文であると論じている。

だが筆者は、陳狝氏のこの結論には問題があり、「曉入梁王之苑」聯は白居易の逸文ではないと考える。以下この點について論じてみたい。

阮閱『增修詩話總龜』（『四部叢刊』初編本）卷四四に、

寇豹、不知何許人。與謝觀同在唐崔裔孫相公門下、以詞藻相尙。謂觀曰、君白賦有何佳語。對曰、曉入梁王之苑、雪滿群山。夜登庾亮之樓、月明千里。豹唯唯。

（寇豹は、何許の人なるかを知らず。謝觀と同じく唐の崔裔孫相公の門下に在りて、詞藻を以て相ひ尙ばる。觀に謂ひて曰く、君の白賦に何の佳語有るか。對へて曰く、曉に梁王之苑に入れば、雪群山に滿つ。

夜に庾亮の樓に登れば、月千里に明らかなりと。豹唯唯たり。）

とある。また宋・曾慥『類說』（藝文印書館『類書叢編』所收本）卷二七所載の『南唐野史』の「白賦赤賦」條、さらに宋・文天祥『文山先生集』（『四部叢刊』初編本）卷一二「五色賦記」にも、同じ話が掲載されている。諸書の記載によれば、「曉入梁王之苑」聯は、謝觀が著した「白賦」の「佳語」であることが明らかである。ただ「白賦」の作者については、『江談抄』は賈嵩とし、『詩話總龜』及び『類說』は謝觀と記載する。唐・林寶『元和姓纂』（岑仲勉『元和姓纂四校記』、中華書局、一九九四）・『古今姓氏書辨正』（宋・鄧名世撰、王力平點校、江西人民出版社、二〇〇六）によれば、唐代には「賈」という姓は存在していない。²²「賈」と「賈」の二字は字形が近いことを考えると、『江談抄』に見える賈嵩は、恐らくは晚唐時代の文人である賈嵩の誤記であろう。

『詩話總龜』及び『類說』などに言う「白賦」とは、南北朝以來發達したいわゆる「大言賦」の一種である。「大言賦」とは、誇張という修辭技法（即ち「大言」）を驅使し、對象物の特徴を最大限に表現する賦である。「大言」の技法は、賦だけではなく、詩にもよく用いられる。周一良氏『魏晉南北朝史札記』所載「晉書札記」の「習鑿齒與釋道安之對話」條には、その文學形式の起源及び變遷が詳しく整理されている。²⁴

謝觀（或いは賈嵩）が「白賦」中の「佳語」として自慢する「曉入梁王之苑」聯の「雪滿群山」「月明千里」は、共に「白」（しろさ）を表現する壯大な景色である。「曉入梁王之苑」聯は『和漢朗詠集』卷上にも載録されておられ、佐藤道生氏は「雪・月で賦題の白を表す」と注釋する（明治書院、二〇一一、頁一二二）。『江談抄』に引用される「白賦」は、白居易が作った賦ではなく、「白賦」と題する文學作品と解すべきなのである。

陳翀氏は、『江談抄』に引かれている「曉入梁王之苑」聯が白居易『賦買嵩』の一部であることを證明する爲に、二つの根拠を擧げているが、この根拠はいずれも成立しないであろう。

陳翀氏が據り所とする一は、「買嵩」の典據である。『晉書』卷一一四「王猛傳」に、

少貧賤、以鬻畚爲業。嘗貨畚於洛陽、乃有一人貴買其畚、而云無直。自言、家去此無遠、可隨我取直。猛利其貴而從之、行不覺遠、忽至深山、見一父老、鬚髮皓然、踞胡床而坐。左右十許人、有一人引猛進拜之。父老曰、王公何緣拜也。乃十倍償畚值、遣人送之。猛既出、顧視、乃嵩高山也。

(少くして貧賤にして、畚を鬻ぐを以て業と爲す。嘗て畚を洛陽に貨るに、乃ち一人の貴くして其の畚を買ふ有りて、而れども直無しと云ふ。自ら言ふに、家、此を去ること遠きこと無し、我に隨ひて直を取るべしと。猛は其の貴きを利として之に従ふ。行くこと遠きを覺えずして、忽ち深山に至り、一父老を見るに、鬚髮皓然として、胡床に踞りて坐す。左右十許りの人、一人有りて猛を引き進みて之に拜せしむ。父老曰く、王公、何に緣りてか拜するやと。乃ち十倍にして畚の値を償い、人をして之を送らしむ。猛既に出でて、顧視すれば、乃ち嵩高山なり。)

とあり、王猛が畚を販賣する逸話を記載する。陳翽氏はこの逸話が「買嵩」と略稱されることを論じているが、「買嵩」とは嵩山を買うという全く有り得ない意味の語となるであろう。

詩文において「王猛傳」の逸話を用いる時には、しばしば「賣畚」に作り、才能を持っている人がまだ意を得ない状況を描くのが常である。例えば、李白の「留別王司馬嵩」詩²⁶に、「呼鷹過上蔡、賣畚向嵩岑」に作る。また、管見の範囲²⁶では、「買嵩」という語は用例を全く見出すことができなかった。

陳翽氏が第二の據り所とするのは、宮内廳書陵部所藏の傳藤原行成筆『御物粘葉本和漢朗詠集』(『日本名筆選』八一九、二玄社、一九九三)である。『和漢朗詠集』卷上「冬・雪」條には、「曉入梁王之苑」句を載録し、「白賦」と注する。その後には、「銀河沙漲三千里、梅嶺花排一萬株」聯と「雪似鵝毛飛散亂、人被鶴鰓立徘徊」聯を收め、共に「白」と注する(本文末尾の圖一を参照)。「銀河」と「雪似」の二聯は、那波本『白氏文集』にも収録され、前者は卷五三「雪中卽事寄微之」(二二二二)の第二聯であり、後者は卷六六「酬令公雪中見贈訝不與夢得同相訪」(三三九四)の起・承二句の對句である。「白」の注が白居易を指すことは疑いない。しかし、陳翽氏がこのことを根據として、「白賦」まで白居易の賦と解釋するのは、妥當ではないであらう。

う。

『和漢朗詠集』は藤原公任の撰であり、二卷から成る。卷上の部分は、春・夏・秋・冬に分かれており、各部分にはまた様々な主題で細分されている。「曉入梁王之苑」聯は、卷上の冬の終わりから三番目の「雪」部の冒頭に置かれている。『和漢朗詠集』に白詩を初めて引用するのは、卷上の春・立春部の「柳無氣力條先動、池有波文氷盡開」の一聯であり、注は単に「白」だけである。さらに、『粘葉本和漢朗詠集』の作者名注記を檢視してみると、白氏詩文を引用する時に、ただ「白」と注するのみであり、「白賦」や「白詩」と注する例は見られない。「曉入梁王之苑」聯にわざわざ「白賦」と記載する必要はないと考えられる。

また、『粘葉本和漢朗詠集』の注では、作品名と作者名を併せて注することが時々あるが、その場合、作品名と作者名との順番で、二行に分けて注する。例えば、「夏・蟬」部には、「遲遲兮春日」文を引用して、「麗宮高／白」と注されており、これは白居易が作った「麗宮高」と解釋してよい（圖二を参照）。もし、陳翀氏の所論が成立するとすれば、「曉入梁王之苑」句の注も「賦買嵩／白」と作っている筈であろう。

『江談抄』卷六「曉入梁王之苑」條は古本系『江談抄』に見えず、その後半の部分は『和漢朗詠集』江注から出たものであると黒田彰氏は考證する。現存する『朗詠江注』の「曉入梁王之苑」聯²⁷を檢してみると、ひとしく「白賦／謝觀」に作り、「買嵩」に言及していない。だが、『江談抄』が『和漢朗詠集』「曉入梁王之苑」聯を編入した際に、何らかの資料によって「賈嵩」（「買嵩」に誤る）の二字に變更したのかもしれない。賈嵩は晩唐時代の文人であり、趙嘏「成名年獻座主僕射兼呈同年」（『全唐詩』卷五四九）詩には、「賈嵩詞賦相如手」と賈嵩の文才を稱賛する。又、『崇文總目』（『粵雅堂叢書』所收の清・錢東垣輯釋本）卷五には「『賈嵩賦』二卷」、『新唐書』卷六〇「藝文志」には「『賈嵩賦』三卷」と著録し、彼が賦作に優れていたことが分かる。『江談抄』の記載は全く根據がないとは言えない。

しかし、「曉入梁王之苑」の聯を賈嵩の作であると記載するのは、『江談抄』卷六第三七三條しかない。前述する『増修詩話總龜』・『類說』・『文山集』及び『和漢朗詠集』江注の他に、東京大學本『和漢朗詠集私注』

は「白賦、謝觀」（『集成』第一卷、頁四五八）、黒木本『和漢朗詠註略抄』は「謝□」（『集成』第一卷、頁七五九）、書陵部本『朗詠抄』は「謝觀カ白ノ賦也」（『集成』第二卷下、頁四〇四）、廣島大學本『和漢朗詠集假名注』は「白賦／謝觀」（『集成』第二卷下、頁六六三）、『和漢朗詠集永濟注』は「白賦／謝觀」（『集成』第三卷、頁一三〇）と注釋する。また、『和漢朗詠集』卷下「白」類に「秦皇驚嘆」聯が收録され、「白賦／謝觀」と注しているのも、同じ「白賦」の句であろう。これらの記載例と注釋例から見れば、「曉入梁王之苑」の聯は謝觀の作った「白賦」の一部であるとすべきであろう。

謝觀は晩唐時代の文人であり、自撰の墓誌銘^⑩が現存しており、その中で謝觀は「尤工律賦、似得楷模。前輩作者、往々見許」（尤も律賦に工みにして、楷模を得るに似たり。前輩の作者も、往々にして許さる。）と自贊している。また、『崇文總目』卷五には「『謝觀賦』八卷」、『新唐書』卷六〇「藝文志」には「『謝觀賦』八卷」、「通志」（中華書局、一九九五）卷七〇「藝文略第八」には「『謝觀賦』八卷」と著録する。『和漢朗詠集』には「白賦」の他に、謝觀が作った「清賦」^⑪「曉賦」^⑫も收録されており、いずれも「白賦」と同じように、「大言賦」の技法を驅使したもので、自撰墓誌銘の言うとおり謝觀が賦を得意としていたことがよく窺えるのである。

むすびとして

以上、『江談抄』の資料に基づいて、白居易に關する二つの問題を考察してみた。『江談抄』は、『白氏文集』の諸本には現存していない「江南遇天寶樂叟」詩の佚句を記載しており、白詩の本文の複雑さを示している。白居易が生涯に亙って自分の作品に變更や加筆を加えていることから考えれば、『江談抄』などに保存されている現存する諸本と相違する本文は、單なる誤寫とのみ考えるのではなく、白氏詩文の早期の形である可能性も捨てきれないであろう。

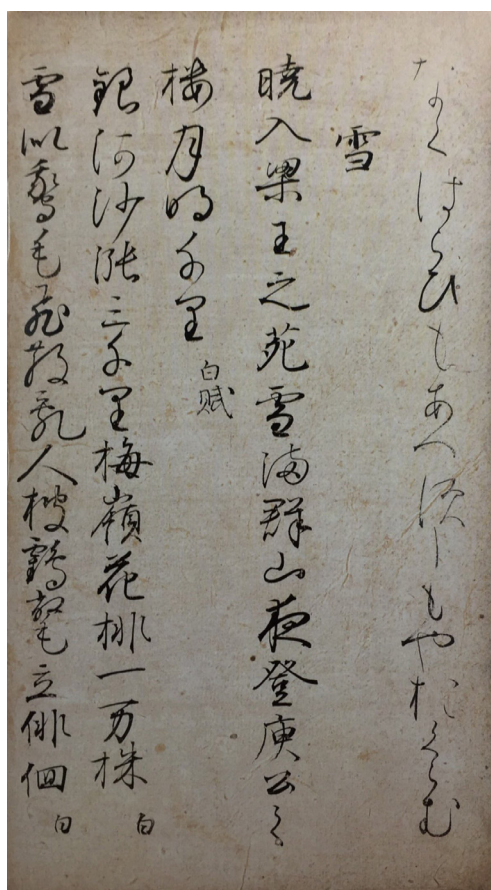
また、『江談抄』を代表とする日本側の資料には、『洛中集』や『白氏洛中集』に言及する記載が幾つか見出

され、『白氏洛中集』、『洛中集』が早く日本に傳來したことを伝える。こうした資料は、白氏詩文の流傳について多くの示唆を我々に與えてくれるであろう。

『江談抄』には、白居易の作品に關する記事が多くあり、『白氏文集』の考察に重要な役割を果たす。ただし、『江談抄』を利用する際には、細かく考證する必要がある。その一例となるのが卷六の「曉入梁王之苑」という「白賦」の一聯である。『江談抄』は作者を「賈嵩」とするが、これは「賈嵩」の形近の譌りと判断できる。さらに、諸資料によれば、作者は賈嵩ではなく、謝觀とすべきである。なお、「白賦」を白居易の賦と見なす論があるが、これは誤解であり、「白賦」は白色を主題とした賦作品の篇題であって、決して白居易の賦の佚文ではない。

『江談抄』には白居易に關する資料が多く存在しているが、その中にはまだ正確に解釋されていない資料も残されており、今後、さらに検討する必要があると思われる。

圖一



釋文

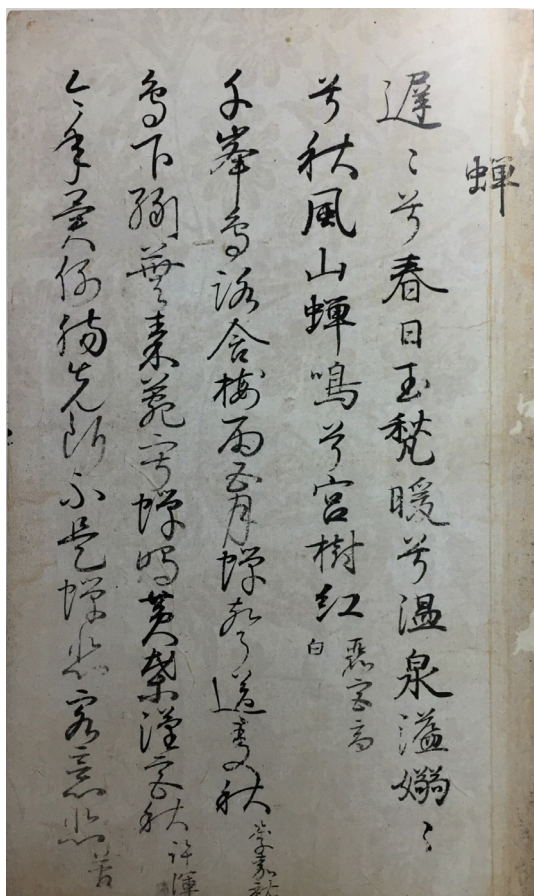
雪

曉入梁王之苑、雪滿群山。夜登庾公之樓、月明千里。白賦。

銀河沙漲三千里、梅嶺花排一萬株。白。（那波本『白氏文集』卷五三）

雪似鵝毛飛散亂、人被鶴氅立徘徊。白。（那波本『白氏文集』卷六六）

圖二



釋文

蟬

遲々兮春日、玉盤暖兮溫泉溢。嬾々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅。麗宮高／白。

- ① 『江談抄』は古本系と類聚本系とに分かれている。小論では類聚本系『江談抄』を利用する。
- ② 益田勝實氏「『江談抄』の古態」（『日本文學誌要』一五號、法政大學國文學會、一九六六）・山根對助氏「『江談抄』成立論」（『國語國文研究』三二號、北海道大學、一九八八）参照。
- ③ 小論引用の作品番號は、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（修訂再版、朋友書店、一九七四）の「總合作品表」に従う。
- ④ 小論引用の『白氏文集』の作品は、下定雅弘・神鷹徳治編『那波本白氏文集』（勉誠出版、二〇一二、宮内廳書陵部所藏那波本の影印）に依據した。
- ⑤ 甲田利雄氏『校本江談抄とその研究』卷上（續群書類從完成會、一九八七—一九八九）、頁三五〇。『大系』は甲田利雄氏の説を引用する（頁一〇五）。
- ⑥ 王力氏『漢語詩律學』（『王力全集』第一四—一五卷所收、山東教育出版社、一九八九）、頁四〇七。
- ⑦ 白居易の作品に於ける類似表現については、今後の研究課題としたい。
- ⑧ 伊藤正義・黒田彰兩氏編『和漢朗詠集古注釋集成』（大學堂書店、一九八九—一九九七）。以下、『集成』と略稱。
- ⑨ 賈氏前掲書および柴格朗譯注『劉白唱和集』（勉誠出版、二〇〇四）参照。
- ⑩ 花房英樹氏は、『汝洛集』を復元し、『汝洛集』は『劉白唱和集』の第四卷であると推測している（『白氏文集の批判的研究』、頁三二三—三四一）。賈氏前掲書および柴氏前掲書は『洛中集』を復元し、『劉白唱和集』の第五卷であるとしている。
- ⑪ 前田育徳會尊經閣文庫編、『尊經閣善本影印集成』本、八木書店、一九九三—一九九五。
- ⑫ 東京大學史料編纂所編、『大日本古記録』本、岩波書店、一九七八。
- ⑬ 「格詩」「律詩」の概念については、下定雅弘氏の説を参照する（『白氏文集を読む』、勉誠社、一九九六、頁四三八—四三九）。
- ⑭ 前掲『白氏文集の批判的研究』収録。

⑮ 現存する『白氏文集』には、散佚した部分があるので、多少の差がある。

⑯ 『白氏文集』巻六一「東林寺白氏文集記」(二九四八)に「今余前後所著文大小合二千九百六十四首、勒成六十卷。編次即畢、納於藏中、卷六一「聖善寺白氏文集記」(二九四九)に「其集七帙六十五卷、凡三千二百五十五首」、卷六一「蘇州南禪院白氏文集記」(二九五五)に「有文集七帙、合六十七卷、凡三千四百八十七首」、卷六九「送後集往廬山東林寺兼寄雲舉上人」(三五九八)に「後集寄將何處去、故山迢遞在匡廬」等とある。

⑰ 金子彦二郎氏『平安時代文學と白氏文集：句題和歌・千載佳句研究篇』(培風館、一九五五)は、『世俗諺文』に於ける『白氏洛中集』に關する資料を初めて利用している(頁八八)。

⑱ 平岡武夫・今井清校定『白氏文集』(京都大學人文科學研究所、一九七二)・謝思煒校註『白居易文集校註』(中華書局、二〇一一)参照。

⑲ 那波本は「閑多」に作る。

⑳ 前掲の花房英樹氏「繫年表」を参照した。

㉑ 前掲の花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』(頁三三三―三四〇)及び柴格朗譯注『劉白唱和集』。

㉒ 五代以降には、「買」を姓として使う希少な例が見られる。巫聲惠氏編『中華姓氏大典』(河北人民出版社、二〇〇〇、頁七二四)参照。

㉓ 陳狃氏「日本古文獻『江談抄』所見全唐佚詩句輯考」は、賈嵩の生涯を紹介する。

㉔ 周一良氏『魏晉南北朝史劄記』(中華書局、一九八五、頁九六一―九七)参照。

㉕ 元版『分類補注李太白文集』(『古典研究會叢書』本、汲古書院、二〇〇五―二〇〇六)による。宋版『李太白文集』(『古典研究會叢書』本、汲古書院、二〇〇六)は「畚」を「蠶」に誤っており、清の繆曰芑本は「畚」に訂正している。また、『李翰林集』(劉氏玉海堂本)も「畚」に作る。

㉖ データベース「中國基本古籍庫」を参照した。

㉗ 黒田彰氏『中世説話の文學的環境』(和泉書院、一九八七)、頁一四・二〇。

- ⑳ 江注は次の二書を参照した。伊藤正義・黒田彰兩氏編『和漢朗詠集古注釋集成』（大學堂書店、一九八九―一九九七）。佐藤道生氏『和漢朗詠集：三河鳳來寺舊藏曆應二年書寫：影印と研究』（勉誠出版、二〇一四）。
- ㉑ 古本系『江談抄』には、この一文が見られない。
- ㉒ 咸通〇六四「唐故朝請大夫慈州刺史柱國賜緋魚袋謝觀墓志銘」（周紹良編『唐代墓誌彙編』、上海古籍出版社、一九九二）。
- ㉓ 『和漢朗詠集』卷下「猿」類。
- ㉔ 『和漢朗詠集』卷下「曉」・「水」類、一に張讀に作る。

謝辭

『御物粘葉本和漢朗詠集』（『日本名筆選』八・九、二玄社、一九九三）書影の掲載を許可して下さった宮内廳三の丸尙藏館、ならびに二玄社の各位に厚く御禮申し上げます。

第二章 『天寶集』について

はしがき

唐代の佚書である『天寶集』は中國側の資料には全く痕跡を留めないが、古書誌の著録によつて、『天寶集』が早くから日本に傳來したことが知られる。『日本國見在書目録』（古典保存會、一九二五。以下、『見在目』と略稱）「惣集家」には、

天寶く三、くくく九。

（天寶集三、天寶集九。）

と見える。日本における『見在目』に關する論著は相當存在しているが、管見の限り、『天寶集』を考察する内容は殆ど見出されない。^①ただ、矢島玄亮氏『日本國見在書目録：集證と研究』（汲古書院、一九八四）は、『見在目』所收の『天寶集』三卷本と九卷本とは「同類か」と推論している。^②また、同著書に矢島氏が引用するごとく、『通憲入道藏書目録』（『日本書目大成』本、以下、『通憲目』）と略稱）に次のように記されている。

『天寶文苑集』六弓。朽損。

(『天寶文苑集』六弓。朽損す。)

矢島氏の『通憲目』の引用には詳しい解説を付していないが、恐らく『天寶文苑集』は『天寶集』と省略しない書名であると考えられる。『通憲目』著録の『天寶文苑集』六卷本は「朽損」していることから見れば、その本は『見在目』所収の『天寶集』九卷本の殘缺本と見做してよい。さらに、『見在目』所収の三卷本も九卷本が殘缺したものであるかもしれない。

『天寶集』の存在が中國側の研究者に初めて注目されたのは、陳尙君氏「唐人編選詩歌總集敍録」(『中國詩學』第二輯、南京大學出版社、一九九二)^③である。陳氏は『天寶集』の編纂者や年代・收録内容は不詳であるので、さらに考訂する必要があると論じている。しかし、陳氏が『見在目』によって「『天寶集』三卷、又九集」と著録するのは、恐らくは原文の誤讀であると思われる。

孫猛氏『日本國見在書目錄詳考』(上海古籍出版社、二〇一五)は『見在目』研究の集大成と評しうる大著であるが、「天寶集」の條には『通憲目』を引用しているだけである。また、『天寶集』が『舊唐書』『新唐書』に見られず、その内容は不詳であると孫氏は述べている。^④

『天寶集』は散佚したが、ごく僅かな佚文が『和漢朗詠集』や『李嶠雜詠』などの古注釋に遺されている。ところが、その存在は今までの研究者にあまり注意されていないようである。唯一、福田俊昭氏『李嶠と雜詠詩の研究』(汲古書院、二〇一二)は『李嶠雜詠』の注釋本である陽明文庫藏『註百詠』から『天寶集』佚文を蒐集するが、二條の佚文を輯録されたに過ぎない。小論は『和漢朗詠集』及び『李嶠雜詠』などの古注釋に

伝えられた『天寶集』の佚文を利用し、『天寶集』の成立と収録内容について考察を試みるものである。

一、『和漢朗詠集』古注釋に引く『天寶集』の佚文

1、佚文内容

『和漢朗詠集』卷上「雁・付歸雁」三二七番（以下、「雁」詩と略稱^⑤）には、

萬里人南去 萬里に人南に去る

三春雁北飛^⑥ 三春に雁北に飛ぶ

不知何歲月 知らず何れの歲月にか

得與汝同歸 汝と同じく歸るを得む

という作品がある。「雁」詩の典據について、釋信救の『和漢朗詠集私注』（東京大學本、以下、『私注』と略稱）には次のように注記している。^⑦

天寶集詩。唐玄宗皇帝天寶末歲、楊國忠爲相、召軍令征雲南王閣羅風。文集曰、無何天寶大徵兵、戶在三丁抽一丁、點將驅向何處去、五月萬里雲南行。又曰、尸秋南來春北歸也。

（天寶集の詩に、唐の玄宗皇帝天寶末の歲に、楊國忠、相と爲して軍を召して雲南王閣羅風を征するを令す。

文集に曰く、何んすること無く、天寶大いに兵を徴し、戸ごとに三丁在れば一丁を抽ぶ。點し將て驅りて何處にか向い去らしむ。五月萬里、雲南に行く。又曰く、尸、秋は南に來たり、春北に歸るなり。）

『私注』より早く成立した『和漢朗詠集江注』（天理本、以下、「江注」と略稱）には「雁」詩の典據について、

南中詠雁絶句、韋承慶云々、唐詩類撰第六／李陵

（南中雁を詠ずる絶句、韋承慶云々、唐詩類撰第六／李陵）

と見える。ここに言及される『唐詩類撰』は、唐人の顧陶が編纂した『唐詩類選』の別稱である。この『江注』によれば、「雁」詩が『唐詩類撰』に収録されていたことが分かる。^⑧

藤原公任が『和漢朗詠集』を編纂した當時、何の本によって「雁」詩を採録したかは別問題であるが、『私注』によれば、『唐詩類撰』ではなく、『天寶集』に収録されていることが窺える。また、『私注』の後の注釋である『和漢朗詠注略鈔』^⑨や『和漢朗詠集永濟注』^⑩にも類似する内容が見出されるが、『私注』から影響を受けたものであろう。

『和漢朗詠集私注』の成立及び『江注』との關係について、まだ定説となるには至っていないが、撰者の釋信救が『江注』以外、「菅家家學としての朗詠注」^⑪や「式家をはじめとする藤家の「朗詠」に關する注說」^⑫を利用した可能性は十分に考えうる。『私注』が「雁」詩について、古來の朗詠注から典據を引録したか、或いは直接『天寶集』を披見して引用したかはまだ不明であるが、『私注』によるならば、『天寶集』には天寶末期

に起きた唐と南詔の戦争を主題とする「雁」詩が収録されていたことになり、従って『天寶集』は天寶年間の作品を収録するので、年號の「天寶」をもって命名されたことが推測できる。

天寶年間に起きた唐と南詔の戦争について、『舊唐書』卷一九七「南蠻傳」は次のように述べている。

閣羅鳳忿怨、因發兵反攻、圍虔陀、殺之。時天寶九年也。明年、仲通率兵出戎、嶺州。(中略)十二年、

劍南節度使楊國忠執國政、仍奏徵天下兵。(中略)會安祿山反、閣羅鳳乘釁攻陷嶺州及會同軍、西復降尋傳蠻。

(閣羅鳳は忿怨し、因りて兵を發して反攻し、虔陀を圍み、之を殺す。時に天寶九年なり。明年、(鮮于)仲通、兵を率いて戎、嶺州に出づ。(中略)十二年、劍南節度使の楊國忠、國政を執り、仍りて奏して天下の兵を徵す。(中略)會たま安祿山反し、閣羅鳳は釁に乗じて攻めて嶺州及び會同軍を陷し、西して復た尋傳蠻を降す。)

これによれば、唐と南詔の戦争は天寶九載(七五〇)から安史の亂(七五五)まで続くものであった。また、『資治通鑑』卷二一六には、

制、大募兩京及河南北兵、以擊南詔。

(制して、大いに兩京及び河の南北の兵を募り、以て南詔を撃たしむ。)

と見える。「雁」詩には「萬里人南去」一句があり、唐土の中心部(即ち兩京及び河南・河北)から南詔までの長い距離を指していると思われる。ただし、この解釋は「雁」詩が唐と南詔の戦争を背景にしているという『私注』の説を採用した場合の理解であって、『私注』説そのものの當否については後に述べることにしたい。

2、「雁」詩の作者について

『和漢朗詠集』諸本における「雁」詩の本文は概ね一致するが、詩題及び作者についてはかなり異なっている。その状況は次に挙げるごとくである。

ア、『和漢朗詠集』古寫本

延慶本 白／南中詠雁絶句事承慶

嘉曆本 白／賦李陵五言絶句

粘葉本・伊豫切 文選

傳後京極良經筆 文選韋承慶

京都府立圖書館藏古抄本 李陵文選

(以上、堀部正一・片桐洋一兩氏『校異和漢朗詠集』参照)

イ、『和漢朗詠集江注』

天理本 南中詠雁絶句韋承慶云々唐詩類撰第六／李陵

正安本 白南中詠懷 韋承慶 唐詩類撰第六

嵯峨切 事承慶^④／文選

ウ、『和漢朗詠集私注』

東京大學本 南中詠厂絶句。白。

東洋文庫岩崎文庫本 南中詠雁。白。

エ、『和漢朗詠注略鈔』

黒木氏藏本 雨中詠雁^⑮／白

オ、『和漢朗詠集永濟注』

永青文庫本 白

(以上、伊藤正義・黒田彰兩氏『和漢朗詠集古注釋集成』参照)

カ、『文苑英華』(明刊本)卷三二八・『唐詩紀事』(四部叢刊本)卷九

「南中詠鴈」韋承慶

キ、『萬首唐人絶句』(嘉靖本)卷一一

「南行別弟」韋承慶

ク、『國秀集』(『唐人選唐詩新編(増訂本)』本、中華書局、二〇一四)卷下

「南行別弟」于季子

以上によれば、「雁」詩の作者について、李陵・韋承慶・白居易・于季子の四説がある。これら諸本の異同は「雁」詩の作者の歸屬のみならず、『天寶集』の考察においても重要な資料であると思われる。

一部の古寫本や天理本などの『江注』には、「李陵」・「文選」・「李陵文選」と注記しているが、「雁」詩の平仄及び韻字は次の通りである。

萬里人南去 ●●○○●

三春雁北飛 ○○○●○ 廣韻・上平八微 平水韻・五微

不知何歲月 ●○○●●

得與汝同歸 ●●○○○ 廣韻・上平八微 平水韻・五微

上記の平仄式と押韻によれば、「雁」詩は近體詩の規則を嚴格に守っているので、漢人の李陵に作られる可能性はないと判断できる。

『文選』卷二九には李陵「與蘇武詩」三首があり、その眞偽問題はさておき、それらの作品は五言離別詩の早いものであり、「離別詩の一つの源泉」として「魏晉以降の離別詩の形成にも大きな影響を與えた」とされている。¹⁶⁾『和漢朗詠集』の古注釋が「雁」詩をよりよく解讀するために、『文選』所收の李陵の送別詩を引用した際に、典據を略稱したか、或いは書き落としたかして、ついに「李陵」や「文選」・「李陵文選」という誤讀しやすい注記になったと推測できる。

また、一部の古寫本や『私注』・『略鈔』・『永濟注』には「白」と注記しており、「雁」詩の作者を白居易としているようであるが、柿村重松氏『和漢朗詠集考證』（藝林舎影印本、一九七三）は、すでに「私注以下諸本多くは白居易とす。唯諺解に羅山文集、爲韋承慶詩といへるを引ききて、白樂天の句にあらずと斷ず。是なり。

今は之に従ひて改め注す。」と述べている。柿村氏が引用する『諺解』の内容は、岡西惟中『和漢朗詠集諺解』卷三「雁・付歸雁」の次の欄外注記である。¹⁷⁾

羅山文集十五、爲韋承慶詩。言雁歸而人不得歸、不亦恨乎。

(羅山文集の十五に、韋承慶の詩と爲す。言うところは、雁歸るも人歸るを得ず、また恨みずや。)

このように「雁」詩が白居易の作品ではないことは早くから結論されていることが分かる。¹⁸⁾ さらに、前掲の「雁」詩を収録している『國秀集』の「序文」には、

自開元以來、維天寶三載、譴謫蕪穢、登納菁英、可被管弦者都爲一集。

(開元自り以來、維天寶三載、蕪穢を譴謫し、菁英を登納す。管弦に被わしむべきものは都て一集と爲す。)と見え、『國秀集』は天寶三載(七四四)以前の作品を収録しているので、「雁」詩は白居易の作品ではないことは明確である。

柿村重松氏が言及する「私注以下諸本多くは白居易とす」るのは、『和漢朗詠集私注』や『略鈔』・『永濟注』などを指している。『和漢朗詠集私注』(東京大學本)には、

文集曰、無何天寶大徵兵、戸在三丁抽一丁、點將驅向何處去、五月萬里雲南行。又曰、一秋南來春北歸也。(文集に曰く、何んすること無く、天寶大いに兵を徵し、戸ごとに三丁在れば一丁を抽ぶ。點し將て驅り

て何處にか向い去らしむ。五月萬里、雲南に行く。又曰く、尸、秋は南に來たり、春北に歸るなり。）

『文集』は『白氏文集』の略稱であり、ここに引用されているのは那波本『白氏文集』卷三の「新豐折臂翁」（〇一二三三）である。「新豐折臂翁」が同じく天寶年間の南詔戦争に關連するので、「雁」詩の解讀における有益な資料として『私注』に引用されたのである。ただ、「尸秋南來、春北歸也」句は『白氏文集』に見出されず、それは恐らく「雁」詩の「三春雁北飛」の句を解釋した注であり、これは『和漢朗詠集私注』の「かなりの初學者のための注であること」¹⁹を反映したものと見えよう。

しかし、『和漢朗詠注略鈔』（黒木氏藏本）には、

此句、天寶集詩也。唐土玄宗皇帝、天寶年中興兵伐雲南之時、往彼人、萬之一不歸、皆死事有也。其人
歸、吾亦不可還歎也。白居易被流歎也。文集云、五月萬里雲南行云々。又曰、雁秋南來、春北歸也。（傍線
は筆者が附したものの、以下同じ。）

（此の句は、天寶の集の詩なり。唐土の玄宗皇帝、天寶年中、兵を興して雲南を伐つの時、彼に行く人、
萬の一も歸らず、皆死せし事有るなり。其の人も歸らず、吾も亦た歸るべからざる歎きなり。白居易の流さ
るる歎きなり。文集に云く、五月に萬里雲南に行く云々。又曰く、雁、秋は南に來たり、春は北に歸るなり。）

とあり、傍線部にいうごとく、「雁」詩を白居易の流謫の嘆きを詠じた作品としている。また、『和漢朗詠集永
濟注』（永青文庫本）には、

此ハ、天寶集ノ詩也。意ハ、唐玄宗皇帝ノトキ、天寶ノ末ノトシ、楊國忠トイヒシ丞相ノ、位ヲヌスミテ、ヨヲホシイママニセシアマリ、ツハモノヲアツメテ、雲南ノ王ヲウチキ。ユクモノハ千萬人、ヒトリモ、カエルコトナシ。文集云、無何天寶大徵兵、戸有三丁抽一丁、點將驅向何處去、五月萬里雲南云々。萬里人南去トイハ是也。次句ハ、雁ハ秋ハ南ニ來タリ、春ハ北ニカヘル故ニ、カク云ナリ。雁ハ、期アレハ北ヘカヘルトモ、南ニユキヌル人、カリト同クカヘリキタラムコトハ、イツトモシラスト云也。或云、白居易、三月ニ尋陽江ニムカヒタマフニ、雁ノ北ニカヘルヲミテ、ツクラレタル也。我ハ南ニ行ク、汝ハ北ニ歸ヘル、何レノ時ニカ歸リアハムトスルト云也云々。

とあり、傍線部にいう通り、「雁」詩を白居易が尋陽（江州）に左遷された時に作った作品としている。以上『略鈔』及び『永濟注』の注記は、すべて『私注』の『白氏文集』の引用を誤讀したものであると考えられる。

このほか、『江注』の正安本や古寫本の延慶本・嘉曆本にも「白」と注記する内容が見られる。延慶本の本文は「菅家傳本に近きものというべく」とされており、嘉曆本は「菅家相傳本であった」とされている。²⁰ それらの古寫本は、『私注』以降成立するものであるが、『私注』を参照したというより、前述した『私注』成立の背景となつた「菅家家學としての朗詠注」²¹の内容を採り入れたといったほうがより妥當であろう。

さて、「雁」詩の作者についての本論に戻ろう。『國秀集』が「雁」詩の作者を于季子としているが、それは信じがたいものである。『國秀集』の目録及び本文は、次のようである。

校書郎呂令問一首

校書郎敬括二首

監察御史韋承慶一首

進士祖詠二首

本文 于季子「南行別弟」^②

萬里人南去、三春雁北飛。不知何歲月、得與爾同歸。

祖詠「薊門別業」

別業在幽處、到來生隱心。南山當戶牖、澧水在園林。竹覆經冬雪、庭昏未夕陰。寥寥人境外、閒坐聽春禽。

目録と本文と對照すると、本文には于季子と祖詠の間に缺落があることが分かる。上述したごとく、『和漢朗詠集』の諸本のうちに、「萬里人南去」の四句を韋承慶の作とするものがあり、また、『文苑英華』『唐詩紀事』もこれを韋承慶としていることを勘案すると、『國秀集』のこの部分の缺佚は、于季子「南行別弟」と韋承慶の「萬里人南去」四句の間に生じたものといえよう。つまり、于季子「南行別弟」の本文から、呂令問一首・敬括二首がすべて失われ、なおかつ、撰者名「韋承慶」及びその詩題も脱落したのである。それゆえ、『國秀集』に従って「萬里人南去」の四句を于季子「南行別弟」詩とすることは誤りであり、この四句は韋承慶詩と見做すべきである。^③ 洪邁『萬首唐人絶句』が「雁」詩を「南行別弟」として収録することは、恐らく『國秀集』殘缺本を

参照したからであろう。

以上によれば、「雁」詩が韋承慶の作品であることは疑いなかろう。ところが、韋承慶が天寶年間より早く卒しているので、²⁴彼の作品が『天寶集』に編入されることが疑問となる。さらに、天寶三載（七四四）に成立した『國秀集』には、天寶九年（七五〇）から始まった唐と南詔の戦争を主題とする作品を採録することも問題となる。金子元臣・江見清風兩氏『和漢朗詠集新釋』（改修版、明治書院、一九四六）は、「私注に、天寶詩集を引ききて云々し、（中略）皆誤れり」と述べているが、『天寶集』原書の誤收であるのか、それとも古注釋の誤記であるのか、にわかに判断を下すことはできない。

『和漢朗詠集』古注釋以外、『作文大體』にも『天寶集』所收の「雁」詩に言及する内容が見られると山崎誠氏が指摘している。²⁵『作文大體』（『天理圖書館善本叢書』本）には、

凡五言詩者、上句五字、下句五字、合十字、成章之名也。 天寶集云。

萬里人南去、三春雁北飛。不知何歲月、得與汝同歸。

（凡そ五言詩とは、上句の五字、下句の五字、合せて十字、章を成すの名なり。 天寶集に云う。

萬里、人南に去る、三春に雁北に飛ぶ。知らず何れの歲月にか、汝と同じく歸るを得む）

とある。また、智山文庫本『作文大體』²⁶には、

第二五言詩、凡五言詩者、上句五字、下句五字、合十字、成一章之名。天寶集曰、二四不同、二九對之、

避下三連病云云。

萬里人南去、三春雁北飛。他起也。

不知何歲月、得與汝同歸。白作也。

(第二に五言の詩、凡そ五言の詩とは、上の句の五字、下の句の五字、十字を合して、一章の名と成す。天寶集に曰う、二四不同、二九之を對し、下三連の病を避る云云。

萬里にして人南に去る、三春に雁北に飛ぶ。他の起りなり。

知らず、何れの歲月にか、汝と得ん、同じく歸らんこと。白の作なり。)

と見えるので、『天寶集』は作品を収録するとともに、聲律に関する内容も存在したと考えられるが、『天寶集』の總集の性質を考えると、これは『作文大體』の誤引である可能性もある。

二、陽明文庫藏『註百詠』と『百詠和歌』に見える『天寶集』の佚文

『和漢朗詠集』の古注釋以外、陽明文庫藏の『李嶠百詠』の注釋本『註百詠』(以下、「陽明本」と略稱)の「桂」「鶯」の二首にも『天寶集』の佚文が傳存しており、これらはすでに前掲の福田俊昭氏の論著に輯佚されている。「桂」には、下記のごとく見える。

俠客條爲馬。

天寶集、王昭君詞云、琴悲桂條上、笛怨柳花前。

(俠客は條を馬と爲し。)

天寶集、王昭君詞に云く、琴悲み、桂條の上に、笛怨み、柳花の前に。)

ここに引用されている「王昭君詞」は、『全唐詩』卷四〇上官儀「王昭君」(卷一九の「相和歌辭」には上官儀「王昭君」に作る)である。『全唐詩』に先立ち、『文苑英華』(明刊本)卷二〇四や『樂府詩集』(文學古籍刊行社影宋本)卷二九・『唐詩紀事』(四部叢刊本)卷九にも「王昭君詞」を収録しており、いずれも上官儀を作者としている。

また、陽明本「鶯」には、

含啼妙管中。

天寶文苑集曰、谷裏鶯和弄玉簫。

(啼きを含め、妙管の中。)

天寶文苑集に曰く、谷の裏に、鶯は弄玉の簫に和す。)

とある。ここに引用されているのは、『全唐詩』卷九一韋嗣立「奉和初春幸太平公主南莊應制」である。また、卷一〇三には趙彥昭の同題作品となっており、異文は無い。『全唐詩』以外、『文苑英華』卷一七六には韋嗣立「奉和初春幸太平公主南莊應制」として収録されている。

「奉和初春幸太平公主南莊應制」の作者については、検討する余地があるが、韋嗣立²⁷であれ、趙彥昭²⁸であれ、いずれも「王昭君詞」の作者である上官儀²⁹と同じく天寶以前の人物である。前述した「雁」詩の韋承慶と同じように、彼ら三人の作品も『天寶集』に編入されるはずはないと思われる。

陽明本における『天寶集』などの佚文について、「慶應大本に引證されない五十余の典籍からの引用がみられるが、概ね張庭芳原注にあったと見做して不都合でない」と山崎誠氏が論じている。³⁰『李嶠百詠』の張庭芳注の成立年代は、その「序文」によってはっきりしている。慶應大本『李嶠雜詠』（上海古籍出版社影印本、一九九八）の「序文」には、

于時巨唐天寶六載、龍集強圉之所述也。

（時に于いて巨唐天寶六載、龍は強圉に集まるの述ぶ所なり。）

とある。これによれば、張庭芳注に引用される『天寶集』は「天寶六載」（七四七）以前に成立したことが窺える。それゆえ、『天寶集』に収録されている「雁」詩は、『私注』が想定する天寶九年（七五〇）から安史の亂（七五五）まで續いた南詔戦争を主題とするものではないと確認できる。

注意したいのは、前述の『和漢朗詠集私注』には『李嶠雜詠』によって注記する内容が数多く存在していることである。『私注』編者は「百詠注曰」と明示して『百詠注』を引用している九十四箇所以外にも、『百詠注』と明示せずに、そこに引用されている典籍をそのまま「孫引き」して注釋に利用している場合もある³¹と三木雅博氏が論じている。これを考慮に入れると、『私注』における『天寶集』の引用は『李嶠雜詠』の古注釋か

らの孫引きであろうという推論が可能である。ただし、現存する陽明本『註百詠』の「靈禽・雁」詩には、『天寶集』所收の「萬里人南去」を引用しておらず、また、陽明本以外の諸本には『天寶集』を引用する内容が一切見られないので、『和漢朗詠集私注』における『天寶集』の引用は『李嶠雜詠』の古注釋の孫引きではないと判明する。

陽明本以外、『百詠和歌』にも『天寶集』を引用する内容が見られると山崎誠氏は指摘する。³²⁾『百詠和歌』（『續群書類從』本）第十二「素」には、

『天寶文苑集』「搗衣詩」云、杵調風裏韻、練守月前輝。

（『天寶文苑集』「搗衣詩」に云く、杵は調え、風の裏の韻を、練は守り、月の前の輝きを。）

とある。ただし、管見の限り、現存する漢籍文獻には「杵調風裏韻、練守月前輝」一聯が見出されず、その作者を知る手掛かりもないのである。

三、『天寶集』の再検討

以上によれば、今知ることができる『天寶集』所收の作者四人、即ち韋承慶・上官儀・韋嗣立或いは趙彥昭は、みな天寶年間以前に活躍していた人物である。それは『天寶集』原書の誤收というより、むしろ書名の『天寶集』は「唐初からの詩を天寶期に編纂したという意であろうか」と福田俊昭氏が推測するのが正しいと思わ

れる。³³⁾ただし、同時代の例から類比して、これを検証する必要があると考えられる。『日本國見在書目録』「惣集家」類には、

貞観一。

(貞観集一。)

と見え、その『貞観集』は『新唐書』が著録している唐稟『貞観新書』であると狩谷掖齋が指摘する。³⁴⁾『新唐書』卷六〇「藝文志第五〇」には、

唐稟『貞観新書』三十卷。稟、袁州萍郷人、集貞観以前文章。

(唐稟『貞観新書』三十卷。稟は袁州萍郷の人、貞観以前の文章を集む。)

とある。それによれば、『貞観集』は「貞観」と名付けられるが、貞観以前の文章を収録していることが分かる。³⁵⁾つまり、書名にある年號は所收内容の成立年代を指しているのではなく、原書の成立年代を指していると判断できる。『貞観集』の事例から類比してみれば、『天寶集』は天寶年間に成立した詩文集であり、天寶以前の韋承慶や上官儀の作品を収録すると見做しても差し支えないであろう。

だとすれば、『和漢朗詠集』所收の「雁」詩の成立背景を改めて考察する必要があるろう。『舊唐書』卷八八「韋承慶傳」には、

神龍初、坐附推張易之弟昌宗失實、配流嶺表。

(神龍の初、張易之の弟の昌宗に附推して實を失するに坐し、嶺表に配流せらる。)

とあり、「雁」詩は韋承慶が嶺南に左遷された際に作られたものであると考えられる。起句「萬里人南去」は、長安から嶺南までの長い距離を指す。韋承慶がどこを経て嶺南に行ったことが分からないが、当時、大庾嶺がまだ開發されていなかったことを考えると、恐らくは後の韓愈と同じく衡州を經由したと推測できる。³⁶ 承句「三春雁北飛」は、韋承慶が衡州の回雁峰を見たことによる表現であろう。また、轉結の二句「不知何歲月、得與汝同歸」は、雁と同じように北歸することがいつ訪れるか分からないという流謫の悲しみを詠じたものである。

釋信救は『天寶集』の書名に惑わされて「雁」詩を天寶年間の作品とし、當時の唐と南詔の戦争を成立背景と誤解して注を加えたことになる。そして『略鈔』や『永濟注』における『天寶集』に關する注記には、すべて『私注』のこの誤った論説が採り入れられた。

『見在目』『惣集家』には『貞觀集』『天寶集』以外、『開成集』も見られる。その内容は不明であるが、書名の「開成」は文宗の年號の「開成」であろう。唐代の年號で名付けられた別集・總集には『景龍文館記』や『白氏長慶集』『元氏長慶集』『會昌進士詩集』『會昌一品集』などがあり、こうした書名は當時の集部の書に對する命名の習慣を反映している。そのうち、『貞觀集』『天寶集』のように、年號を用いて成立年代を表示する例が確認しうる。例えば、白居易の『白氏長慶集』は、『元氏長慶集』(四部叢刊本)卷五一「白氏長慶集序」の

下記引用には、

長慶四年、樂天自杭州刺史以右庶子詔還。余時刺會稽、因得盡徵其文、手自排纘、成五十卷、凡二千二百五十一首。前輩多以「前集」・「中集」爲名、余以爲國家改元長慶、訖於是、因號曰『白氏長慶集』。

(長慶四年、樂天は杭州刺史より、右庶子を以て詔還せらる。余は時に會稽に刺し、因りて盡く其の文を徵するを得、手自ずから排纘し、五十卷と成し、凡そ二千二百五十一首なり。前輩多く「前集」・「中集」を以て名と爲すも、余以爲らく、國家長慶に改元して、是に訖わり、因りて號じて『白氏長慶集』と曰う。)

とあつて、長慶四年(八二四)以前の詩文五十卷を収録しているが、長慶年間に編纂されたので『白氏長慶集』と命名された。

ただし、書名に附された年號が、必ずしも成書の時期を示さない例が存在するので、注意を要する。『直齋書錄解題』(上海古籍出版社、一九八七)卷七に、

『景龍文館記』八卷 唐修文館學士武甄平一撰。中宗初置學士以後館中雜事、及諸學士應制・倡和篇什雜文之屬。亦頗記中宗君臣宴褻無度、以及暴崩。其後三卷、爲諸學士傳。今闕二卷。平一、以字行。

(『景龍文館記』八卷 唐修文館の學士の武甄平一撰す。中宗の初、學士を置きて以後の館中の雜事及び諸學士應制・倡和の篇什雜文の屬。亦た頗る中宗君臣の宴褻の度無く、以て暴崩に及ぶを記す。其の後の三卷は、諸學士の傳と爲す。今二卷を闕く。平一、字を以て行わる。)

と見える。『景龍文館記』は中宗の景龍年間における宮廷詩人の作品を収録しているが、後の開元年間に武平一によって著されたものであると陶敏氏が論じている。⁷⁷それゆえ、「景龍」は原書の成立年代を指すのではなく、所収内容の年代を指している。

むすびとして

以上、『和漢朗詠集』や『李嶠雜詠』『百詠和歌』の古注釋及び『作文大體』に基づいて、唐代の佚書である『天寶集』の成立及び収録内容を考察してみた。今知ることができる『天寶集』所収の作品は、韋承慶の「雁」・上官儀の「王昭君詞」・韋嗣立或いは趙彥昭の「奉和初春幸太平公主南莊應制」及び無名氏の「搗衣詩」の四首である。

また、『天寶集』には天寶年間以前の人である韋承慶などの作品を収録しているが、天寶年間に成立した詩文集であることが明らかとなる。『和漢朗詠集私注』などの古注釋が『天寶集』を引用し、「雁」詩の成立背景を天寶年間の南詔戦争としているのは、『天寶集』の書名の意味を誤って理解したことによる誤讀である。韋承慶「雁」詩は、神龍の初めに、彼が嶺南に流謫された時の作品であった。

唐代の年號をもって名付けられた別集・總集が數多く存在しており、當時の集部の命名習慣を反映している。そのうち、『天寶集』のように年號を用いて原書の成立年代を表示する例があり、また一方では、『景龍文館記』のように年號を用いて所収内容を表示する例もある。唐代の年號で名付けられた別集・總集を考察する際には、

その年號の意味するところに注意しなければならない。

注

① 狩谷椽齋『日本現在書目證注稿』（『覆刻日本古典全集』本、現代思潮社、一九七八）や小長谷惠吉氏『日本國見在書目録解説稿』（小宮山書店、一九五六）には、『天寶集』に関する論説が見出されない。

② 矢島玄亮氏『日本國見在書目録：集證と研究』、汲古書院、一九八四、頁二二八。

③ 後に『唐代文學叢考』（中國社會科學出版社、一九九七）に収録されている。

④ 孫猛氏『日本國見在書目録詳考』、上海古籍出版社、二〇一五、頁二〇三八。

⑤ 『和漢朗詠集』卷上「雁・付歸雁」三一七番「雁」詩の配列と解釋については、惠坂友紀子氏『和漢朗詠集』の雁——三一七番章承慶の詩をめぐって』（『和漢比較文學』、二〇〇四年、第二期）を参照されたい。

⑥ 川口久雄氏譯註本（講談社、一九八二）及び大曾根章介・堀内秀晃兩氏校註本（新潮社、一九八三）が、すべて他本によって底本の粘葉本が「三秋」に作るのを「三春」に改めている。小論は兩本に従う。

⑦ 小論が引用する『和漢朗詠集』の古注釋はすべて『和漢朗詠集古注釋』（伊藤正義・黒田彰、大學堂書店、一九八九—一九九七）に従う。

⑧ 顧陶『唐詩類選』及び『和漢朗詠集』との關係については、三木雅博氏「中國晚唐期の唐代詩受容と平安中期の佳句選」（『國語と國文學』、二〇〇五、第五期）、また次章「顧陶『唐詩類選』について」を参照されたい。

⑨ 『和漢朗詠注略鈔』（黒木氏藏本）には、「此句、天寶集詩也。唐土玄宗皇帝、天寶年終興兵伐雲南之時、往彼人、萬之一不歸、皆死事有也。其人、不歸、吾亦不可還歎也。白居易被流歎也。文集云、五月萬里雲南行云々。又曰、雁秋南來、春北歸也。」とある。

⑩ 『和漢朗詠集永濟注』（永青文庫本）には、「此ハ、天寶集ノ詩也。意ハ、唐玄宗皇帝ノトキ、天寶ノ末ノトシ、楊國忠トイヒシ丞相ノ、位ヲヌスミテ、ヨヲホシイママニセシアマリ、ツハモノヲアツメテ、雲南ノ王ヲウチキ。ユクモノハ千萬人、ヒトリモ、カエルコトナシ。文集云、無何天寶大征兵、戸有三丁抽一丁、點將驅向何處去、五月萬里雲南云々。萬里人南去トイハ是也。次句ハ、雁ハ秋ハ南ニ來タリ、春ハ北ニカヘル故ニ、カク云ナリ。雁ハ、期アレハ北ヘカヘルトモ、南ニユキヌル人、カリト同クカヘリキタラムコトハ、イツトモシラスト云也。或云、白居易、三月ニ尋陽江ニムカヒタマフニ、雁ノ北ニカヘルヲミテ、ツクラレタル也。我ハ南ニ行ク、汝ハ北に歸ヘル、何レノ時ニカ歸リアハムトスルト云也云々。」とある。

⑪ 太田次男氏「釋信救とその著作について」には、「信救が私注を撰するに當つて、江注をみて、参考になる注を採入れたという程の關係は考え難い」と論じている（『斯道文庫論集』五、一九六七、頁二五二）。それに對し、三木雅博氏が「兩注には直接の關係はないとは必ずしも斷定はできない」と述べている（三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』、勉誠社、一九九五、頁二二〇）。

⑫ 太田次男氏「釋信救とその著作について」、頁二五六。

⑬ 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』、頁二三四。

⑭ 「事」は「韋」の誤字である。

⑮ 「雨」は「南」の誤字である。

⑯ 松原朗氏「蘇武李陵詩考」、『中國詩文論叢』第二二集、二〇〇二。後に『中國離別詩の成立』（研文出版、二〇〇三）に収録されている。

⑰ 小論に引用する『和漢朗詠集諺解』は、椋山女學園大學デジタルライブラリーの公開畫像に従う。

- ⑱ ただ、現存する『羅山先生文集』（平安考古學會、一九一八）卷一五には相當する部分が見出されない。
- ⑲ 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』、頁二二八。
- ⑳ 『校異和漢朗詠集』「諸本解説」、頁二五・三二。
- ㉑ 前掲註一二の太田次男氏論文。
- ㉒ 『四部叢刊』本は誤って「第」に作り、『唐人選唐詩新編（増訂本）』が汲古閣本によって改めているのに従った。
- ㉓ 佟培基氏『全唐詩重出誤收考』（陝西人民教育出版社、一九九六、頁二七―二八）、『唐人選唐詩新編（増訂本）』本『國秀集』校記（頁三五―）参照。
- ㉔ 『舊唐書』卷八八「韋承慶傳」には、「神龍初、坐附推張易之弟昌宗失實、配流嶺表」とある。
- ㉕ 山崎誠氏「李嶠百詠續貂」（『中世學問史の基底と展開』、和泉書院、一九九三、頁五三）参照。
- ㉖ 山崎誠氏「智山文庫藏「作文大體」翻刻と解題」（國文學研究資料館文獻資料部調査研究報告（二四）、二〇〇三）参照。
- ㉗ 『全唐文』卷三三二張說「中書令逍遙公墓志銘」には、「開元七年九月二日、薨于歸德里」とある。
- ㉘ 『舊唐書』卷九二「趙彥昭傳」には、「俄而姚崇入相、甚惡彥昭之爲人、由是累貶江州別駕、卒」とある。
- ㉙ 『舊唐書』卷八〇「上官儀傳」には、「麟德元年、宦者王伏勝與梁王忠抵罪、許敬宗乃構儀與忠通謀、遂下獄而死。」
- ㉚ 山崎誠氏「李嶠百詠續貂」、頁五三。
- ㉛ 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』、頁二四九。
- ㉜ 山崎誠氏「李嶠百詠續貂」、頁五三。
- ㉝ 福田俊昭氏『李嶠と雜詠詩の研究』、頁四九一。

③④ 『日本現在書目證注稿』には、「貞觀集一卷、新唐志、唐稟貞觀新書三十卷」とある（頁二七三）。

③⑤ ただ、孫猛氏『日本國見在書目錄詳考』には、『貞觀集』が『貞觀集』の誤寫であり、『聖武天皇宸翰雜集』にある唐人の眞觀法師の別集であると論じている（頁二〇六九）。小論は狩谷椽齋の説に従う。

③⑥ 陳偉明氏「唐五代嶺南道交通路線述略」（『學術研究』、一九八七年第一期）参照。

③⑦ 陶敏氏「『景龍文館記』考」（『唐代文學與文獻論叢』、中華書局、二〇一〇）参照。

第三章 顧陶『唐詩類選』について

所謂「唐人選唐詩」とは、唐人が編纂した唐詩選集である。「唐人選唐詩」は唐代當時の文學觀を反映しているため、唐代文學の研究において重要な意味を有し、研究者に注目されている。陳尙君氏「唐人編選詩歌總集敍録」によれば、現在知ることができる「唐人選唐詩」は一三七種あるが、その大部分は散佚し、現存しているのはただ十六種のみであり、^②これらは増訂本『唐人選唐詩新編』^③に収録されている。

晩唐の顧陶が編纂した『唐詩類選』は、散佚した「唐人選唐詩」の一種であり、宋代の詩話や文集にしばしば言及されている。近年の研究成果としては、卞孝萱氏に「『唐詩類選』是第一部尊杜選本」^④があり、『唐詩類選』選録の杜詩三十首を輯佚し、その「尊杜」思想の先驅性を高く評價している。また、前掲の陳尙君氏「唐人編選詩歌總集敍録」は、『文苑英華』所收の「唐詩類選序」・「後序」を中心として、『唐詩紀事』・『能改齋漫録』等の資料も参考にしながら、『唐詩類選』の編纂過程について考證している。日本においては、三木雅博氏に「中國晩唐期の唐代詩受容と平安中期の佳句選」という論文があつて、『和漢朗詠集』の古註に基づき、日本側に保存されている『唐詩類選』の佚文を蒐集し、『唐詩類選』が『千載佳句』及び『和漢朗詠集』と深い關係を持っていることを論證している。長谷部剛氏「唐代における杜甫詩集の集成と流傳(1)」^⑤は、『唐詩類選』は「中唐期に高まった杜甫への評價のなかでも最も高いもの」であると述べている。小論は以上の先行研究を踏まえ、『唐詩類選』の編纂とその内容を考察し、さらに唐代文學・文學史における本書の價值について論及してみたい。

一、顧陶の生涯及び『唐詩類選』の編纂 1、基本資料及び舊説

『唐五代人物傳記總合索引』^⑦によれば、顧陶の生涯に関する資料は極めて少ない。『新唐書』卷六〇「藝文志」には、

顧陶『唐詩類選』二十卷。大中校書郎。

(顧陶『唐詩類選』二十卷。大中校書郎なり。)

と見える。また、『直齋書錄解題』^⑧(以下、『書錄解題』)と略稱)卷一五には、

『唐詩類選』二十卷 唐太子校書郎顧陶集。凡一千二百三十二首、自爲序、大中丙子歲也。陶、會昌四年進士。

(『唐詩類選』二十卷 唐太子校書郎顧陶集む。凡そ一千二百三十二首、自ら序を爲り、大中丙子の歲なり。陶は、會昌四年の進士なり。)

とある。それによれば、顧陶は會昌四年(八四四)進士に登第した後、大中年間(八四七―八五九)に校書郎として務めていた。『全唐文』卷七六五の顧陶小傳・『登科記考』卷二二^⑨が記載する顧陶の生涯は、大體以上の二つの資料を踏まえている。

顧陶の官職について、『新唐書』「藝文志」は「校書郎」に作るが、『書錄解題』は「太子校書郎」に作る。『唐六典』(中華書局、一九九二)や『舊唐書』「職官志」・『新唐書』「百官志」に「太子校書郎」は見られないが、太子學館としての崇文館には校書郎二名を置いている。^⑩その崇文館は貞元八年(七九二)以降、東宮官署の左春坊の管轄に入った。^⑪また、『全唐詩』卷五四四には、劉得仁^⑫「寄春坊顧校書」一首がある。以上の資料によれば、顧陶が崇文館校書郎であったことは疑いがない。

顧陶の出身については、『全唐詩』卷五九四儲嗣宗に「送顧陶校書歸錢塘」という詩があり、彼が錢塘の出身であることが分かる。

顧陶及び『唐詩類選』に関する何よりも重要な資料は、『文苑英華』卷七一四に収録されている「唐詩類選

序」・「唐詩類選後序」(以下、「前序」・「後序」と略稱)である。¹³⁾ 前掲の卞孝萱氏の論文も、「前序」「後序」によって顧陶の幾つかの事跡を考證している。「前序」には、

時大中丙子¹⁴⁾之歲也。

(時は、大中丙子の歲なり。)

と見え、また、「後序」には、

余爲『類選』三十年。(中略)行年七十有四。

(余『類選』を爲ること三十年。(中略)行年七十有四。)

と見える。そこで、卞氏は顧陶の生年は「大中丙子」(十年、八五六)より七十四年を逆算した建中四年(七八三)であるとし、『唐詩類選』の編纂の開始は「大中丙子」より三十年を逆算した大和元年(八二七)であると結論づけている。従って、顧陶が會昌四年(八四四)に進士に登第したのは六十二歳であり、項斯・趙嘏・馬戴・李景述などと同榜の關係を有していたと述べている。

しかし、その結論は「前序」「後序」が同じ年に作られたことを前提として初めて成立するものであり、その前提が成立しない可能性も棄てられない。「前序」の制作年は原文に明記されているが、「後序」の制作年については検討する餘地がある。特に注意したいのは、「後序」には、

近則杜舍人牧・許鄂州渾、洎張祐・趙嘏・顧非熊數公、竝有詩句播在人口。身沒纔二三年、亦正集未得、絕筆之文、若有所別。

(近くは則ち杜舍人牧・許鄂州渾、洎張祐・趙嘏・顧非熊の數公、竝びに詩句の播して人口に在る有り。身沒して纔かに二三年、亦た正集未だ得ず、絶筆の文、別する所有るが若し。)

とあり、その制作年は杜牧や許渾などが卒した時より二、三年遅れることである。「後序」のこの部分は顧陶の

事跡及び『唐詩類選』の編纂にとどまらず、杜牧などの有名詩人の歿年を考察する貴重な資料にもなっている。陳尙君氏は「後序」の制作年について、「前序」よりやや遅れるとし、『唐詩類選』の編纂の開始は文宗初年であると推測している。¹⁵ 羅時進氏は「後序」の制作年は咸通二・三年（八六一—八六二）であり、杜牧の歿年は大中末期（八五九）であり、許渾の歿年は咸通二年（八六一）以降であると結論づけている。¹⁶ 繆鉞氏は羅氏の結論を批判し、「後序」の制作年は「前序」のすぐ後であり、杜牧の歿年は大中末期ではないと述べている。¹⁷ また、植木久行氏も繆鉞氏と同じ見解を示し、「杜牧の死は、顧陶の「後序」によつて、許渾や張祐・趙嘏らとともに、ほぼ大中十年よりも二、三年前の時期、つまり、大中七、八年ごろである」と論じている。¹⁸

2、新資料による『唐詩類選』の初稿及び補訂時期の検討

吳在慶・常鵬兩氏は繆鉞氏の意見に賛成し、次に引用する「後序」の一節に依據して新たな見解を提示する。¹⁹ 「後序」には、

余爲『類選』三十年、（中略）以刪定之初、如相國令狐楚・李涼公逢吉・李淮海紳・劉賓客禹錫・楊茂卿・盧仝・沈亞之・劉猛・李涉・李璆・陸暢・章孝標・陳罕等十數公、時猶在世。及稍淪謝、即文集未行、縱有一篇一詠得於人者、亦未稱所錄。僻遠孤儒、有志難就、粗隨所見、不可殫論。

（余、『類選』を爲ること三十年、（中略）刪定の初めを以てするに、相國令狐楚・李涼公逢吉・李淮海紳・劉賓客禹錫・楊茂卿・盧仝・沈亞之・劉猛・李涉・李璆・陸暢・章孝標・陳罕等の十數公の如きは、時に猶お世に在り。稍く淪謝するに及び、即ち文集未だ行われず。縦い一篇一詠の人に得る者有るとも、亦た未だ錄する所に稱わず。僻遠の孤儒、志有るも就り難し、粗ぼ見る所に隨うのみにして、殫く論ずべからず。）

とある。この一節によれば、『唐詩類選』の「刪定の初め」は、列擧された令狐楚など十三人の歿年より早い

ことが分かる。彼ら十三人の中で歿年の最も早いのは、長慶元年（八二二）七月、成徳節度使の田弘正と共に王廷湊の叛亂で殺害された楊茂卿である。²⁴従って、『唐詩類選』の編纂の開始は、遅くとも長慶元年（八二二）七月以前である。假にそれが長慶元年であったとすれば、「前序」「後序」が作られた大中十年（八五六）から三十五年遡ることになるので、概數をもつて「三十年」と稱することができると兩氏は結論している。

吳・常兩氏が楊茂卿の歿年に着目した點は甚だ重要だが、その見解には首肯しかねる所が些かある。先ず、長慶元年（八二二）から大中十年（八五六）までの三十五を「三十年」と稱し得るのか否かが疑問である。のみならず、「刪定の初め」は『唐詩類選』の初稿を指しており、その初稿の編纂は長慶元年一月から楊茂卿が殺害された七月までの僅か七箇月で完成したことも想像しにくい。

また、「僻遠孤儒」の一文によれば、當時の顧陶は都から遠く離れた僻遠な地方に住んでいたもので、詩集を入手することが極めて困難であった。ただし、前述のように、顧陶は會昌四年（八四四）進士に登第した後、大中年間（八四七—八五九）には崇文館校書として務めていた。「後序」の制作年を「前序」と同じく大中十年（八五六）とすれば、それ以前の數年間、崇文館に任官していた顧陶と「後序」に述べられる「僻遠孤儒」という彼の境遇とは全く合致しない。

次に令狐楚の文集を一例として擧げてみる。『劉禹錫集』²⁵卷一九「唐故相國贈司空令狐公集紀」には、

既免喪、嗣子左補闕絢集公之文、成一百三十卷。

（既に喪を免じ、嗣子左補闕絢 公の文を集め、一百三十卷と成す。）

とある。また、『舊唐書』卷一七二「令狐楚傳」には、

有文集一百卷、行于時。

（文集一百卷有り、時に行わる。）

と見える。これらによれば、令狐楚の文集は彼の歿後、服喪期間が終わってから子の絢によって編纂され、世

間に流傳しており、「後序」が述べる「文集未行」の状況と合わない。令狐楚について「文集未行」といったのは、彼が歿した開成二年（八三七）當時、顧陶がまだ都から遠く離れた所に住んでおり、新たに編集された令狐楚の文集を閲覽することができなかつたからであろう。

顧陶が大中年間（八四七—八五九）に崇文館校書郎として長安に在ったことを考えると、「僻遠孤儒」の一文は、大中以前の顧陶を指しており、「『類選』を爲ること三十年」も、彼が崇文館に着任する以前のことであると推測できる。換言すれば、「後序」は確かに「前序」の成立、即ち大中十年（八五六）以降に作られたが、前掲した「余爲類選三十年」から「不可殫論」までの部分は、十數年ないし二十數年前の『唐詩類選』の編纂を開始した時點でのことを記述しているに過ぎない。また、「後序」の前掲部分には、「及稍淪謝、即文集未行、縦有一篇一詠得於人者、亦未稱所錄」とあり、顧陶が『唐詩類選』の初稿を編纂し終えた後、長期に亙って修訂作業を續けていたことが窺える。つまり、顧陶は憲宗の元和年間に『唐詩類選』の編纂を開始し、元和末期に初稿を完成させたと見做せる。長慶元年（八二一）以降、楊茂卿などの詩人は次第に歿した。顧陶は彼らの作品を補入しようとしたが、資料入手が困難なため、うまくいかなかった。元和年間の起稿から大中年間の校書郎在任までの間が、「後序」にいう「余爲『類選』三十年」であるといえよう。

その後、顧陶は何らかの原因で、『唐詩類選』の編纂を一時中斷した。そして大中末期、校書郎を辭任して「後序」を書いた時、次のように述べている。

今大綱已定、勅成一家。庶及生存、免負平昔。（中略）近則杜舍人牧・許鄂州渾、洎張祐・趙嘏・顧非熊數公、竝有詩句播在人口。身沒纔二三年、亦正集未得、絕筆之文、若有所別。爲卷軸附于二十卷之外、冀無見恨。

（今大綱已に定まり、勅して一家を成す。庶わくは生存に及び、平昔に負くを免れんことを。（中略）近くは則ち杜舍人牧・許鄂州渾、張祐・趙嘏・顧非熊に洎ぶ數公、竝びに詩句の播して人口に在る有り。身沒して纔かに二三年、亦た正集未だ得ず、絶筆の文、別する所有るが若し。卷軸を爲して二十卷の外に附さば、

恨まるること無からんことを冀う。)

顧陶は大中以後に歿した杜牧などの作品を蒐集し、『唐詩類選』の原稿を再び修訂しようとしたが、彼らの別集をまだ入手していないので諦めた。また、「後序」には、

唯歙州敬方、才力周備、興比之間、獨與前輩相近。亡歿雖近、家集已成、三百首中、間錄律韻八篇而已。雖前後夤接、或畏多言、而典刑具存、非敢遐棄。

(唯だ歙州の敬方は、才力周備し、興比の間、獨り前輩と相い近し。亡歿近しと雖も、家集已に成り、三百首の中、間に律韻八篇を録するのみ。前後夤接し、或いは多言を畏ると雖も、典刑具に存し、敢えて遐棄するに非ず。)

とあり、李敬方の作品八首を直接補入したが、彼は初稿所収の詩人とは年代的に大きな隔たりがあったので、そのため、『唐詩類選』の収録が「前後夤接」という状態になった。『唐詩類選』初稿所収の詩人と言えば、「前序」には、

始自有唐、迄於近歿。

(唐より始まり、近く歿するに迄ぶ。)

とあり、『唐詩類選』所収の作家は、唐の初めから近年に歿した詩人までを範圍とする。附表一によれば、現在知ることができる『唐詩類選』に収録されている詩人は李敬方を除いて四十三人あり、そのうち、歿年の最も遅いのは姚合である。²³⁾近年に出土した「姚合墓誌」には、

(會昌二年)冬十二月、寢疾旬餘、是月廿有五、日乙酉、啓手足於恭靖里第、享年六十有六。²⁴⁾

(冬十二月、寢疾旬餘、是の月廿有五、日乙酉、手足を恭靖里の第に啓く、享年六十有六。)

とあり、姚合の歿年は會昌二年(八四二)十二月であることが分かる。會昌二年から大中元年(八四七)ま

では五年が経過するに過ぎない、まさに「近歿」と言えよう。また、會昌二年から李敬方が歿した大中六年（八五二）以降までは十年以上が経ち、「前後叟接」と言つてよい。これらのことは、『唐詩類選』本文及び「前序」の主體部分は、大中以前に作られたことを物語っている。つまり、顧陶は『唐詩類選』の編纂を再開した時、本文及び「前序」に僅かな補正を加えて、「前序」には新たな日付を書き添え、さらに「後序」を書いて、それに編纂の経緯や補訂の事情を記載したのである。

以上、新資料の「姚合墓誌」を勘案して顧陶の事跡及び『唐詩類選』の編纂について再検討した。ただし、中晚唐文學の重要な研究資料として注目されている「後序」の制作年については、遺憾ながらも明確にし難い。前掲の吳在慶・常鵬兩氏の研究では、楊茂卿の歿年を根拠として「後序」の制作年に論及するが、前述した如く、「後序」の一部は『唐詩類選』初稿が成立した當時の事情を記載するので、「後序」の制作年の考察には論據とならない。「後序」の制作年を解明するには、さらに新しい資料が現れるのを待つしかないであろう。

二、『唐詩類選』の内容

1、『唐詩類選』所收の詩人・作品

「前序」には、

國朝以來、人多反古、德澤廣被、詩之作者繼出。則有杜・李挺生於時、羣才莫得而問疑。其亞則昌齡・伯玉・雲卿・千運・應物・益・適・建・況・鵠・當・光羲・郊・愈・藉・合十數子李白・杜甫・王昌齡・陳伯玉・孟雲卿・沈千運・韋應物・李益・高適・常建・顧況・于鵠・暢當・儲光羲・孟郊・韓愈・張籍・姚合、挺然頽波間。得蘇李劉謝之風骨、多爲清德之所諷覽、乃能抑退浮僞流艷之辭、宜矣。爰有律體、祖尙清巧、以切語對爲工、以絕聲病爲能、則有沈・宋・燕公・九齡・嚴・劉・錢・孟・司空曙・李端・二皇甫之流、實繫其數沈佺期・宋之問・張說・張九齡・嚴維・劉長卿・錢起・孟浩然・司空曙・李端・皇甫曾・皇甫冉。皆妙於新韻、播名當時。亦可謂守章句之範、不失

其正者矣。

(國朝以來、人多く古に反る。德澤廣く被い、詩の作者繼ぎて出づ。則ち杜・李の挺んでて時に生まるる有り、羣才得て問うこと莫し。其の亞は則ち昌齡・伯玉・雲卿・千運・應物・益・適・建・況・鵠・當・光羲・郊・愈・藉・合の十數子李白・杜甫・王昌齡・陳伯玉・孟雲卿・沈千運・韋應物・李益・高適・常建・顧況・于鵠・暢當・儲光羲・孟郊・韓愈・張籍・姚合、頽波の間に挺然たり。蘇・李・劉・謝の風骨を得、多く清徳の諷覽する所と爲る。乃ち能く浮偽流艶の辭を抑退するは、宜なるかな。爰に律體有り、清巧を祖尙し、語對を切にするを以て工と爲し、聲病を絶つを以て能と爲す。則ち沈・宋・燕公・九齡・嚴・劉・錢・孟・司空曙・李端・二皇甫の流有り、實に其の數を繋ぐ沈佺期・宋之問・張說・張九齡・嚴維・劉長卿・錢起・孟浩然・司空曙・李端・皇甫曾・皇甫冉。皆新韻に妙にして、名を當時に播す。亦た章句を守るの範にして、其の正を失わざる者と謂うべし。)

とあり、顧陶は初唐以來の詩人を三段階に大別している。其の一には、杜甫・李白の二人だけを挙げ、唐詩史に於ける李杜の高い地位を確認する。其の二には、杜甫・李白を繼承する王昌齡・陳伯玉など十六人を挙げ、彼らの作品が風骨を備えており、浮艶な表現を退けていることを稱贊する。其の三には、律體に堪能な沈佺期・宋之問など十二人を挙げ、彼らの作品が修辭の軌範を守っており、未だ雅正さを失っていないと評價する。陳尙君氏は顧陶が「前序」に挙げるこれら合計三十人の作品は、すべて『唐詩類選』に編入されていると推測しており、それは正しいと思われる。また、前掲の「後序」によれば、李敬方の作品はすでに別集の形にまとめられたので、顧陶は彼の律韻八首のみを『唐詩類選』に編入したことが知られる。

「前序」「後序」以外の、『唐詩類選』所收の詩人に言及する資料としては、『苕溪漁隱叢話』・『唐詩紀事』などの詩話があり、合計して少なくとも四十三人(無名氏を含む)がある。詳しくは附表一を参照されたい。『唐詩類選』所收の作品については、「前序」には次のように述べている。

凡一千二百三十二首、分爲二十卷、命曰『唐詩類選』。

(凡そ一千二百三十二首、分けて二十卷と爲し、命じて『唐詩類選』と曰う。)

これによれば、『唐詩類選』はもともと二十卷であり、全一千二百首以上の作品を収録していたが、現在知ることが出来る『唐詩類選』所収の作品は五十六首のみであり、原書の二十分の一にも及ばない。

また、『唐詩類選』所収の作品に言及する資料としては、『西溪叢語』・『艇齋詩話』などの筆記・詩話があり、宋人は『唐詩類選』を愛讀していたことが窺える。²⁷⁾ 前掲の卞孝萱氏の論文は、それらの資料を踏まえ、『唐詩類選』に収録されている杜詩を輯佚している。また、陳尙君氏「杜詩早期流傳考」²⁸⁾は、現存する『唐詩類選』から見れば、所収の杜詩の大部分は律詩であり、晩唐の文學風潮を反映していると指摘する。さらに、長谷部剛氏「唐代における杜甫詩集の集成と流傳(1)」²⁹⁾は、『唐詩類選』の収録は「杜甫生涯の詩作をすべて網羅している」が、「安祿山の亂勃發前の作品と夔州時代の作品とそれ以降の作品が少ない」と論じている。杜詩のみならず、『唐詩類選』所収の作品には常建「題破山寺後院詩」や韋應物「和晉陵陸丞早春遊望」などの有名な詩があり、詳しくは附表二を参照されたい。

『唐詩類選』の引用は、宋人にとどまらず、日本の『和漢朗詠集』の江注にも「唐詩類撰」と表記して次のように見られる。

『唐詩類撰』十一、錢起「贈閣下閣舍人詩」。

(『唐詩類撰』十一、錢起「閣下閣舍人に贈る詩」。)

「南中詠雁」、絶句、韋承慶云々、『唐詩類撰』第六。

(「南中雁を詠ず」、絶句、韋承慶と云々、『唐詩類撰』第六。)

「贈閣下閣舍人詩」「南中詠雁」の所屬する巻數まで詳しく記載しており、甚だ貴重である。『唐詩類選(撰)』は「鎌倉時代以前に日本に將來されていることが確かめられる」と三木雅博氏は論じている。³⁰⁾

2、『唐詩類選』の編纂における留意点及び編纂基準

「前序」には、

或聲流樂府、或句在人口、雖靡所紀錄、而關切時病者、此乃究其姓家、無所失之。或風韻標特、譏興深遠、雖已在他集、而汨沒於未至者、亦復掇而取焉。或詞多鄭衛、或音涉巴歛、苟不虧六義之要、安能間之也。

(或いは聲は樂府に流れ、或いは句は人口に在り、紀錄する所靡しと雖も、時病に關切する者は、此れ乃ち其の姓家を究め、之を失う所無し。或いは風韻標特、譏興深遠、已に他集に在りと雖も、未だ至らざる者に汨沒するは、亦た復た掇いて焉を取る。或いは詞に鄭衛多く、或いは音巴歛に涉るも、苟も六義の要に虧けざれば、安んぞ能く之を間てんや。)

とあり、顧陶が『唐詩類選』の編纂において二つの留意点を持っていたことが知られる。現存する『唐詩類選』所収の作品を検してみれば、その三つの留意点に當たる内容が確認できる。

第一の留意点は、樂府や口頭に傳えられている作者不明の作品も、できるだけ作者をはっきりさせようとする事である。『艇齋詩話』には、

山谷用「酒渴愛江清」爲韵、人知爲唐人詩、而不知其爲誰氏也。顧陶『詩選』載暢當作。

(山谷「酒渴き江の清きを愛す」を用て韵と爲す。人、唐人の詩たるを知るも、其の誰氏たるかを知らざるなり。顧陶『詩選』に暢當の作を載す。)

と見える。『艇齋詩話』は南宋の曾季狸によって作られたものであり、彼が見た『唐詩類選』以外の本では、「酒渴愛江清」一句の作者がすでに不明になっていたことが分かる。顧陶の収録がなければ、その詩の作者を明らかにすることができなかつた。

第二の留意点は、他の詩集にすでに収録されている作品であっても再び収録するという事である。現存す

る『唐詩類選』が収録する作品と『唐詩類選』以前に成立した「唐人選唐詩」とを合わせて検して見れば、常建の「題破山寺後院詩」は『河嶽英靈集』に、錢起「贈閣下閣舍人詩」・皇甫冉「秋日東郡作」は『中興間氣集』にそれぞれ収録されている。これらの作品は「風韻標特、譏興深遠」と評價されており、顧陶の文學觀を傳えている。

第三の留意點は、卑俗であっても詩經の精神を失わない作品であれば収録するということである。顧陶が「風韻」を尊ぶだけでなく、「譏興」即ち諷諭を重んじるという詩教的文學觀をもっていたことを表している。例えば、『茗溪漁隱叢話』後集卷一七には、

『復齋漫錄』云、唐顧陶編『唐詩類選』、載楊郇伯作「妓人出家詩」云、「盡出花鈿與四隣、雲鬟翦落向殘春。暫驚風燭難留世、便是池蓮不染身。貝葉乍翻迷錦字、梵聲初學誤梁塵。從今艷色歸空後、湘浦應無解佩人。」

(『復齋漫錄』に云く、唐の顧陶『唐詩類選』を編み、楊郇伯作の「妓人出家すの詩」を載せて云く、「盡く花鈿を出して四隣に與え、雲鬟翦落して殘春に向う。暫く風燭の世に留め難きに驚き、便ち是れ池蓮にして身を染めず。貝葉乍ち翻りて錦字かと迷い、梵聲初めて學びて梁塵かと誤る。今より艷色空に歸するの後、湘浦應に解佩の人無かるべし」と。)

とある。この詩は遊女を對象とする作品であるので、一般的に卑俗と見做されるが、情欲の世界を捨てて佛門に歸依する女性の高尚な志を讃え、雅正の風を有していると評價されて、『唐詩類選』に編入されたものである。

これらの分析によれば、顧陶が『唐詩類選』を編纂する際に、自ら「前序」に述べた留意點をしつかり守っていたことが窺える。

また、「後序」には、

取捨之法二十通在、故題之于後云耳。

(取捨の法二十通在り、故に之を後に題すと云うのみ。)

とある。「前序」の留意點に留まらず、顧陶は自分の編纂基準を二十條に分けて「後序」の後に記載していた。その二十條の編纂基準は現存していないが、凡例のようなものである。現存する「唐人選唐詩」には、序文を付けているものが見られるが、編纂基準を箇條書きにするものは見当たらない。顧陶が『唐詩類選』を編纂した際に、同時代の編纂者よりも強く編纂意圖による作品の取捨選擇を意識していたことが窺える。前述する三つの留意點も作品の取捨に關わるので、「二十通」の内容に共通するところがあつたと思われる。

3、『唐詩類選』の編成

以上の考察によつて、『唐詩類選』は「前序」・「後序」・編纂基準二十條・作品千二百三十二首で構成されていたことが明らかとなつたが、『唐詩類選』の主體である作品千二百三十二首が、どのように編成されていたかはなお考究を要する。

盧燕新氏は「前序」の「類之爲伍而條貫」一句によつて、『唐詩類選』は詩體や詩風によつて分類していたと推測するが、恐らくは原文の誤讀であると思われる。^⑩「前序」には、

篇題屬興、類之爲伍。而條貫不以名位卑崇・年代遠近爲意。騷雅綺麗、區別有觀。

(篇題屬興、之を類して伍と爲す。條貫するは名位の卑崇・年代の遠近を以て意と爲さず。騷雅綺麗、區別して觀有り。)

と見える。「篇題屬興、類之爲伍」一句によれば、『唐詩類選』は詩體や詩風によらず、詩の篇題や本文の内容によつて分類しているものであり、作品の配列順は官職や年代に依らないことははっきりしている。

『唐詩類選』が内容の類目によって分類していることについて、中島敏夫氏は『唐詩類苑』影印本（汲古書院、一九九〇）の「序」で、以下のように、

『唐詩類苑』の「凡例」は「詩に類書無し。詩の類書有るは茲の刻自り始まる」と言うが、唐詩を事類によって分け編纂した詩集は、實はこれ以前にもあった。唐、顧陶『唐詩類選』二十卷、及び宋、張申奎²²『分門纂類唐歌詩』一百卷である。前者は既に佚し、僅かに序文だけが『文苑英華』に残る。

と指摘している。三木雅博氏は中島敏夫氏の論に賛成し、『唐詩類選』は唐代の先行類書の部門と同じような部門を有するのではないかと推測している。唐代の先行類書といえば、『藝文類聚』『初學記』などがあり、その部門には天部や歳時部・地部・山部・水部などがある。三木氏の推測が成立するとすれば、杜甫「天河」は天部に屬し、皇甫冉「秋日東郡作」は歳時部に屬するなど想定できる。

さらに、黃公紹『在軒集』（『文淵閣四庫全書』本）「詩集大成序」には、

夫詩一而已、而體異焉。其間體同而病異、于是乎對同有法。事同而詞異、于是乎區別有類。本同而流異、于是乎繼承有派。善言詩者、廢一不可。鍾嶸發微於詩品、王粲得間於詩律²³。皎然以詩式同契、元實以詩眼窺奇。顧陶類選千首鋪其棊、張爲作圖五層尋其緒。盛唐而降、詩評・詩話之且千、近世所傳、詩統・詩憲之有二。能言之類、至此極矣。

（夫れ詩は一のみなるに、體は異なり。其の間體同じくして病異なり、是に于いてか對同するに法有り。事同じくして詞異なり、是に于いてか區別するに類有り。本同じくして流れ異り、是に于いてか繼承するに派有り。善く詩を言う者は、一を廢すること可ならず。鍾嶸は微を詩品に發し、王粲は間を詩律に得。皎然は詩式を以て契を同じくし、元實は詩眼を以て奇を窺う。顧陶は千首を類選して其の棊を鋪き、張爲は五層を作圖してその緒を尋ぬ。盛唐而降、詩評・詩話の且に千ならんとするも、近世の傳うる所、詩統・詩憲の二有り。能言の類、此に至りて極まれり。）

と見える。黄公紹は宋末の人物であるので、彼はまた『唐詩類選』を読むことができたと思われる。ここに挙げられる『詩人主客圖』や『詩品』・『詩式』などは、詩歌作品を収録しているが、詩選と言うより、文學理論と見做すことができる。それらとともに挙げられる『唐詩類選』にも「取捨之法二十通」があり、同じ性質を兼ね備えていたと考えられる。「事同じくして詞異なり、是に于いてか區別するに類有り」は、『唐詩類選』が詩の主題によって分類編纂された詩選集であることを念頭においた措辭と言えよう。

前掲の陳尙君氏「唐人編選詩歌總集敍録」によれば、「唐人選唐詩」の中に、『唐詩類選』のように「類」で名付けられるのは、劉孝孫『古今類序（一は「聚」に作る）詩苑』・郭瑜『古今詩類聚』・陳匡圖『擬玄類集』・編者不明の『雜編類詩編』四種のみである。「唐人選唐詩」の主流は詩人によって編纂するものであり、事類によって編纂するものは比較的少なかったことが窺える。それは『唐詩類選』が持つ特別な意義を表している。分類詩選集の代表である『唐詩類選』は、後世に相當な影響を及ぼしている。ここで、『唐宋類詩』を一例として挙げてみる。『郡齋讀書志』^④卷二〇には、

『唐宋類詩』二十卷 右唐朝僧仁贊序稱、羅・唐兩士所編。而不詳其名字。分類編次唐及本朝祥符已前名人詩。

（『唐宋類詩』二十卷 右は唐朝僧仁贊の序に、羅・唐兩士の編する所と稱す。而れども其の名字を詳らかにせず。分類して唐及び本朝祥符已前の名人の詩を編次す。）

とあり、『唐宋類詩』は唐代から宋代の祥符（一〇〇八—一〇一六）以前の作品を分類して収録していたものである。その書名は、『唐詩類選』の別名の『唐類詩』^⑤と極めて類似し、同じく二〇巻であり、詩を選録する点においても『唐詩類選』と重なり合っている。

『文苑英華』の南宋の彭叔夏の校記には、「類詩」を引用する例が多く見られる。その「類詩」を引く詩人には、『唐詩類選』に収録されているはずがない劉禹錫や薛能^⑥などがある。また、『文苑英華』卷三〇八劉禹錫

「西塞山懷古」の文末には、「一作、皆唐宋類詩」と注しており、卷三三〇曹唐「病馬五首」その三の文末には、「唐宋類詩指此篇爲曹松作」と注している。さらに、南宋の彭叔夏『文苑英華辨證』にも「唐宋類詩」に三度言及しているが、^⑦『唐詩類選』については、校記及び『辨證』ともに全く引用されていない。

以上によれば、『文苑英華』校記に引用されているのは『唐詩類選』ではなく、『唐宋類詩』であることが明らかであるが、『唐宋類詩』は『唐詩類選』を受け継いだと推測できる内容が見られる。『文苑英華』卷二二二李白「小長干行」の「憶昔深閨裏」一首の題下の校記には、

類詩作張潮。

(類詩、張潮に作る。)

とある。また、『艇齋詩話』には、

唐詩人「小長干行」、全篇皆佳。(中略)『才調集』載兩首、(中略)皆作李太白作。惟顧陶『唐詩選』竝載而分兩處、「妾髮初覆額」一篇李白作、「憶昔深閨裏」一篇張潮作。二者未知孰是。然顧陶『選』恐得其實也。(唐詩人「小長干行」、全篇皆佳し。(中略)『才調集』兩首を載せ、(中略)皆李太白の作に作る。惟だ顧陶『唐詩選』竝びに載せて兩處に分け、「妾髮初覆額」の一篇は李白の作、「憶昔深閨裏」の一篇は張潮の作とす。二者未だ孰れか是なるかを知らず。然れども顧陶の『選』恐らくは其の實を得ん。)

とある。「小長干行」の「憶昔深閨裏」一首は、『才調集』及び『文苑英華』は、すべて李白の作品として収録しているが、『文苑英華』校記によれば、「類詩」即ち『唐宋類詩』は張潮の作とし、『艇齋詩話』に引く「顧陶『唐詩選』」即ち『唐詩類選』も同じく張潮の作としてることが分かる。これは『唐宋類詩』が先行選集の『唐詩類選』の内容を受け継いでいたことの反映と思われる。『文苑英華』校記において『唐詩類選』を引用しないのは、『唐詩類選』の内容が『唐宋類詩』に組み込まれていたからであろう。

4、『唐詩類選』における元和文學の様相

前述のように、『唐詩類選』の編纂は憲宗元和年間から始まり、元和末期にかけて初稿が完成された。顧陶は初稿を編纂した時に、當時の有名詩人に注目しており、彼らの作品を収録しようとしていた。「前序」には、

若元相國稹・白尚書居易、擅名一時、天下稱爲元白、學者翕翕、號元和詩。其家集浩大、不可彫摘。今共無所取、蓋微志存焉。所不足於此者、以刪定之初、如相國令狐楚・李涼公逢吉・李淮海紳・劉賓客禹錫・楊茂卿・盧仝・沈亞之・劉猛・李涉・李璆・陸暢・章孝標・陳罕等十數公、時猶在世。及稍淪謝、卽文集未行、縱有一篇一詠得於人者、亦未稱所錄。僻遠孤儒、有志難就、粗隨所見、不可殫論。

（元相國稹・白尚書居易の若きは、名を一時に擅にし、天下稱して元白と爲し、學者翕翕として、元和詩と號す。その家集は浩大にして、彫摘すべからず。今共に取る所無し、蓋し微志存するなり。此れに足らざる所の者、刪定の初めを以てするに、相國令狐楚・李涼公逢吉・李淮海紳・劉賓客禹錫・楊茂卿・盧仝・沈亞之・劉猛・李涉・李璆・陸暢・章孝標・陳罕等十數公の如きは、時に猶お世に在り。稍く淪謝するに及び、卽ち文集未だ行われず。縦い一篇一詠の人に得る者有るとも、亦た未だ録する所に稱わず。僻遠の孤儒、志有るも就り難し、粗ぼ見る所に隨うのみにして、殫く論ずべからず。）

とある。元稹・白居易は言うまでもなく、ここに言及されている詩人たちは、すべて元和文學の代表者と見做してよいであろう。

元和文學といえば、元和年間に止まらず、貞元から大和にかけての凡そ六十年間を指している。³⁸ 元和文學の中で最も地位が高いのは、所謂「元和十詩人」の韓愈・孟郊・李賀・賈島・白居易・元稹・張籍・王建・劉禹錫・柳宗元である。そのうち、元稹・白居易二人の文集は浩瀚なので、『唐詩類選』に選びとることは難しいと顧陶は述べている。特に白居易の作品が當時の「楊越間」の人々に讀まれており、錢塘出身の顧陶が「僻遠孤

儒」であっても容易に詩集を入手できたことを反映している。

また、『直齋書錄解題』卷十五「極玄集」條には、姚寬『姚氏殘語』を引用して次のように述べている。

顧陶爲『唐詩類選』、如元・白・劉・柳・杜牧・李賀・張佑・趙嘏、皆不收。
(顧陶『唐詩類選』を爲り、元・白・劉・柳・杜牧・李賀・張佑・趙嘏の如きは、皆收めず。)

同じ姚寬が作った『西溪叢語』には、『唐詩類選』を引用する内容が見られ、彼は『唐詩類選』を讀んだことがあると思われる。『唐詩類選』の中に、元(元稹)・白(白居易)・劉(劉禹錫)・杜牧・張祜(佑)の作品を収録しないことは、「前序」「後序」にすでに明言されているが、『唐詩類選』に柳(柳宗元)・李賀・趙嘏三人の作品も収録しないことは、『姚氏殘語』によって初めて明らかにされている。

特に柳宗元は元和の代表詩人として、宋代以降高く評價されているが、『唐詩類選』のみならず、ほぼ同時代の『又玄集』『才調集』にも収録されていない。これについて、柳宗元は古體詩を得意としており、その詩風は激切剛烈であるので、晩唐の詩文愛好と合わないと尙永亮氏は述べている。また、柳宗元は左遷されたので、その作品は廣く流傳することが困難であったと尙永亮・洪迎華兩氏が推論する。^④

柳宗元は元和初年からずっと永州や柳州に任官しており、元和十四年(八一九)柳州で歿した。彼の文集は劉禹錫の手によって編纂されたが、北宋初年の穆修が柳宗元の作品を愛好し、晩年になって柳集を入手して編纂を行い、後の柳集の祖本となった。^⑤このことによれば、柳宗元の作品は晩唐から宋初にかけて廣く流布しておらず、顧陶も彼の作品を讀むことができなかったため、「前序」「後序」で彼に言及しなかったことが容易に理解できる。

『唐詩類選』では當時の中下層の幕府詩人群に注目しており、元和文學の一面の様相を表している。今知るこ
とができる『唐詩類選』に収録されている、或いは「前序」「後序」に言及されている詩人の中に、楊茂卿や姚合などのように、長い間幕府に務めて、同時代の幕府詩人とよく唱和した詩人の例が見られる。魏博田氏の屬

官である楊茂卿を一例として擧げてみる。

楊茂卿が魏博節度使田弘正の屬官であつたことは、前文にすでに述べた。また、「唐故文林郎國子助教楊君墓誌銘」^④や「唐故河南府河南縣令賜緋魚弘農楊公墓誌銘」^④には、兩墓主の父である楊茂卿の生涯について下記のごとく若干の言及があり、幕職以外の経歴も知られる。

皇考諱茂卿、字士蕤、元和六年登進士科、天不福文、故位不稱德、止於監察御史、仍帶職諸侯。（「唐故文林郎國子助教楊君墓誌銘」）

（皇考、諱は茂卿、字は士蕤、元和六年、進士科に登り、天は文を福せず、故に位は德に稱わず、監察御史に止まり、仍お職を諸侯に帶ぶ。）

考茂卿、皇進士及第、監察裏行、名震於時、不幸□難。（「唐故河南府河南縣令賜緋魚弘農楊公墓誌銘」）
（考、茂卿、皇進士に及第し、監察裏行、名時に震う、不幸にして□難す。）

さらに、『太平廣記』^⑤卷二四四「褊急・杜佑」條には、

唐楊茂卿客遊揚州、與杜佑書、詞多捭闔、以周公吐握之事爲諷。佑訝之、時劉禹錫在坐、亦使召楊至、共飯。佑持茂卿書與禹錫曰、請丈人一爲讀之。既畢、佑曰、如何。禹錫曰、大凡布衣之士、皆須擺闔、以動尊貴之心。（中略）翌日、楊不辭而去。

（唐の楊茂卿揚州に客遊し、杜佑に書を與え、詞捭闔多く、周公吐握の事を以て諷を爲す。佑之を訝り、時に劉禹錫坐に在り、亦た楊を召して至らしめ、共に飯す。佑茂卿の書を持て禹錫に與えて曰く、請う丈人一たび爲に之を讀まれんことをと。既に畢り、佑曰く、如何と。禹錫曰く、大凡布衣の士、皆須らく擺闔し、以て尊貴の心を動かすべしと。（中略）翌日、楊辭せずして去る。）

とある。劉禹錫は貞元十六年（八〇〇）の秋から、杜佑の幕府に淮南節度使掌書記として務めており、翌年、畿縣に轉任したことを考えると、楊茂卿が杜佑に書を奉呈して劉禹錫と會食したのは貞元十六年から十七年ま

で（八〇〇―八〇一）のことである。現存する楊茂卿の詩は、『過華山』の殘句一篇だけであるが、その一句は劉禹錫に「實爲佳句」と稱贊された。⁴¹ さらに、『全唐詩』卷三三三楊巨源「贈從弟茂卿、時欲北遊」には、

吾從驥足楊茂卿 吾從の驥足 楊茂卿

性靈且奇才甚清 性は靈にして且つ奇 才甚だ清なり

海内方微風雅道 海内方に微ならんとす 風雅の道

鄴中更有文章盟 鄴中更に文章の盟有り

とあり、楊茂卿の性・才を稱贊する。この詩によれば、楊茂卿は自分の文才を發揮せんとして河北に向かうところであったことが窺える。元和六年（八一―）、彼が進士に登第し、魏博田氏の幕府に入ったのは、田弘正が節度使に着任した元和七年（八二）以降であろう。「鄴中」は魏博節度使の田弘正の幕府を指し、田氏幕府を建安詩壇に喩えたと考えられる。楊巨源も楊茂卿と同じく田氏幕府に務めていた経験がある。⁴²

『唐詩類選』に収録されている姚合は、父の世代から魏博田氏と深い關係を結んでおり、魏博屬官の楊茂卿とよく交遊していた。『全唐詩』卷四九七姚合「寄楊茂卿校書」には、

去年別君時 去年君に別るる時

同宿黎陽城 同に黎陽の城に宿る

黃河凍欲合 黃河凍りて合せんと欲し

船入冰罅行 船は冰罅に入りて行く

君爲使滑州 君は滑州に使うことを爲し

我來西入京 我は來たりて西のかた京に入る

丈夫不泣別 丈夫は別れに泣かざるも

旁人歎無情 旁人は無情に歎く

(中略)

所悲道路長　　悲しむ所は道路長く

親愛難合竝　　親愛合竝し難きこと

還如舟與車　　還た舟と車の如く

奔走各異程　　奔走して各おの程を異にす

とあり、生計のために駆けずり回った境遇から互いに勵まし合った二人の様子を描いている。元和十二年(八一七)、姚合が校書として魏博に着任してから、長慶元年(八二一)楊茂卿が殺害されるまで、その二人の交遊は絶えず行われていたと推測できる。

また、「後序」に言及されている沈亞之も、元和年間に鄭滑幕府で幕職に就いており、魏博屬官の楊茂卿と交際したことがある。『沈下賢集』(四部叢刊本)卷三「魏滑分河録」には、

(元和九年)夏六月、魏使楊茂卿授地、滑帥令陳酒樂、與浮河新渠。是日、亞之以客得與。

(夏六月、魏使楊茂卿地を授け、滑帥令して酒樂を陳べしめ、與に河の新渠に浮かぶ。是の日、亞之客を以て與かるを得。)

と見え、沈亞之が元和九年(八一四)、滑州刺史薛平の下に従事しており、滑州に派遣された楊茂卿と知り合っ
いになった。滑州時代の宴會に關する資料は残されていないが、詩名の高い二人が交際ないし詩文唱和したこ
とは想像するに難くない。

元和年間の魏博田氏は、朝廷に厚く信賴されており、田弘正本人も文化に深い關心をもっていた。⁵¹ 田弘正が楊茂卿を代表とする、當時名高い詩人を招來して幕下に集め、當時の文壇に相當な影響力を有していたことを『唐詩類選』の收録狀況が物語っている。元和年間に於ける顧陶の事跡は不詳であるが、魏博田氏の幕府詩人と何らかの交遊關係を有した可能性も捨てられない。

三、唐代文學・文獻學に於ける『唐詩類選』の受容及び影響

1、『唐詩類選』による杜詩の校勘

『唐詩類選』は現存していないが、唐代文學・文獻學において重要な意味を有している。『唐詩類選』が散佚する以前、宋人は『唐詩類選』を讀んで、しばしばその杜詩の異文に注目している。『草堂詩箋』や『艇齋詩話』など宋代の杜甫詩注・詩話は、『唐詩類選』における杜詩の異文を多く傳えている。『艇齋詩話』には、

顧陶『唐詩類選』二十卷、其間載杜詩、多與今本不同。顧陶唐大中間人、去杜不遠、所見本必稍眞。今併錄同異于後。

(顧陶『唐詩類選』二十卷、其の間杜詩を載せ、多く今本と同じからず。顧陶は唐の大中間の人にして、杜を去ること遠からず、見る所の本必ず稍や眞ならん。今併びに同異を後に録す。)

と見え、『唐詩類選』所收の杜詩の本文は、宋代の通行本より優れていたことが窺え、杜詩の校勘において有益な資料となる。

宋人だけではなく、清代の錢謙益や仇兆鰲の杜詩注本にも、『唐詩類選』による異文を注する箇所が見られる。錢謙益『錢注杜詩』には次のように五箇所に見える(詩題の前に附した番號は、附表二の整理番號である)。

卷九 (3)「重過何氏五首」其二、「吳曾『漫錄』、顧陶本作犬憎間宿客」。

(5)「一百五日夜對月」、「顧陶本作折盡」。

卷一一 (16)「田舍」、「唐顧陶作楊」、「顧陶作對對」。

卷一二 (25)「倦夜」、「吳曾『漫錄』、顧陶『類編』題云、倦秋夜、三聯云、飛螢自照水、宿鳥競相呼」。

卷一八 (24)「遣憂」、「吳曾『漫錄』、唐顧陶大中丙子歲編『唐詩類選』載此詩、世所傳杜集皆無之」。

附表二の典據欄を参照してみれば、錢謙益が『唐詩類選』の杜詩の異文を吳曾『能改齋漫錄』から録出していることが窺える。⁵²⁾ また、『艇齋詩話』にも杜詩の異文を數多く傳えているが、錢謙益には注目されなかつたようである。

ただ、『能改齋漫錄』が記載している異文は全六箇所であるが、錢謙益は(8)「寄高三十五詹事」の異文を収録していない。その異文は『能改齋漫錄』卷三「犬迎曾宿客」條に、

惟「寄高適」詩、舊本乃「天上多鴻鴈、池中足鯉魚」。陶本乃以「池」爲「河」、似不及「河」也。
(惟だ「高適に寄す」詩、舊本乃ち「天上鴻鴈多し、池中鯉魚足る」。陶本は乃ち「池」を以て「河」と爲し、「河」に及ばざるに似たり。)

とある。ただし、『錢注杜詩』⁵³⁾ 卷一〇「寄高三十五詹事」は、「池中足鯉魚」句の「池」字に「一作河」と注している。他の五例と書き方が異なるが、單なる書名の記入漏れと思われる。

注意すべきなのは、仇兆鰲『杜詩詳注』⁵⁴⁾ にも、

卷三 (3)「重過何氏五首」其二、「顧陶本作犬憎間宿客」。

卷四 (5)「一百五日夜對月」、「顧陶本作折盡」。

卷九 (16)「田舍」、「唐顧陶『類編』作楊柳」、「對對、從顧陶本」。

卷一二 (24)「遣憂」、「吳曾『漫錄』、唐顧陶大中丙子歲編『唐詩類選』載此詩、世所傳杜集皆無之」。

卷一四 (25)「倦夜」、「顧陶『類編』作倦秋夜」、「顧陶『類編』作飛螢自照水、宿鳥競相呼」。

と『唐詩類選』の異文が五箇所見られるが、すべて錢謙益の収録の範圍を越えないことである。なお、『杜詩詳注』卷六「寄高三十五詹事」には「池中足鯉魚」異文を収録しているが、同じく「一作河」に作る。仇兆鰲は自ら『唐詩類選』の異文を録出したのではなく、錢謙益の研究成果を採り入れたのであろう。

2、『唐詩類選』における小詩人の収録

杜甫のような大家ではなく、『唐詩類選』には小詩人の作品もよく収録されており、それらの作品は唐代以降の選集や詩話に受け継がれ、『唐詩類選』の唐代文學・文獻學に於ける重要な価値を示している。以下に幾つかの例を挙げてみる。

『唐詩紀事』卷一五「金昌緒」條には、

「春怨」詩云、「打却黃鸝兒、莫教枝上啼。幾廻驚妾夢、不得到遼西。」顧陶取此詩爲『唐詩類選』。昌緒、余杭人。

（「春怨」の詩に云く、「黃鸝兒を打却し、枝上に啼かしむること莫かれ。幾廻か妾の夢を驚かし、遼西に到るを得ざらしむ。」と。顧陶は此の詩を取りて『唐詩類選』と爲す。昌緒は、余杭の人なり。）

とあり、文末注には、

一作蓋嘉運「伊州歌」者、非也。此詩爲嘉運所進、編入樂府、後乃誤爲嘉運作耳。

（一に蓋嘉運の「伊州歌」に作るは、非なり。此の詩は嘉運の進むる所と爲りて、樂府に編入せられ、後に乃ち誤りて嘉運の作と爲すのみ。）

とある。錢謙益・季振宜『全唐詩稿本』は、『唐詩紀事』卷一五によつて金昌緒の條にこの一首を「春怨」という詩題で収録しており、後に『全唐詩』に受け継がれている。『樂府詩集』（傅增湘藏宋本）卷七九「伊州」條には、

『樂苑』曰、「伊州」、商調曲、西京節度蓋嘉運⁵⁵所進也。

（『樂苑』に曰く、「伊州」は、商調曲にして、西京節度の蓋嘉運の進むる所なり。）

とあり、これによれば、「伊州歌」は詩題名ではなく、蓋嘉運によって樂府に進呈された曲調名である。金昌緒はその曲によって新たな歌詞を作って「春怨」と名付けたのであるから、『唐詩類選』の記載が正しいと思われる。現存する金昌緒の作品は「春怨」一首だけであり、『唐詩類選』の収録がなければ、「春怨」が金昌緒の作である事實や、さらには金昌緒の名前さえも埋もれて傳わらなくなったであろう。

また、前述のように、『唐詩類選』は李敬方の作品を「三百首の中、間に律韻八篇を録するのみ」と述べている。『唐音統籤』卷五四六「李敬方」條には、

大中時、顧陶集『唐詩類選』。(中略)茲七篇、當是陶集流傳、又已缺一篇。

(大中の時、顧陶『唐詩類選』を集む。(中略)茲の七篇、當に是れ陶集の流傳なるべきも、又た已に一篇を缺く。)

とある。次に詩題を列記するように、『唐音統籤』には李敬方の作品である律韻七首を収録しており、『唐詩類選』の収録より一篇不足している。

遣興・勸酒・近無西耗・天臺晴望・聞高侍御卒貶所・太和公主還宮・汴河直進船。

これに對して、『全唐詩』は次に示すように、李敬方の律韻を収録しているが、まさしく『唐詩類選』が述べている八首の數に合致する。

遣興・勸酒・近無西耗・天臺晴望・聞高侍御卒貶所・題黃山湯院・太和公主還宮・汴河直進船。

兩本の篇目を對照してみれば、『全唐詩』の「題黃山湯院」一篇が多いことが分かる。「題黃山湯院」は『全唐詩』より二十年あまり前の康熙十八年(一六七九)に成立した『黃山志』にも見られる。『黃山志』(『安徽叢書』本)卷六には、

李敬方「題黃山湯院」(本文は省略)

敬方以頭風養悶、大中五年十二月、因小恤假內、再往黃山浴湯、題四十字。

(敬方頭風を以て悶を養い、大中五年十二月、小恤の假の内に因り、再び黃山の浴湯に往き、四十字を題す。)

李敬方「題小華山」(本文は省略)

とある。『黃山志』は李敬方の詩二首を収録しており、前者には彼の事跡を記載しているが、その内容は『全唐詩』の小傳には見当たらない。後者は『全唐詩』に収録されておらず、孫望氏『全唐詩補逸』によって初めて補入された。

もし『全唐詩』が「題黃山湯院」を『黃山志』によって補入したとすれば、題注を録出しないはずはないと考えられる。また「題小華山」も必ず収録できたに違いない。従って、『全唐詩』所收の李敬方の詩八首は、『唐音統籤』所收の七首に『黃山志』からもう一首を補入したのではなく、もともと『唐詩類選』に選録されており、それが康熙年間まだ存在していたある詩集に受け継がれ、最後に『全唐詩』に掲載されたのではないかと推測できよう。

以上の作品の流傳は、概ね『唐詩類選』に収録され、『唐詩紀事』・『萬首唐人絕句』などの宋代の詩話・選集に轉載され、『唐音統籤』・『全唐詩稿本』などの明代の唐詩集に採録され、最後に『全唐詩』に定着して、現在の唐詩研究の基本資料になったと言える。これと類似した例が、張循「巫山高」⁵⁶や暢當「軍中醉飲」⁵⁷などにも見られ、『唐詩類選』は唐代文學・文獻學において極めて重要な價值を有していると言えるのである。

むすびとして

以上、小論は顧陶の生涯及び『唐詩類選』の成立について、従来の論點を検討した上で、新たな説を提出した。顧陶が『唐詩類選』の初稿を完成したのは元和年間であり、後に修訂を加えたことがあるが、宜しきを得ず中斷した。大中末年、顧陶が太子校書を辭任する前後、『唐詩類選』の編纂を再開したが、初稿に大きな改變を加えることはなかったようである。また、『唐詩類選』の「後序」は杜牧などの歿年の考察において貴重な資料と見做されているが、一部の内容は『唐詩類選』の初稿が成立した當時の事情を記載しているので、「後序」によって杜牧などの歿年を考證するには注意が必要と思われる。

「唐人選唐詩」の一種である『唐詩類選』は、中晩唐期の人である顧陶の文學觀を反映している。小論は『唐詩類選』の内容及び編成を復元し、「唐人選唐詩」における『唐詩類選』の意味を論じた。その「尊杜」思想の先驅性については、前掲の卞孝萱氏の論文にすでに明らかにされているが、本書に反映されている元和文學の様に對する認識を小論は新たに論及してみた。『唐詩類選』は元和年間の有名詩人を全面的に収録するものではないが、「後序」に述べられる補訂の意向は顧陶の文學觀を示しており、特に幕府詩人群の作品が「僻遠孤儒」の顧陶にさえ讀まれたことは、當時彼らが相當な影響力をもっていたことを傳えている。それに對して、宋代以降、高く評價されている柳宗元の作品が、『唐詩類選』及び同時代の選集に収録されていないことは、元和文學の受容の變遷を表している。

なお、『唐詩類選』所収の作品の本文は、唐代文學・文獻學に於ける重要な意味を有している。特に金昌緒などの小詩人は、杜・李のように、作品を別集の形で保存されることが極めて難しいと考えられ、『唐詩類選』は彼らの最も優秀な作品を収録し、後代の詩話や選集に繼承され、さらにそれらを通して現在の我々にも傳えている。『唐詩類選』は元代以降散佚したが、その所収詩の一部は歴代の文獻に保存され、最後に『全唐詩』に定着している。書物は戦亂や災害によって消滅し易いが、人間の想像力をはるかに越える生命力を有しているのである。

附表一 『唐詩類選』所收の詩人名

1、「前序」「後序」所見の詩人名（全三十一人）

時代區分	詩人名
初唐	陳伯玉（子昂）・儲光羲・沈佺期・宋之問・張說・張九齡
盛唐	李白・杜甫・王昌齡・孟雲卿・沈千運・高適・常建・嚴維・孟浩然
中唐	韋應物・李益・顧況・于鵠・暢當・孟郊・韓愈・張籍・劉長卿・錢起・司空曙・李端・皇甫曾・皇甫冉
晚唐	姚合・李敬方

2、「前序」「後序」所見以外の詩人名（全十二人）

作者名	所據
楊郇伯	『苕溪漁隱叢話』後集卷一七 『復齋漫錄』云、唐顧陶編『唐詩類選』、載楊郇伯作妓人出家詩云、（後略）。
張循（之）	『唐詩紀事』卷一一「沈佺期」條 「巫山高」云、（中略）。此詩范攄以爲佺期之作、而顧陶以爲張循。今記於此。
金昌緒	『唐詩紀事』卷一五「金昌緒」條 「春怨」詩云、（中略）。顧陶取此詩爲『唐類詩』。昌緒、餘杭人。
綦毋潛	『唐詩紀事』卷二〇「綦毋潛」條 「早發上東門」云、（中略）。顧陶取爲『唐類詩』。
顏舒	『唐詩紀事』卷二〇「顏舒」條 「鳳樓怨」云、（中略）。顧陶取爲『唐類詩』。

朱絳	『唐詩紀事』卷二八「朱絳」條 「春女怨」云、(中略)。顧陶取此書爲『類選』。
無名氏	『唐詩紀事』卷八〇「不知名」條二〇五二 傳聞天子訪沉淪、萬里懷書西入秦。早知不用無媒客、恨別江南楊柳春。顧陶『類詩』云、不知名氏。
鮑溶	『元豐類藁』卷一一「鮑溶詩集」目錄序 知制誥敏求爲臣言、此集詩見『文粹』、『唐詩類選』者、皆稱鮑溶作。又防之「雜感詩」最顯而此集無之、知此詩非防作也。
孫叔向	『艇齋詩話』 韓子蒼「樓中有妾相思淚、流到樓前更不流」、用唐人孫叔向「溫泉詩」「雖然水是无情物、流到宮前咽不流」。其詩見顧陶『唐詩類選』、『金華瀛湘集』作王建詩、非也。
張潮	『艇齋詩話』 唐詩人「小長干行」全篇皆佳。(中略)『才調集』載兩首、(中略)皆作李太白作。惟顧陶『唐詩選』竝載而分兩處。「妾髮初覆額」一篇李白作、「憶昔深閨裏」一篇張潮作。二者未知孰是。然顧陶『選』恐得其實也。
秦系	『唐音統籤』卷二六八 系詩集二十九篇、慶曆中呂夏卿榜之于亭、又於顧陶『類詩』中得八篇、同榜之後。紹興中、南安主管學事張端刻系詩、又益二篇、爲三十九篇、則得之宋次道『寶刻叢章』補入者。
韋承慶	『和漢朗詠集』卷上・秋・雁付歸雁 江注 南中詠雁、絕句、韋承慶云々、唐詩類撰第六。(天理本・鳳來寺本)

附表二 『唐詩類選』 所收詩人・作品・典據一覽

番號	詩人名	作品名	典據
1	杜甫 ⁵⁹	「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」	『艇齋詩話』 顧陶『唐詩類選』二十卷、其間載杜詩多與今本不同。顧陶唐大中間人、去杜不遠、所見本必稍真、今併錄同異于後。「山河扶繡戶」、作「星河浮繡戶」。
2	杜甫	「同諸公登慈恩寺塔」	『艇齋詩話』 (前略)「俯視但一氣」、作「俯視但吁氣」。
3	杜甫	「重過何氏五首」其の二 ⁶⁰	『能改齋漫錄』卷三「犬迎曾宿客」條 今詩所傳杜詩、「犬迎曾宿客、鴉護落巢兒」。余家有唐顧陶所編『杜詩』、乃是「犬憎間宿客」、二字不同、然皆有理。 『艇齋詩話』 ほぼ同じ。
4	杜甫	「贈獻納使起居田舍人澄」	『艇齋詩話』 (前略)「宮女開函近御筵」、作「宮女開函進御筵」。
5	杜甫	「二百五日夜對月」	『能改齋漫錄』卷三「犬迎曾宿客」條 (前略)又「對月」詩、舊本作「斫却月中桂」、陶本作「折盡月中桂」。二字亦不同。 『艇齋詩話』 ほぼ同じ。
6	杜甫	「遣興」	『艇齋詩話』 (前略)「家貧仰母慈」、作「家貧賴母慈」。

15	杜甫	「酬高使君相贈」	『艇齋詩話』 (前略)「賦或似相如」、作「賦或比相如」。
14	杜甫	「病馬」	『艇齋詩話』 (前略)「乘爾亦已久」、作「乘汝亦已久」。「感動一沈吟」、作「感激一沈吟」。
13	杜甫	「天河」	『艇齋詩話』 (前略)「秋至輒分明」、作「秋至轉分明」。「伴月落邊城」、作「伴月下邊城」。
12	杜甫	「秦州雜詩二十首」其の 二一	『艇齋詩話』 (前略)「勝迹隗囂宮」、作「傳是隗囂宮」。「丹青野殿空」、作「丹青野殿空」。
11	杜甫	「夢李白二首」其の一	『艇齋詩話』 (前略)「明我長相憶」、作「知我長相憶」。「何以有羽翼」、作「何以生羽翼」。
10	杜甫	「至日遣興奉寄北省舊閣 老兩院故人二首」其の二	『艇齋詩話』 (前略)「去年今日侍龍顏」、作「去年冬至侍君顏」。
9	杜甫	「九日藍田崔氏庄」	『艇齋詩話』 (前略)「興來今日盡君歡」、作「興來終日盡君歡」。「羞將短髮還吹帽」、作「羞將短髮猶吹帽」。 「明年此會知誰健」、作「明年此會知誰在」。
8	杜甫	「寄高三十五詹事」	『能改齋漫錄』卷三「犬迎曾宿客」條 (前略)惟「寄高適」詩、舊本乃「天上多鴻鴈、池中足鯉魚」。陶本乃以「池」爲「河」、似不及「河」也。 『艇齋詩話』 ほぼ同じ。
7	杜甫	「奉和賈至舍人早朝大明 宮」	『艇齋詩話』 (前略)「九重春色醉僊桃」、作「九天春色醉僊桃」。

23	22	21	20	19	18	17	16
杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫
「送梓州李使君之任」	「不見」	「少年行」	「送韓十四江東觀省」	「題新津北橋樓」	「和裴迪登新津寺寄王侍郎」	「遣興」	「田舍」
『艇齋詩話』 (前略)「老思筇竹杖、作「老思筇竹柱」。	『艇齋詩話』 (前略)「吾豈獨憐才、作「惟我獨憐才」。	『艇齋詩話』 (前略)「不通姓字粗豪甚、作「不通姓字粗豪困」。	『艇齋詩話』 (前略)「黃牛峽靜灘聲轉、作「黃牛峽淺灘聲急」。	『艇齋詩話』 (前略)「白花簷外朶、青柳檻前梢、作「白花筵外朶、青柳檻前梢」。	『艇齋詩話』 (前略)「老夫貪費日、作「老夫貪賞日」。	『艇齋詩話』 (前略)「衰疾那能久、作「衰病那能久」。	『能改齋漫錄』卷四「杜詩字不同」條 (前略)又陶所編杜「田舍」詩云、「楊柳枝枝弱、枇杷對對香」。考今本乃云、「櫻柳枝枝弱、枇杷樹樹香」。「櫻」「楊」二字不同、「櫻」字非也。枇杷止一物、櫻柳則二物矣、然「樹樹」亦差勝「對對」也。 『杜工部草堂詩箋』卷一八「田舍」・『艇齋詩話』 ほぼ同じ。

29	28	27	26	25	24
杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫	杜甫
「哭李尙書」	「孟冬」	「送惠二歸故居」 ^⑪	「上白帝城二首」其一	「倦夜」	「遣憂」
『艇齋詩話』 (前略)「欲挂留徐劍、作「欲把留徐劍」。	『艇齋詩話』 老杜「破柑霜落爪、嘗稻雪翻匙」、顧陶『詩選』作「破瓜霜落刃」。 (前略)「破柑霜落爪」、作「破瓜霜落刃」。「烏蠻瘴遠隨」、作「黔谿瘴遠隨」。	『侯鯖錄』卷二 劉路左車嘗收唐人新編當時人詩冊、有老杜數十首、其間用字、皆與今本不同。有「送惠二過東溪詩」、集中無有。詩云、「惠子白驢瘦、歸溪惟病身。皇天無老眼、空谷滯斯人。崖蜜松花熟、山杯竹葉春。柴門了生事、黃綺未稱臣。」 『苕溪漁隱叢話』前集卷一三 ほぼ同じ。	『艇齋詩話』 (前略)「取醉他鄉客、相逢故國人」、作「取醉他鄉酒、相逢故里人」。	『能改齋漫錄』卷四「杜詩字不同」條 顧陶所編『杜詩』、有題云「倦秋夜」、而今本止云「倦夜」。內一聯云、「飛螢自照水、宿鳥競相呼」。今本乃云「暗飛螢自照、水宿鳥相呼」。雖一字不同、便覺語勝於前。 『艇齋詩話』 ほぼ同じ。	『能改齋漫錄』卷二「杜子美集無遣憂」條 余家有唐顧陶大中丙子歲所編『唐詩類選』、載杜子美「遣憂」一詩云、「亂離知又甚、消息苦難真。受諫無今日、臨危憶故臣。紛紛乘白馬、攘攘著黃巾。隋氏營宮室、焚燒何太頻。」世所傳杜集、皆無此詩。

35	34	33	32	31	30
暢當	張潮	李白	孫叔向	常建	杜甫
「軍中醉飲寄沈八劉叟」	「小長干行」	「小長干行」	「溫泉」	「題破山寺後院詩」	「風涼原上作」 ^⑫
<p>『艇齋詩話』 山谷用「酒渴愛江清」為韻、人知為唐人詩、而不知其為誰氏也。顧陶『詩選』載暢當作。當有詩名其詩云、「軍中醉飲作」。其前四句云、「酒渴愛江清 酣漱晚汀。 輒莎敲坐穩 冷石醉眠醒。」皆佳句、狀得醉與酒渴之意極。</p>	<p>『艇齋詩話』 然顧陶『選』恐得其實也。</p>	<p>『艇齋詩話』 唐詩人「小長干行」全篇皆佳、(中略)『才調集』載兩首、(中略)皆作李太白作。惟顧陶『唐詩選』竝載而分兩處。「妾髮初覆額」一篇、李白作。「憶昔深閨裏」一篇、張潮作。二者未知孰是。</p>	<p>『艇齋詩話』 韓子蒼「樓中有妾相思淚、流到樓前更不流」、用唐人孫叔向「溫泉」詩、「雖然水是无情物、流到宮前咽不流」、其詩見顧陶『唐詩類選』。</p>	<p>『西溪叢語』卷上 常建有「題破山寺後院詩」云、「竹徑通幽處、禪房花木深。」余觀『又玄集』·『唐詩類選』·『唐文粹』、皆作「通」。</p>	<p>『艇齋詩話』 又載「風涼原上作」一首、今杜詩無之、其詩全錄於此。「陰森宿雲端、霧露溼松柏。風淒日初晚、下嶺望川澤。連山無晦明、秋水千里白。佳氣鬱未央、聖人在凝碧。關門阻天下、信是帝王宅。海內方晏然、廟堂有良策。時貞守全運、罷去遊說客。余忝南臺人、尋憂免貽責。」以此見杜詩尙多、今集中所載、亦不能盡也。</p>

42	41	40	39	38	37 - 36
顏舒	綦母潛	金昌緒	張循	楊郁伯	韋應物
「鳳樓怨」	「早發上東門」	「春怨」	「巫山高」	「妓人出家詩」	「陪王郎中尋孔徵君」 「和晉陵陸丞早春遊望」
『唐詩紀事』卷二〇 「鳳樓怨」云、「佳人名莫愁、珠箔上花鉤。清鏡鴛鴦匣、新粧翡翠樓。搗衣明月夜、吹管白雲秋。唯恨金吾子、年年向隴頭。」顧陶取爲『唐類詩』。	『唐詩紀事』卷二〇 「早發上東門」云、「十五能行西入秦、三十無家作路人。時命不將明主合、紫衣空染洛陽塵。」顧陶取爲『唐類詩』。	『唐詩紀事』卷一五 「春怨」詩云、「打却黃鸝兒、莫教枝上啼。幾迴驚妾夢、不得到遼西。」顧陶取此詩爲『唐類詩』。 昌緒、餘杭人。	『唐詩紀事』卷一一 「巫山高」云、「巫山高不極、合沓奇狀新。暗谷疑風雨、陰崕若鬼神。月明三峽曙、潮滿九江春。爲問陽臺客、應知入夢人。」此詩范攄以爲佺期之作、而顧陶以爲張循、今記於此。	『茗溪漁隱叢話』後集卷一七 「復齋漫錄」云、唐顧陶編『唐詩類選』、載楊郁伯作「妓人出家詩」云、「盡出花鈿與四隣、雲鬟翦落向殘春。暫驚風燭難留世、便是池蓮不染身。貝葉乍翻迷錦字、梵聲初學誤梁塵。從今艷色歸空後、湘浦應無解佩人。」 『優古堂詩話』・『能改齋漫錄』卷二 ほぼ同じ。	『茗溪漁隱叢話』後集卷九 『復齋漫錄』云、(中略)「陪王郎中尋孔徵君」詩也。(中略)「和晉陵陸丞早春遊望」詩也。 二篇皆佳作、而韋集逸去。家有顧陶所編『唐詩』有之、故附於此。

56 - 49	48	47	46	45	44	43
秦系	韋承慶	皇甫冉	錢起	李益	無名氏	朱絳
八首（篇目不明）	「南中詠雁」	「秋日東郡作」	「贈閣下閤舍人詩」	「度破訥沙二首」その一	（案ずるに、失題。）	「春女怨」
『唐音統籤』卷二六八 系詩集二十九篇、慶曆中呂夏卿榜之于亭、又於顧陶『類詩』中得八篇、同榜之後。	『和漢朗詠集』卷上・秋・雁付歸雁 江注、「南中詠雁」、絶句、韋承慶云々、『唐詩類撰』第六。（天理本・鳳來寺本）	『和漢朗詠集』卷上・秋・九月九日付菊 江注、『唐詩類撰』曰、「秋日東郡作」、皇甫冉。々々（李端）、作者相違、如何。（正安本裏書）	『和漢朗詠集』卷上・春・雨 江注、『唐詩類撰』十一、錢起「贈閣下閤舍人詩」、「二月黃鶯飛上林、春城紫禁曉陰陰。長樂鐘聲花外盡、龍池柳色雨中深。陽和不散窮途恨、霄漢長懸捧日心。獻賦十年猶未遇、羞將白髮對華簪。」（正安本裏書）	『古今合璧事類備要』別集卷三 鷓鴣泉。破訥沙頭鴈正飛、——上戰初歸。平明日出東南望、滿磧寒光生鐵衣。類選、李益。	『唐詩紀事』卷八〇 「傳聞天子訪沉淪、萬里懷書西入秦。早知不用無媒客、恨別江南楊柳春。」顧陶『類詩』云、不知名氏。	『唐詩紀事』卷二八 「春女怨」云、「獨坐紗窗刺綉遲、紫荊枝上囀黃鸝。欲知無限傷春意、併在停針不語時。」顧陶取此詩爲『類選』。

- ① 陳尙君氏「唐人編選詩歌總集跋錄」本文考及一百三十七種總集、較今人已論及者多出八十餘種、另存目五十餘種」（『唐代文學叢考』、中國社會科學出版社、一九九七、頁一八五）。
- ② 即ち『翰林學士集』・『珠英集』・『搜玉小集』・『丹陽集』・『河嶽英靈集』・『國秀集』・『篋中集』・『玉臺後集』・『中興間氣集』・『御覽詩』・『元和三舍人集』・『極玄集』・『竇氏聯珠集』・『又玄集』・『瑤池新詠集』・『才調集』である。
- ③ 『唐人選唐詩新編（增訂本）』、傅璇琮・陳尙君・徐俊編選、中華書局、二〇一四。
- ④ 『學林漫錄』第八輯、中華書局、一九八三。
- ⑤ 『國語と國文學』、二〇〇五年、第五期。
- ⑥ 『關西大學文學論集』六〇（四）、二〇一一。
- ⑦ 『唐五代人物傳記總合索引』、傅璇琮・張忱石・許逸民編撰、中華書局、一九八二。
- ⑧ 『直齋書錄解題』、陳振孫撰、上海古籍出版社、一九八七。
- ⑨ 『登科記考補正』卷二二、北京燕山出版社、二〇〇三、頁八九二。
- ⑩ 『唐六典』卷二六「太子左春坊」には、「崇文館、（中略）校書一人、從九品下。」とある。
- ⑪ 『舊唐書』卷四四「職官志三」には、「崇文館、貞觀中置、太子學館也。（中略）校書二人、從九品下。」とあり、『新唐書』卷四九上「百官四上」には、「崇文館、（中略）校書郎二人、從九品下、掌教理書籍。（中略）貞元八年、隸左春坊。」とある。
- ⑫ 『全唐詩』卷五四四「劉得仁小傳」には、「劉得仁、貴主之子、長慶中即以詩名。自開成至大中三朝、昆弟皆歷貴仕、而得仁出入舉場三十年、卒無成」とあり、彼が顧陶と同時代人であることが窺える。
- ⑬ 小論が引用する『唐詩類選』「前序」「後序」は、すべて明刊本（中華書局、一九六六）に従う。
- ⑭ 原文は避諱のために「景」に作るが、小論の引用はすべて「丙子」に改める。

⑮ 陳尙君氏「唐人編選詩歌總集跋録」、「後序作年似稍遲、稱時年七十四、「爲『類選』三十年」、始編約在文宗初」（『唐代文學叢考』、頁一九三）。

⑯ 羅時進氏「杜牧自撰墓志銘探微：兼論作者歿年問題」、『人文雜誌』、一九八八年、第六期。また、羅氏『唐詩演進論・許渾年譜稿』（江蘇古籍出版社、二〇〇一）。

⑰ 繆鉞氏「杜牧歿年再考：與羅時進同志書」、『文史』、一九九二年、第三五輯。

⑱ 「杜牧生卒年論據考察」、植木久行氏『詩人たちの生と死』、研文出版、二〇〇五、頁二二三。『集刊東洋學』第六八號（東北大學中國文史哲研究會、一九九二）初出。

⑲ 吳在慶・常鵬兩氏「趙嘏・杜牧歿年與『唐詩類選』後序」作年考論、『福建師範大學學報（哲學社會科學版）』、二〇一一年、第一期。
⑳ 『文苑英華』の原文は「詩」に作るが、誤字であり、小論の引用はすべて『唐詩紀事』によって「時」に改める。

㉑ 『新唐書』卷一一八「李甘傳」、「甘方未顯、以書薦於尹曰、「執事之部孝童楊牢、父茂卿、從田氏府、趙軍反、殺田氏、茂卿死。」

㉒ 『劉禹錫集』、下考訂校訂、中華書局、一九九〇。

㉓ 各詩人の歿年は概ね『中國文學家大辭典・唐五代卷』（周祖譔主編、中華書局、一九九二）に従う。

㉔ 録文は陶敏氏「讀姚合、盧綺二誌札記」（『文史』、二〇一一年、第九四輯）に従う。

㉕ 李敬方の歿年は不明だが、羅願『新安志』（『文淵閣四庫全書』本）卷九によれば、李敬方は大中四年から六年（八五〇―八五二）まで歙州刺史に在任していたので、その歿年は大中六年（八五二）以降であることが知られる。詳しくは『唐才子傳校箋』（中華書局、

一九八七―一九九五）卷七「李敬方」條・郁賢皓氏『唐刺史考全編』（安徽大學出版社、二〇〇〇）卷二四八「歙州」條を参照されたい。

⑳ 陳尙君氏「唐人編選詩歌總集跋録」、「前序稱道初唐以來詩人甚衆、顯爲書中入選者」（頁一八五）。

㉗ 『文苑英華』には、「類詩」を引用する例は數多く存在しているが、それは『唐詩類選』ではなく、羅・唐兩士（名字不詳）が編纂する『唐宋類詩』である。詳しくは後文を参照されたい。

㉘ 陳尙君氏『唐代文學叢考』、中國社會科學出版社、一九九七、頁三二一―三三二。『中國古典文學叢考』第一輯（復旦大學出版社、一九八五）初出。

- ②⑨ 注⑥参照、頁三七—三八。
- ③⑩ 三木雅博氏「中國晚唐期の唐代詩受容と平安中期の佳句選」、頁六八。
- ③① 盧燕新氏『唐人編選詩文總集研究』、中國人民大學出版社、二〇一四、頁一二五。
- ③② 「趙孟奎」の誤り。
- ③③ 王粲『詩律』については未詳。
- ③④ 『郡齋讀書志校證』、晁公武撰、孫猛校證、上海古籍出版社、一九九〇。
- ③⑤ 『唐詩紀事』はよく『唐詩類選』を『唐類詩』と略稱する。例えば、卷二〇「顏舒」條に「顧陶取爲『唐類詩』」とある。
- ③⑥ 『全唐詩』卷五五八「薛能小傳」、「廣明元年、徐軍戍澱水、經許、能以舊軍、館之城、軍懼見襲。大將周岌乘衆疑逐能、自稱留後、因屠其家。」薛能の歿年は、廣明元年（八八〇）であり、『唐詩類選』に収録されているわけではない。
- ③⑦ 『文苑英華辨證』卷五には「中興間氣集・又玄集 唐宋類詩皆云杜誦」とあり、卷六には「省試詩見唐宋類詩者、名姓有異同」とあり、卷七には「前篇、唐宋類詩以爲杜荀鶴作、而杜集亦無之」とある。
- ③⑧ 尙永亮氏「接受美學視野下的元和詩歌及其研究進路」、『陝西師範大學學報（哲學社會科學版）』、二〇〇七年、第五期、第三六卷。
- ③⑨ 『元氏長慶集』（上海古籍出版社、二〇一一）卷五一「白氏長慶集後序」、「楊越間多作書、模勒樂天及予雜詩。」
- ④⑩ 『西溪叢語』卷上、「常建有「題破山寺後院詩」云、「竹徑通幽處、禪房花木深。」余觀『又玄集』、『唐詩類選』、『唐文粹』、皆作「通」。
- ④① 尙永亮・洪迎華兩氏「從選本看元和詩歌在唐宋金元的傳播接受」、『求是學刊』、二〇一〇年、第五期。
- ④② 萬曼氏『唐集敘錄』（中華書局、一九八〇）「河東先生集」條參照。
- ④③ 周紹良主編『唐代墓誌彙編』、大中〇五九、上海古籍出版社、一九九二。
- ④④ 周紹良主編『唐代墓誌彙編』、大中一三七。
- ④⑤ 『太平廣記會校』、李昉等編、張國風會校、燕山出版社、二〇一一。
- ④⑥ 卞孝萱氏『劉禹錫年譜』、鳳凰出版社、二〇一〇、頁二一・二六。
- ④⑦ 『唐詩紀事』卷二九「劉禹錫」條。

④⑧ 陶敏氏「讀姚合、盧綺二誌札記」(頁二五二) 參照。

④⑨ 陶敏氏「讀姚合、盧綺二誌札記」參照。

⑤⑩ 『舊唐書』卷一二四「薛平傳」、「元和七年、淮西用兵、自左龍武大將軍授兼御史大夫・滑州刺史・鄭滑節度觀察等使、累有戰功。滑州城西距黃河二里、每歲常爲水患。平詢訪得古河道、接衛州黎陽縣界。平率魏博節度使田弘正同上聞、開古河南北長十四里、決舊河以分水勢、滑人遂無水患。」

⑤⑪ 『舊唐書』卷一四二「田弘正傳」、「弘正樂聞前代忠孝立功之事、于府舍起書樓、聚書萬餘卷、視事之隙、與賓佐講論古今言行可否。」

⑤⑫ 『絳雲樓書目』(叢書集成初編本)卷二には吳曾『能改齋漫錄』が著録されている。

⑤⑬ 『錢注杜詩』、杜甫著、錢謙益箋注、中華書局、一九五八。

⑤⑭ 『杜詩詳注』、杜甫著、清仇兆鰲注、中華書局、一九七九。

⑤⑮ 原文は「盍」に作るが、誤字である。中華書局標點本(一九七九)が『新唐書』によって改めるのに従う。

⑤⑯ 『唐詩紀事』卷一一「沈佺期」條には、「此詩范攄以爲佺期之作、而顧陶以爲張循、今記於此」とある。范攄『雲溪友議』卷上「巫詠難」には「巫山高」を沈佺期の作としているが、『唐詩類選』及び『文苑英華』卷二〇一は張循(之)の作としている。『全唐詩稿本』「張循之卷」は『詩紀』によって収録し、「一作沈佺期詩」と注する。『全唐詩』卷九九「張循之卷」は『全唐詩稿本』に従う。

⑤⑰ 『艇齋詩話』には、「山谷用「酒渴愛江清」爲韻、人知爲唐人詩、而不知其爲誰氏也、顧陶『詩選』載暢當作、當有詩名、其詩云「軍中醉飲作」とある。『歷代詩話續編』該當條「續校」には、「酒渴愛江清」四句、見杜集「軍中醉歌寄沈八劉叟」、黃伯思編爲少陵詩、『英華』載暢當作、本於顧陶」と述べている。『全唐詩』卷二八七「暢當卷」には「軍中醉歌寄沈八劉叟」を収録しており、「一作杜甫詩」と注する。

⑤⑱ 陳尙君氏は、『類選』に王建の作品があると考證するが、恐らく、『艇齋詩話』の誤讀である。『艇齋詩話』によれば、王建「溫泉詩」を収録しているのは『金華瀛湘集』である。

⑤⑲ 杜詩の場合は、『杜詩詳注』によって配列する。ただ、「風涼原上作」一首は『杜詩詳注』に収録されていない。

⑥⑩ 諸書誌によれば、顧陶が別集本『杜詩』を編纂したという記載はない。吳曾が言及している「顧陶所編『杜詩』」は、『類選』に収録される杜詩であろう。

⑥1 原文では「唐人新編當時人詩冊」が具體的に何の詩集を指すとは言っていない。下孝萱氏はこれを『唐詩類選』と見做すのに對し、陳尙君氏はこれは敦煌殘本唐人選唐詩に類似する本であり、書名を見出すことができないと論じている。

⑥2 陳尙君氏は、「風涼原上作」を偽作と判断する。

第四章 『文苑英華』に於ける『白氏文集』諸本の利用状況

『文苑英華』は『文選』の後を繼ぐべく、北宋初年に編纂された千巻の規模を有する一大總集である。本書は宋代において四回にわたって校勘された。前二回は北宋で行われたものの、後にすべて焼失した。南宋の孝宗時代になって三回目が行われたが、嚴密ではなかったので批判された。四回目は周必大の監修のもとに彭叔夏・胡柯によって行われ、その校勘の成果としては、本文行間の校記及び彭叔夏『文苑英華辨證』（以下、『辨證』と略稱）が傳えられ、現存する『文苑英華』の基盤になった。^①

『文苑英華』は北宋初年の編纂であるので、當時まだ散佚していない唐集寫本を利用することが可能であった。『文苑英華』校記及び『辨證』は南宋の編纂であるが、當時まだ存在していた刊本や寫本を用いており、様々な異文をここに見ることができ、『文苑英華』及び校記に基づいて唐集の校勘作業を行えば、有益な成果が得られると豫想できる。

『文苑英華』に於ける『白氏文集』諸本の利用状況としては、すでに花房英樹氏や和田浩平氏・謝思煒氏・神鷹徳治氏などの論著がある。^②これらの研究によれば、『文苑英華』が利用した『白氏文集』は舊抄本系統に近いので、その本文が貴重な価値をもっていることがはっきりとしている。ところが、今までの研究は主に『長恨歌』など、特定の作品を中心になされ、全般的な研究には及んでいない状況である。そこで小論は、『文苑英華』所収の白氏詩文をすべて檢證する上、その所據本の利用状況について考察を加えてゆきたい。

一、『文苑英華』が依據した『白氏文集』の本文状況

周必大「纂修文苑英華事始」（以下、「文苑英華序」と略稱）^③には、

是時印本絶少、雖韓・柳・元・白之文、尙未甚傳。其他如陳子昂・張說・九齡・李翱等諸名士文集、世尤罕見。脩書官於宗元・居易・權德輿・李商隱・顧雲・羅隱輩、或全卷收入。

（是の時印本絶だ少く、韓・柳・元・白の文と雖も、尙未だ甚だしくは傳わらず。其の他、陳子昂・張說・九齡・李翱等の如き諸名士の文集、世に尤も罕見なり。脩書官は、宗元・居易・權德輿・李商隱・顧雲・羅隱の輩に於いては、或いは全卷を收入す。）

とある。これによれば、『文苑英華』が編纂された北宋初年、韓愈や柳宗元・元稹・白居易などの別集の印本は未だ廣く流布しておらず、恐らく脩書官が作品を流布させるためであろう、柳宗元・白居易などの文集を「全卷收入」にした。また、同じ文章には孝宗治下における『文苑英華』の校訂について批判して、次のように周必大はいう。

往往妄加塗註、繕寫裝、付之祕閣、後世將遂爲定本。臣過計有三不可。國初文集（集作籍）雖寫本、然讎校頗精。後來淺學改易、浸失本指。今乃盡以印本易舊書、是非相亂。

(往往にして妄りに塗註を加え、繕寫して裝し、之を祕閣に付し、後世將に遂に定本と爲す。臣過計するに、三つの不可有り。國初の文集(集は籍に作る)は寫本と雖も、然れども讎校頗る精なり。後來の淺學改易し、浸く本指を失う。今乃ち盡く印本を以て舊書に易え、是非相亂る。)

孝宗が『文苑英華』三回目の校勘作業を行わしめたが、『文苑英華』の原書は北宋初年の寫本を利用し、その本文がとても信賴できるのに、三回目の校勘には印本を用いて原書を改變したのは、よろしくないと周必大が指摘した。

以上によれば、『文苑英華』が底本とした『白氏文集』は、北宋初年にまだ存在していた寫本と見做してよい。従って本節では、『文苑英華』所收の白氏詩文を調査し、その底本狀況を探索してみる。

1、『文苑英華』が依據した『白氏文集』の収録狀況

周知の如く、『白氏文集』は元和十年(八一五)の十五卷本自編詩集から長慶四年(八二四)の五十卷本『白氏長慶集』・會昌二年(八四二)の七十卷本『白氏文集』前後集・會昌五年(八四五)の七十五卷本『白氏文集』前後續集まで、段階的に編纂されたものである。七十五卷本『白氏文集』は唐末にすでに散佚したとされているが、この編成を最もよく留めているのは日本の江戸初期に那波道圓が活字出版した「那波本」である。ただし、那波本の續集の部分は、殘缺本として存在している。

花房英樹氏は『文苑英華』所収の白氏詩文を調査し、「英華がこの詩を採上げたのは、七十巻本からではなく、七十巻を越える内容をもつ本からである」と述べている。^④『白氏文集』の階段的な編纂状況を考えると、所謂「七十巻を越える内容をもつ本」は、會昌五年（八四五）に成立した七十五巻本前後續集の殘缺本、即ち那波本と類似する一本であろう。謝思煒氏は花房英樹氏の結論を贊成した上で、『文苑英華』が依據した『白氏文集』には二本あり、當時通行した七十巻本の他に、續集の殘缺本ないし拾遺外集を有する本もあったと補正している。^⑤

『文苑英華』所収の白氏詩文と那波本の前七十巻と對照して見れば、その「七十巻を越える内容」は表一の四種類に分かれている。

表一 『文苑英華』収録の「七十巻を越える内容」

1、誤收作品

花房番号	篇目	『文苑英華』巻次	他本収録
三六八五	南陽小將張彦碶口鎮稅人場射虎歌 ^⑥	三四四	無
三六八八	過故洛城 ^⑦	三〇九	無
三八〇四	授前司勳員外郎賜緋徐縮兵部員外郎前庫部員外郎李光嗣右司員外郎等制 ^⑧	三九二	無

三六八七	喜雨	一五三	無	『文苑英華』卷次	他本収録
三六八七	喜雨	一五三	無	『文苑英華』卷次	他本収録
三七九九	荷珠賦	一四九	無		
三八〇〇	洛川晴望賦	一二八	無		
三八〇一	叔孫通定朝儀賦	〇五三	無		

2、『白氏文集』の所屬不明作品

闕番	授李渤給事中鄭涵中書舍人等制	三八二	無		
闕番	授賈餗等中書舍人制 ^⑩	三八二	無		
闕番	惜花 ^⑪	三二三	季校本		
闕番	宿張雲舉院 ^⑫	二二七	季校本		
闕番	宿池上	一六五	季校本		
闕番	南池	一六五	季校本		
闕番	曲江 ^⑬	一六四	季校本		
三七一七	新池 ^⑭	一六五	季校本		
三八一二	北斗龜判一道	五四八	無		
三八一一	居蔡判一道 ^⑮	五四八	無		
三八一〇	論請不用奸臣表其二 ^⑯	六二五	無		
三八〇九	元和南省請上尊號表・第三表・第四表 ^⑰	五五四	無		
三八〇七					

3、『白氏文集』の前後集七十卷に属する作品

花房番号	篇目	『文苑英華』巻次	他本収録	『白氏文集』所属
一五二五	辛丘度可工部員外郎李石可左補 闕李仍叔可右補闕三人同制 ^⑩	三八三	紹興本〇七	前後集卷三一
一五二九	李實授咸陽令制	四〇七	紹興本〇七	前後集卷三一
一五三〇	劉縱授祕書郎制	四〇〇	紹興本〇七	前後集卷三一
三六八四	勸酒 ^⑮	三三六	無	前後集卷五一
三六八六	陰雨 ^⑭	一五三	無	前後集卷一八
三八〇二	授王建祕書郎制	四〇〇	金澤本三一	前後集卷三一
三八〇三 (一七七五)	授庾敬休監察御史制 ^⑳	三九五	那波本三七 紹興本〇八	前後集卷三七
三八〇五	盧元輔吏部郎中制	三八九	金澤本三三	前後集卷三三
三八〇六	第十二妹等四人各封長公主制	四四六	金澤本三一	前後集卷三一

4、『白氏文集』の續集・補遺に属する作品

花房番号	篇目	『文苑英華』巻次	他本収録	『白氏文集』所属
三六五九	寄荆南淮南二相公 ^㉑	二五八	那波本七一 紹興本三七	續集
三七九八	自撰墓誌 (醉吟先生墓誌銘竝序) ^㉒	九四五	管見抄一〇	補遺外集
三八一三	太湖石記 ^㉓	八二九	唐文粹七一	續集

そのうち、他人の作品を白居易の作品として誤收するのは、表一―一の「南陽小將張彥破口鎮稅人場射虎歌」「過故洛城」などの十七首である。それらの作品は『文苑英華』や『文苑英華』によって補正する季振宜校本（以下、「季校本」と略稱）²⁴以外の本に収録されておらず、且つ他人の作品と判明できる根拠も相當存在しているので、白居易の作品ではないことが明らかである。それらの誤收は、今最も利用されている明刊本『文苑英華』の杜撰さによるところが多い。この本には誤字や脱字が至る所に見られ、作者名の誤收も少なくない。「惜花」（闕番）を一例として挙げてみる。

「惜花」は『文苑英華』卷三二三白居易「惜落花贈崔二十四」の後に収録されており、作者が記載されておらず、靜嘉堂本には「前人」としている。汪立名『白香山詩集』の補遺部分には、季校本によって白居易の作品として補入したが、内閣本には方干の作品としている。さらに、方干『玄英集』（『文淵閣四庫全書』本）卷八や『萬首唐人絶句詩』卷五九「方干」條・『唐音統籤』卷六〇八「方干卷」にも「惜花」を収録しており、作者を方干と見做したほうがよいと思われる。

それに、一部の作品は七十卷本『白氏文集』に収録されている筈だが、流傳中に散佚し、那波本の七十卷本には現存していない。表一―三の「勸酒」（三六八四）を一例として挙げてみる。「勸酒」（二二三九・三六八四）は二首同題の作品であるが、『文苑英華』は連作の形を留めているのに對し、那波本は一首だけを収録している。那波本の卷五一巻首には「凡五十七首」と記載しているが、現存するのはただ五十六首であり、散佚した「勸酒」（三六八四）を加えれば本來の數に應じる。²⁵

なお、表一―四によれば、『文苑英華』所收の白氏詩文の中に、「七十卷を越える」作品と確定できるのは三篇である。そのうち、「自撰墓誌」(三七九八)・「太湖石記」(三八一三)二篇は那波本や紹興本の續集・拾遺外集に収録されていない。つまり、『文苑英華』が利用した『白氏文集』は、確かに花房英樹氏が述べた「七十卷を越える内容」を有する本であるが、その本に保存されていた續集の部分は、花房氏が推測するような「那波本卷七十一や紹興本卷三十七の程度」²⁸であることは首肯しがたいと思われる。要するに、『文苑英華』が利用した『白氏文集』は北宋初年の寫本であるので、その前後集の部分や續集・拾遺外集の部分は、刊本系の那波本・紹興本よりよく原本の内容を保存していたと考えられる。

2、『文苑英華』所據本の來源及び『白氏文集』北宋諸本との關係

『文苑英華』及び校記には、原書に利用された『白氏文集』寫本の來源については一切言及していないが、『文苑英華』の編纂過程を考えると、その所據本は北宋館閣の所藏である可能性が高いと思われる。陳舜俞『廬山記』(内閣文庫本)卷一には、『白氏文集』の所藏について次のように述べている。

(東林寺) 今所藏、實景德四年詔史館書校而賜者。

(東林寺) 今藏する所は、實に景德四年、史館に詔し、書校して賜るものなり。

また、陸游『渭南文集』(『四部叢刊』本)卷四六「入蜀記」には、

白公嘗以文集留草堂、後屢亡逸。眞宗皇帝嘗令崇文院寫校、包以斑竹帙、送寺。

白公嘗て文集を以て草堂に留むるも、後屢々亡逸す。眞宗皇帝嘗て崇文院に令して寫校せしめ、包むに斑竹の帙を以てし、寺に送る。

とある。「景德」は眞宗の年號であり、「史館」は崇文院の所屬部門である。^⑦ 兩書の記載によれば、景德四年（一〇〇七）、崇文院所屬の史館が眞宗の命を受け、『白氏文集』を寫校して東林寺に奉納したことが分かる。^⑧

崇文院の所藏の『白氏文集』（以下、「崇文院本」と略稱）が奉納本の底本として使われたことから見れば、該本は質のよいものであったことが窺える。従つて、『文苑英華』が依據した『白氏文集』は崇文院本である可能性が高いと考えられる。しかし、問題なのは、『文苑英華』が利用した『白氏文集』には七十卷以外の續集や外集もあつたので、現存する崇文院本に關する資料と合わないことである。『崇文總目輯釋』（『續修四庫全書』本）卷五には、

白氏文集、七十卷。

と見える。『崇文總目』は崇文院の藏書目錄であるが、『文苑英華』が利用した『白氏文集』を記載していないということになる。また、宋敏求『春明退朝錄』（中華書局、一九八〇）卷下には、

唐白文公自勒文集、成五十卷、後集二十卷、皆寫本。（中略）其後履道宅爲普明僧院、後唐明宗子秦王從容、又寫置院之經藏、今本是也。後人亦補東林所藏、皆篇目次第非眞、與今吳・蜀摹版無異。

唐の白文公自ら文集を勅め、五十卷、後集二十卷と成し、皆寫本なり。(中略)其の後、履道の宅、普明僧院と爲り、後唐明宗の子の秦王從容、又た、寫して院の經藏に置き、今本是れなり。後人亦た東林の所藏を補い、皆篇目次第眞に非ず、今の吳・蜀の摹版と異なる無し。

と見え、當時の藏書家として名高い宋敏求も七十卷本しか言及しなかつた事實によれば、當時の『白氏文集』はすべて七十卷本であると岑仲勉氏が推測している。²⁹⁾

ところで、花房英樹氏がこれに反対し、「宋敏求は文集について「五十卷」と「二十卷」とを記すのみで、卷七一に關して何ら言及せず、その故に所見本は恰も七十卷のように見えるが、那波本が總目に、卷七一を標しないと同様に、當時の本にも卷目が書せられていず、形式的には七十卷の外にある付録一卷となつていた爲である」と述べている。³⁰⁾さらに、戸崎哲彦氏は宋敏求が述べた「皆篇目次第非眞」の批判は、七十卷本以外の部分についていうものだと補正する。³¹⁾兩氏の解釋が正しいとすれば、『文苑英華』所據の『白氏文集』と宋初の『白氏文集』に關する資料とは矛盾しないことが分かる。換言すれば、北宋初年の『白氏文集』の流傳狀況といえ、大體七十卷本の編成をもっており、そのうち、七十卷本以外の部分を含む本もあるが、目錄にはただ卷七〇までを記載していた。『文苑英華』が利用した崇文院本は、その一本であると考えられる。³²⁾

宋敏求が當時の『白氏文集』の七十卷本以外の部分の編次について「非眞」と批判したことから見れば、北宋初年に流傳していた『白氏文集』の續集や拾遺外集の兩部分は、それぞれ異なつていたことが窺える。ゆえに、『文苑英華』所收の七十卷本以外、即ち前述の「七十卷を越える」部分は、該本の特別な價值を示してい

ると思われる。那波本に収録されていない「太湖石記」を例として挙げ、このことを明らかにしてみたい。

『文苑英華』以外、「太湖石記」を保存しているのは『唐文粹』のみである。『唐文粹』の編纂及び『文苑英華』との関係について、まだ検討する余地があるが、姚鉉が淳化五年（九九四）直史館に務めていた際に、『文苑英華』の初稿がすでに成立したことを考えると、彼が後に『文苑英華』を参考して『唐文粹』を編纂した可能性が高いと思われる。³⁵従って、『唐文粹』所収の「太湖石記」の來源には崇文院本があったと言えるのだろう。³⁶

崇文院本以外、北宋に於いて「太湖石記」を保存していた『白氏文集』は極めて少なかったため、南宋に成立した『文苑英華』の「太湖石記」の校記には「集無」と記載しており、當時通行していた『白氏文集』諸本には、その文章がすでに散佚していたことが分かる。だからこそ、校勘を行った際には『唐文粹』しか利用できなかったことになる。「太湖石記」一篇が『文苑英華』や『唐文粹』によって後世に伝えられた事實は、崇文院本『白氏文集』の特別な價值を物語っている。

「太湖石記」に對し、「自撰墓誌」は『文苑英華』に収録されている以外、五代の寫本や景祐四年（一〇三七）杭州刊本（以下、「景祐本」と略稱）にも存在していた。孫光憲『北夢瑣言』（中華書局、二〇〇二）卷六「白太傅墓銘」には、

白太傅與元相國友善、以詩道著名、時號元白。（中略）洎「自撰墓誌」云、與彭城劉夢得爲詩友。

（白太傅は元相國と友善し、詩道を以て著名し、時に元白と號す。（中略）「自撰墓誌」に洎びて云く、彭城の劉夢得と詩友と爲す。）

とある。陳振孫『白氏文公年譜』（『隋唐五代名人年譜』本、北京圖書館出版社、二〇〇五）「開成三年」には「此非「墓誌」語、乃「醉吟傳」中語」（此「墓誌」の語に非ず、乃ち「醉吟傳」の中の語なり）と指摘するが、五代の孫光憲が用いた『白氏文集』には「自撰墓誌」一篇を有していたと戸崎哲彦氏が論ずる。³⁷

それに、北宋に刊行した景祐本は現存していないが、『管見抄』の末尾には景祐本より「自撰墓誌」など九篇の作品を傳寫している。³⁸「自撰墓誌」の眞偽問題はさておき、五代から北宋にかけて「自撰墓誌」を収録していた『白氏文集』は、少なくとも孫光憲所見本・景祐本・崇文院本の三本があり、前述の「太湖石記」より廣く保存されていることが窺える。また、『文苑英華』校記より數十年後に成立した陳振孫『直齋書錄解題』（上海古籍出版社、一九八七）卷一六「白氏長慶集」には、

「墓誌」乃云、「集前後七十卷。」當時預爲誌、時未有『續後集』。

（「墓誌」に乃ち云く、「集前後七十卷なり。」當時預め誌を爲り、時に未だ『續後集』を有せず。）

と見える。「集前後七十卷」一文は、現存する「自撰墓誌」の「前後著文集七十卷」に相當する。これによれば、陳振孫が見た『白氏文集』にも「自撰墓誌」一篇を収録していた一本があったことを確認できる。だからこそ、南宋中期に成立した『文苑英華』「自撰墓誌」の校記には、「集作」や「一作」が見られ、當時通行していた『白氏文集』にはその文章を収録していた本が少なからずあったことが分かる。

要するに、『文苑英華』所據本の續外集の部分は、「太湖石記」のような特別な篇目を収録している一方で、「自撰墓誌」のような、五代・北宋當時の各本に共通する篇目も存在している。前者は數少ないが、『文苑英華』

所據本の重要な価値を示している。

所收作品以外、『文苑英華』所收の白氏詩文の本文は當時の北宋刊本と異なっている箇所がよく見られ、寫本である崇文院本の価値を反映している。北宋刊本『白氏文集』は現存していないが、景祐本より九篇の作品を書寫した『管見抄』及び中國國家圖書館所藏の「北宋刊本の本文及び缺筆をかなり忠實に翻刻した版本」³⁹⁾である殘宋本（以下、「殘宋本」と略稱）は、その面貌をある程度傳えている。

表二によれば、『文苑英華』と景祐本との雙方に収録されている作品は「自撰墓誌」一篇である。『管見抄』本の本文は寫本系の『文苑英華』所據本より、刊本系の馬本に近いと言えよう。

表二 『文苑英華』所據本と『管見抄』本との對校

花房番号	『文苑英華』卷次	篇目	『文苑英華』	
三七九八	九四五	自撰墓誌	自撰墓誌	管見抄
		秦將武安君起	秦武々安君起	醉吟先生墓誌銘 竝序
		季庾（傅氏『校記』影宋鈔本：季庾）	○庾	○庾
		先太夫人	○大○○	○大父○○
		舉進士	○○○	累○○○
		三千七百三十首	○○○○○○○○	○○○○二○○
		所遇	○逼	○逼
				馬本

『文苑英華』と殘宋本との雙方に収録されている作品も相當ある。資料不足のため、詳しく對校することができないが、謝思煒氏『白居易詩集校註』『白居易文集校註』によれば、『文苑英華』所據本と殘宋本の本文はあまり一致しないことが窺える。『白氏文集』の本文と言え、刊本系・寫本系の二系統があると一般的に知られているが、北宋初年に於ける刊本系・寫本系の本文はすでに別々に分かれていたことは、ここに初めて判明されている。中國側現存する唯一の寫本系の『文苑英華』は、『白氏文集』の考察において如何に價值を有するかが想像できるであろう。

3、『文苑英華』本の本文状況及び慧萼本との關係

『文苑英華』本の本文状況について、同じ寫本系の金澤文庫本『白氏文集』（以下、「金澤本」と略稱）と近い關係を有することが早くから論じられている。花房英樹氏は『文苑英華』の「長恨歌」を例として、『文苑英華』本は「金澤文庫本と相似る」と説いている。^④金澤本のみならず、『管見記』や『祕府略』紙背に保存されている白氏詩篇も、「唐鈔本の文字を留めると言われる總集『文苑英華』と一致するのである」と神鷹徳治氏が論じている。^⑤

一方で、和田浩平氏は同じく「長恨歌」を例として考察したが、『文苑英華』所據本は「明確に宋本以下の刊本と對立しないことを意味」し、「舊抄本系統の本文と刊本系統の本文との形成過程の中に位置すると言え

るかと思われる」と述べ、さらに、「このような宋本との一致は」、「兩本の據った本文資料が時代的に隔たりが無いために、同時代的な共通の改編を蒙った結果が近いものであった」と論じている。⁴²⁾

謝思煒氏が指摘するように、『文苑英華』原書及び校記には複雑な状況があるので、さらに全般的に整理する必要がある。⁴³⁾ また、前掲した先行研究は何れも単篇詩文を中心に考察したものであり、『文苑英華』本の總體に安易に類推することができない。さらに、金澤本自體は複雑に構成されており、宋刊本の重鈔本である部分も相當存在しているので、分別せずに利用することも穩當でないと考えられる。そこで、小論は『文苑英華』所収の白氏詩文をすべて調査し、金澤本中の慧萼本と對校することを行ってみる。

「慧萼本」は金澤本の一部として存在しており、今卷一二・四九・五二・五九の四巻を確認できる。⁴⁴⁾ 慧萼本は白居易の存命中の開成四年（八三九）の六十七卷本『白氏文集』から重抄されたものであるので、唐代の寫本の状況を最も傳えている。『文苑英華』と慧萼本との互見作品は、「長恨歌」を含めて表三に示すとおりの四十八首である。そのうち、諸本に異文があるのは三百三箇所であり、⁴⁵⁾ 『文苑英華』と慧萼本の異文が一致するのは百二箇所であり、⁴⁶⁾ 『文苑英華』が利用した『白氏文集』は、確かに和田浩平氏が述べたように、舊抄本と刊本の中に位置するものであるといえる。ただ、「このような宋本との一致は」、「兩本の據った本文資料が時代的に隔たりが無いために、同時代的な共通の改編を蒙った結果が近いものであった」という和田氏の論點は、さらに補足する必要があると思われる。

前述のように、北宋初年に於ける刊本系の代表である景祐本・殘宋本と寫本系の代表である『文苑英華』の本文は、すでに別々に分かれていたことが判明している。それらの刊本や寫本は、「同時代的な共通の改編を蒙っ

た」と見做すことはやや難しいと考えられる。『文苑英華』と慧萼本との相違が数多く存在していることを考えると、『文苑英華』と宋本とは一致し、慧萼本とは異なる部分は、恐らくは『白氏文集』が六十七卷本から七十五卷本の定稿まで編纂されて行く過程で、白居易が自ら行った加筆や修訂の結果によって生じたものであろう。その定稿は後の寫本系・刊本系の二系統の淵源になり、各系統の流傳中に再び改變された。換言すれば、『文苑英華』と刊本との一致は「同時代的な共通の改編を蒙った」のではなく、『白氏文集』の定稿の本文を継いだからであると考えられる。

表三 『文苑英華』本と慧萼本との對校

花房番号	篇目	『文苑英華』	慧萼本	紹興本	那波本
〇五七八	短歌行	相隳頽 明旦	〇隨 〇〇	〇〇〇 〇夕	〇〇〇 〇夕
〇五七九	生離別	食磔 嘶風 甘如蜜 黃河水 野曠 從中來 憂積	題：〇〇〇〇 連嘶 〇〇 〇於〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇	題：〇離別 連嘶 〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇	題：〇離別 〇磔 連嘶 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇

將來者	話及	十二月	日日	亦不	凭肩	時夜殆半	避暑於	言曰	不爲他人聞者	爲我謝	折其半	指碧衣	十四載	披紫綃	延入	日曉	所從	雙鬢童女	天海	不見
將來	語及	十二月日	日	○○	憑○	○○○○	避暑	○○	不聞于他人○	○○○	析○○	指碧衣女	○○○	被○○	○○	○暮	前○	○○○○	絕天海	又不見
將來	○○	○○○	○○	○○	○○	夜殆半	避暑	言之曰	○○○○○○	爲謝	○○	○○○	○○年	○○○	○○	○晚	○○	雙童女	○○	○○
將來	○○	○○○	○○	不亦	○○	夜殆半	避暑	言之曰	○○○○○○	爲謝	○○	○○○	○○年	○○○	迎○	○晚	○○	雙童女	○○	○○

知奈何	聽不足	姊妹兄弟 (靜嘉堂本：姊妹兄弟)	後宮	容暇	侍寢 (靜嘉堂本：侍宴)	暖春宵 (靜嘉堂本：度春宵)	芙蓉帳裏 (靜嘉堂本：芙蓉帳暖)	花冠	迴頭 (靜嘉堂本：迴眸) (傅氏『校記』舊抄本：迴眸)	深閨	漢王 (靜嘉堂本：漢皇) (傅氏『校記』舊抄本：漢皇)	詩題：長恨歌
無○○	看○○	姊○弟兄	漢○	閑○	○ ○	度○○	○ ○ ○ 暖	○顏	○眸	○窓	○皇	詩題：長恨歌
無○○	看○○	姊○弟兄	○ ○	閑○	○宴	度○○	○ ○ ○ 暖	○顏	○眸	○ ○	○皇	
無○○	看○○	姊○弟兄	○ ○	閑○	○宴	度○○	○ ○ ○ 暖	○顏	○眸	○ ○	○皇	

鐘漏	成眠	秋燈 (靜嘉堂本：孤燈)	落葉	南内(靜嘉堂本：南苑)	花開日	芙蓉如面柳如眉 對此如何不淚垂	塵土	地轉 (靜嘉堂本：日轉) (傳氏『校記』舊抄本：日轉)	聞鈴	少行人 (靜嘉堂本：少人行)	山上 (靜嘉堂本：山下)	縈廻	血淚	掩面
○○	能○	○○	○(宮)○	○○	○○○	對此如何不淚垂 芙蓉如面柳如眉	泥○	日○	○猿	○○○	○下(上)	○○	淚血	○眼
○鼓	○○	孤○	宮○	○苑	○○夜	○○○○○○○○	泥○	日○	○○	○人行	○下	○紆	○○	○○
○鼓	○○	孤○	宮○	○苑	○○夜	○○○○○○○○	泥○	日○	○○	○人行	○下	○紆	○○	○○

一股	空持 (靜嘉堂本：宮持)	下問	恩愛絶	飄飄	半偏	雲髻	迺迺	銀鉤	夢中	帳下	兩廂 (靜嘉堂本：兩廊)	名玉妃	其間	樓殿	展轉思 (靜嘉堂本：展轉思)	臨邛方士	舊枕故衾
○鈷	○ ○	○視(問)	○ ○ ○歇	○ ○ ○飖	○ ○	○ ○ ○鬢	○ ○ ○迺迺	○ ○ ○屏	○ ○ ○魂	○ ○ ○裏	○ ○ ○西	○ ○ ○上	○ ○ ○閣	○ ○ ○思	○ ○ ○道	○ ○ ○道	○ ○ ○道
○ ○	唯將	○望	○ ○ ○	○ ○ ○飖	○ ○	○ ○ ○鬢	○ ○ ○迺迺	○ ○ ○屏	○ ○ ○魂	○ ○ ○裏	○ ○ ○西	○ ○ ○中	○ ○ ○閣	○ ○ ○思	○ ○ ○道	○ ○ ○道	○ ○ ○道
○ ○	唯將	○望	○ ○ ○	○ ○ ○飖	○ ○ ○垂	○ ○ ○鬢	○ ○ ○迺迺	○ ○ ○屏	○ ○ ○魂	○ ○ ○裏	○ ○ ○西	○ ○ ○中	○ ○ ○閣	○ ○ ○思	○ ○ ○道	○ ○ ○道	○ ○ ○道

〇六〇三				琵琶引				〇六〇二				〇五九九				〇五九八			
								琵琶引序				潛別離				長安道			
幽情	水下灘	切切	三五聲	猶把	命曰琵琶引	六百一十六言	惘然	(内閣本：本是長安倡女) (靜嘉堂本：本是長安倡女)	舟中	送客	元和十年	白有時	雖清濁有日	無	無盡期	(在天願爲 靜嘉堂本：在天願作)	但教		
〇愁	水〇難	竊竊	〇兩〇	〇抱	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇二〇	〇默	本是長安倡家女	〇〇	送客至	元和十五年	〇〇〇〇	〇濁清〇〇	無	〇絶〇	〇〇〇〇作	〇〇		
〇愁	〇〇難	〇〇	〇兩〇	〇〇	〇〇〇〇〇行	〇〇〇〇二〇	〇默	本長安倡女	舟船中	〇〇	〇〇〇〇	有白〇	〇濁有清〇	無	〇絶〇	〇〇〇〇作	〇令		
〇愁	水〇〇	〇〇	〇兩〇	〇抱	〇〇〇〇〇行	〇〇〇〇二〇	〇默	本長安倡女	舟船中	〇〇	〇〇〇〇	有白〇	〇濁有清〇	無	〇〇〇〇	〇〇〇〇作	〇令		

二一〇〇	聞軍師選將多用文儒	得軍師	無	聞〇〇	聞〇〇
二〇九七	得乙上封請永不用赦	上封 (内閣本・乙上封)	乙上封	〇〇	〇〇
二〇九六	得丁冒名事發	善政 題：冒名事發判	無	美〇	無
二〇九五	得乙與丁俱應拔萃	棄其葑菲 二人于有相非 (内閣本：二人□有相非)	〇以〇〇 二人互相非	〇以葑菲 互有相非	〇以〇〇 互有相非
		嘔啞	歐〇	歐〇	歐〇
		啼哭	〇〇	〇〇	〇血
		臥病	病臥	〇〇	〇〇
		離帝京	辭〇〇	辭〇〇	辭〇〇
		相逢	〇悲	〇〇	〇〇
		啼粧淚落	夢啼粧淚	夢啼妝淚	夢啼粧淚
		輕離別	〇〇〇	〇別離	〇別離
		家近	〇〇	〇在	〇在
		唯有	〇見	〇見	〇見
		東船	〇〇	〇舟	〇〇

二二〇八	得轉運使以汴河水淺							得乙有同門生喪親							得甲獻弓蹲甲							得乙隱居徵辟不起							文儒之士
題：請塞斗門判	尙猶	遇忘	以何爲	有違	求益	盍恤	題：同門生喪親判	且恐	無撓	一札	題：射不穿札判	有陰	宜是	寧闕	(內閣本：不顧) (傳氏『校記』舊抄本：不顧)			下顧	若驚	題：徵辟不起判	文儒之士								
無	○宜	遇喪	而○○○	○遺	友○	○	無	○	○	○	無	不○	且○	○聞	莫○			可○	無	文儒士									
無	○宜	遇喪	○○○	不遵	○○	蓋○	無	宜○	不○	○扎	無	有○	且○	○闕	莫○			可○	無	文儒士									
無	○宜	遇喪	○○○	不遵	○○	蓋○	無	宜○	不○	○扎	無	有○	且○	○闕	莫○			可○	無	文儒士									

二二二九	得乙爲軍帥昧夜進軍				趨集	登彼	略辭	題：邊將無勇判	陰隲	題：死生符天判	請無	有據	之餘	員來	題：遇毒判	猶必變色	斯黷	絲竹	是奪	存敬
	招虞	戎帥 (内閣本：戎師)	爲軍帥	題：夜進軍判	走集	○以	其略辭	無	○陽	無	諒○	○	○疑	○	無	○聞必變	○續	○管	○	有○
	○	○師	○	無	走集	○以	○	無	○	無	○	○處	○疑	爰○	無	○聞必變	○瀆	○	○棄	○
	有○	○	爲軍	無	走集	○以	○	無	○	無	○	○處	○疑	○	無	○聞必變	○瀆	○	○棄	○
	有○	○政	爲軍	無	走集	○以	○	無	○	無	○	○處	○疑	○	無	○聞必變	○瀆	○	○棄	○

二九一五	華嚴經社石記	十萬人中	治命	大院	心爲道場者	經根論披閱	本院先師	而門人	囑累	不封不樹	祔其先師	龍門山之南岡	七十有五	華嚴院	歸老	其女	賢名	散活	相門之女邦君之妻	諱畚	志遠	深深
二九一四	如信大師功德幢記	十萬人	理○	本○	心爲道場	經根論枝	本院二先師	門人	○	○樹○封	○祔某某二先師	○龍門西南岡	○七十五	○嚴持○	○我	此○	○賢	○活	相門女邦君妻	○畚	至○	漾漾
二九一三	海州刺史裴君夫人	十萬人	理○	本○	心爲道場	經根論枝	○	門人	○果	○	○	○	○	花○	○我	此○	名賢	○霑	相門女邦君妻	畚	至○	漾漾

													二九三二						
													修香山寺記						
(傅氏『校記』影宋抄本：他劫)	化劫	薦冥福	歡且贊	之爲者	豁然	關塞	圻	小大	連樓廊六間	幹將士	乃回施	往返者	輿馬	相國元公	山林	太子賓客	佛寺	軍事散將某乙	報效 (内閣本：報政)
他○	資○○○	歎○○○	○○○	豁然	闕○	○	○○	○○○○○	○○仁	迴施	○○○	○○○	○○	○○○○○	○水	庶○○○	○僧	陳仲華某乙	○政
他○	○○○	○○○	之爲	○○	○○	朽	大小	連廊六間	○○○	迴施	往返	與○	元相國	○水	庶○○○	○僧	○○○○○	○政	
他○	○○○	○○○	○○○	○○	○○	朽	大小	連樓一所連廊六間	○○○	迴施	往返	○○	元相國	○水	庶○○○	○僧	○○○○○	○政	

		茲土	西方	○○	○○
二九二三	薦李晏韋楚狀其一	申論 除削官階 雖在法則 則爲獨屈 連反 (內閣本：連及)	○○ ○贊削○ 在法 即○○○	○奏 ○替削○ 在法 即○○○	○○ ○奏 ○替削○ 在法 即○○○
二九二四	薦李晏韋楚狀其二	家承 理合 以前件謹具 無	○傳 ○○ ○所○勵 ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○	○傳 合具 以前件 大和六年六月廿六日 日河南尹臣白居易狀	○傳 合具 以前件 大和六年六月二十六 日河南尹臣白居易狀
二九二五	與劉蘇州書	僕與閣下 數百篇 集賢學士 滿篋 (內閣本：漏篋)	○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○	與閣下 ○○○首 ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○	○○○○ ○○○首 ○○○○ ○○○○ ○○○○ ○○○○
	醜老	醜老	○○	老醜	老醜

『文苑英華』所收の白氏詩文の校記には、「京本」を引用する例がある。陸游『渭南文集』（『四部叢刊』本）卷二八「跋京本家語」には、

余舊收此書、得自京師中遭兵火之餘。

（余舊て此の書を收む、京師の中の兵火に遭うの餘より得たり。）

とあり、所謂「京本」は北宋の京師、即ち開封に流布していた本であることが分かる。また、『輿地紀勝』卷一八五「會經樓」條には、

雍子儀、元祐中家於將相坊。築會經樓、經・史・子・集、京本・蜀本・浙本各一本、總三萬卷。

（雍子儀、元祐中、將相坊に家す。會經樓を築き、經・史・子・集、京本・蜀本・浙本各々一本、總て三萬卷。）

とある。元祐年間の藏書家である雍子儀が京本・蜀本・浙本各一本を保存していたことによれば、京本は蜀本や浙本と並行しており、特別な價值を有していたことが窺える。

現存する宋代の書誌や筆記には、京本『白氏文集』に言及することが一切見出されない。また、『白氏文集』の北宋刊本と言えば、景祐本や「吳・蜀摹版」しかなかったと一般的にされているが、『文苑英華』校記によって初めて京本『白氏文集』の存在を明らかにする。⁴⁷表四が示すように、『文苑英華』所收の白氏詩文の校記に見える京本は十一箇所あり、⁴⁸そのうち、八箇所が那波本や紹興本と一致している。これによれば、京本『白氏文集』が刊本系の面貌を備えていたことを確認できる。

表四 『文苑英華』校記に見える「京本」

花房番号	『文苑英華』巻次	篇目	『文苑英華』	京本	那波本	紹興本	抄本系
二九二九	七一一	因繼集重序	予復以詩	〇〇〇近〇	〇〇〇近〇	〇〇〇近〇	無
一四九五	七五六	漢將李陵論	大夫	士〇〇	士〇〇	士〇〇	無
一四九三	七七四	中和節頌	拜首	〇手	〇手	〇手	無
			其至矣	〇〇〇夫	〇〇〇夫	〇〇〇夫	無
一四五三	九八八	祭李侍郎文	一言脗合	〇〇(月昏)〇	〇〇吻〇	〇〇〇〇	無
			送於畿	〇之〇	〇之〇	〇之〇	無
二九三一	九八八	祭中書韋相公文	大方廣佛華嚴經 十願品	〇〇〇〇〇〇〇〇 中〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇 中〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇 中〇〇〇〇	無
二九三三	九八八	祭李司徒文	罹禍變	〇〇亂	〇〇亂	〇〇亂	無
二九四五	九八九	祭崔相公文	公長夏司	〇分〇〇	〇分〇〇	〇〇〇〇	『管見抄』 〇〇〇〇
一四四五	九九五	祭北城門文	天厲之不時	天〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇	
一四五五	九九六	祈臯亭神文	是用選日	是用撰〇	是用撰〇	是用撰〇	

(2) 石本

下の表五が示すように、『文苑英華』所収の白氏詩文の校記には、「石本」を引用する例は「冷泉亭記」の五箇所のみである。ここに引用された石本は『白氏文集』の刊本や寫本ではなく、石刻資料の拓本であったと思

われる。「冷泉亭記」は白居易が長慶三年（八二二）、杭州刺史在任中の作品である。『咸淳臨安志』（靜嘉堂文庫藏宋本）卷二三「冷泉亭」條には、

在飛來峰下、唐刺史河南元稹建、刺史白居易記、刻石亭上。

（飛來峰の下に在り、唐の刺史、河南の元稹建て、刺史白居易記し、石を亭上に刻す。）

とあり、杭州近郊の飛來峰に「冷泉亭記」の石碑があつたことが分かる。また、周必大『玉堂雜記』（『百川學海』本）卷上には、

冷泉亭、臨安絕景、去城既遠、難于頻幸。

（冷泉亭、臨安の絶景なり、城に去ること既に遠し、頻りに幸すること難し。）

と冷泉亭に言及した例が見えるので、彼が『文苑英華』校記を監修した際に、石刻資料を利用したことが可能であつたと考えられる。

表五 『文苑英華』校記に見える「石本」

花房番号	『文苑英華』巻次	篇目	『文苑英華』	石本	那波本	紹興本
一四八二	八二五	冷泉亭記	坐而玩之者 臥而狎之者	坐而玩者 臥而狎者	○○○○○	○○○○○

表六によれば、蜀本の本文が誤ると判明するのは、「×」を付ける三箇所である。『文苑英華』校記に見える蜀本の例はただ五箇所しかないのであるが、その範囲で評価するならば、信憑性が高くないと窺える。南宋時代の陳振孫の『直齋書錄解題』には、唐人別集を「複数の集本から取捨選擇して著録して」いるが、「蜀本を重視して」おらず、「『白氏長慶集』について蜀本を著録していないのもこのような蜀本輕視の故であろう」と戸崎哲彦氏が述べる。⁵⁰ 陳振孫の蜀本輕視の態度及び『文苑英華』校記に見える蜀本の本文状況は、該本の信賴できないことを反映している。

表六 『文苑英華』校記に見える「蜀本」

花房番号	『文苑英華』巻次	篇目	『文苑英華』	蜀本	那波本	紹興本
二九一四	八二二	如信大師功德幢記	圓昭	○照	○○	○○
一四六七	九六九	河南元府君夫人榮陽鄭氏墓誌銘	同州韓城尉	○○韋○○× ⁵¹	○○韋○○	○○韋○○
二九四五	九八九	祭崔相公文	沔寒	祈○× ⁵²	○○	○○
一四四八	九九二	祭小弟文	吾親奠酌	○○○酌	○○○○	○○○○
		祭崔相公文	談在人口播於人耳	○○○ ⁵³ ○○○在		

それに對し、川本は蜀本と同じ地域で刊行されたものであるが、蜀本の本文状況とやや異なっている。表七によれば、川本の本文は七箇所あるが、いずれも誤字とは言えない。さらに、那波本の本文は蜀本と相違する

右皇朝姚鉉寶臣編。(中略)累遷兩浙漕課使、課吏寫書。採唐世文章、分門編類。初爲五十卷、後復増廣之。(右は皇朝姚鉉寶臣編す。(中略)兩浙漕課使に累遷し、吏に課して寫書せしむ。唐世の文章を採り、分門して編類す。初め五十卷と爲し、後復た之を増廣す。)

とあり、姚鉉の仕歴を勘案すると、彼が『唐文粹』を編纂した際に、浙本を用いて校訂した可能性があると思われる。白氏詩文以外、『文苑英華』に於ける浙本に關する校記には、『唐文粹』と一致する例が五箇所ある。⁵⁷⁾下の表八によれば、『唐文粹』の「哀二良文」の異文が、南宋時代の浙本と一致するのは偶然のことではなく、姚鉉が北宋當時の浙本『白氏文集』を以て校訂したからであろう。

表八 『文苑英華』校記に見える「浙本」

花房番号	『文苑英華』卷次	篇目	『文苑英華』	浙本	那波本	紹興本	他本
一四四四	九九九	哀二良文	而人先亡	○正○○○	○○○○	○○○○	『唐文粹』 ○正○○○

2、参照本を明記しない校記

『文苑英華』に於ける参照本を明記しない校記は比較的に量が多く、概ね「集作」或いは「集本作」⁵⁸⁾又

作す」「一作す」の三種である。

(1)「集作す」「集本作す」

『文苑英華』校記には、「集作す」や「集本作す」の例が賦や制誥・古體詩・近體詩によく見られ、『白氏文集』の單行本を指すと考えられる。また、陳振孫『白氏文公年譜』「大曆七年」には、「杭・蘇集本皆作六年」(杭・蘇集本皆六年に作る)とあり、杭本・蘇本が集本の一種であることが分かる。それによれば、いわゆる「集本」は各地域で出版された『白氏文集』の單行本であり、前述の京本や蜀本・川本・浙本などはすべて「集本」に含まれるといえる。『文苑英華』卷九八九白居易「祭崔相公文」(二九四五)を一例として挙げてみる。

表九 「祭崔相公文」(『文苑英華』卷九八九)に於ける校記

本文	校記			那波本	紹興本
	集本	京本	蜀本		
識量操履	○度○○	無	無	○度○○	○度○○
巖廊輔弼	○〇匡輔	無	無	○廟匡輔	○廊匡輔
藩部政理	○〇〇治	無	無	○〇〇治	○〇〇治
播於人耳	無	無	○在○○	○〇〇〇	○〇〇〇
朝按接食	○〇同○	無	無	○案同○	○按同○
累分戎閫	○〇閫鎮	無	無	○〇閫鎮	○〇閫鎮

徐宣外部	○○遠○	無	無	無	○○遠○	○○遠○
潮来傳信	○○得○	無	無	無	○○○○○	○○○○○
大和之初	余○○○○○	無	無	無	余○○○○○	余○○○○○
公長夏司	無	○分○○	無	無	○分○○	○○○○○
玉徳彌堅	○○○温 (内閣本：○○松温)	無	無	無	○○○温	○○○温
壯心不凋	松○○○	無	無	無	松○○○	松○○○
慕巢師高	○○○皋	無	無	無	○○○皋	○○○皋
日蒙訊問	時○○○	無	無	無	時○問訊	時○問訊
時奉周旋	日○○○	無	無	無	日○○○	日○○○
閭巷相連	門○○○	無	無	無	門○○○	門○○○
難謔者天	○忱○○	無	無	無	○忱○○	○忱○○

表九によれば、集本の本文は現存する那波本や紹興本とよく一致していることが分かる。それゆえ、各集本の本文が同じで、『文苑英華』の本文と異なった場合に、各本を一括にして「集本」と稱すると推測される。ただ、「播於人耳」句や「公長夏司」句のように、「集本」をせず、集本の一つである京本や蜀本を單獨に取り上げて出校する場合がある。それは『文苑英華』の本文と大部分の集本の本文が同じで、某本の本文と異なった場合には、某本を明示して注したものとと思われる。

(2)「又作」

表一〇によれば、『文苑英華』校記に見える「又作」は五箇所であり、「一作」や「集作」の後に付記されるのを常とする。「又作」の本文は神田本や金澤本と一致する所があり、その源流は舊鈔本の一つかもしれない。

表一〇 『文苑英華』校記に見える「又作」

花房番号	『文苑英華』巻次	篇目	『文苑英華』	「又作」	刊本	舊抄本
〇五八〇	二〇三	浩歌	苟不	未。 一作若不 文作苟	紹興本：若不 那波本：若不	金澤本：苟不
二二〇三	三三五	樂童薛陽陶吹簫策歌	有條直直	一作有餘條直直、 又作條直直。	紹興本：有條直直 那波本：有條直直	
〇一七二	三四五	秦吉了	喋喋	集作喋喋 文作喋喋。	紹興本：喋喋 那波本：喋喋	神田本：喋喋
一七八五	三九三	授薛存誠御史中丞制	百官	集作司、 又作度。	紹興本：百官 那波本：百官	金澤本：百度
二九一四	八二二	如信大師功德幢記	經根論批閱	集作經根論枝 文作經論批閱。	紹興本：經根論枝 那波本：經根論枝	

(3)「一作」

『文苑英華』校記に於ける「一作」は、「長恨歌」の異同の中、「一作某」という校語があるが、この校語は「集作某」という一類とは別であり、「前者は英華編纂當時の、他本による校勘の結果である。「一作某」という校語の據る本は北宋初期の一本である」と花房英樹氏が「長恨歌」を例として推論している。⁸⁵その推論は、今までの研究者によく引用されている。

しかし、「一作」の校記は『唐文粹』による内容が見え、例えば、『文苑英華』卷一八楊炯「渾天賦竝序」には、「凡一作、皆『文粹』」と注し、卷二二李白「惜春賦」、「凡一作、皆『文粹』」と注する。周知のように、『文苑英華』は太平興國七年（九八二）から雍熙三年（九八六）までの成立であり、『唐文粹』は大中祥符四年（一〇一一）の成立である。したがって、『文苑英華』の編纂には『唐文粹』を利用することは有り得ないので、「一作」の校記は花房英樹氏が主張した「英華編纂當時の、他本による校勘の結果」ではないことが分かる。

のみならず、『文苑英華』校記に於ける「凡一作、皆某本」には、『川文粹』によって校訂した内容が見られる。この『川文粹』について、『顧千里集』（中華書局、二〇〇八）卷二三「『唐文粹』一百卷」には、

『文苑英華』屢引『川文粹』、而其間每爲『文粹』不載之篇、疑不能明久之。頃讀彭叔夏『辨證』第五卷「名氏」條有云、近世眉山成午編『唐三百家名賢文粹』、乃知『川文粹』者指此。

（『文苑英華』しばしば『川文粹』を引き、其の間に毎に『文粹』載せざる篇と爲し、疑いを明らかにする能わざること久し。頃ごろ彭叔夏『辨證』第五卷「名氏」條を讀み、近世眉山の成午『唐三百家名賢文粹』を編すと云うこと有り、乃ち『川文粹』は此を指すを知る。）

とあり、彭叔夏『文苑英華辨證』によつて『川文粹』の編纂者が判明する。『文苑英華辨證』卷五「名氏一」には、近世眉山成午編『唐二百家名賢文粹』、亦與姚鉉同、殆未見『文苑』故耶。

（近世眉山成午は『唐二百家名賢文粹』を編し、また姚鉉と同じ、殆ど未だ『文苑』を見ざるか故なるか。）と見える。また、『文獻通考』卷二四八「經籍考七十五」「唐二百家文粹四百卷」條には、

眉山成叔陽編。

とあり、叔陽は成午の字であると推測できる。『宋人傳記資料索引』（鼎文書局、一九七七）及び『補編』（四川大學出版社、一九九四）には成午の生涯に關する資料が見當たらぬが、『辨證』の「近世云々」一文によれば、『唐二百家名賢文粹』の成立は周必大が監修した四回目の校勘よりやや早かつたであろう。⁵⁹従つて、「一作」の校記の成立は、早くても南宋以降であると考えられる。

『文苑英華』の校勘過程を考えると、「一作」という校記の意味を推測できる。孝宗年間に行われた三回目の校勘が粗雑なため、周必大「文苑英華序」に次のように批判された。

孝宗皇帝間、聞聖諭欲刻江鈿『文海』。臣奏其去取差謬、不足觀。帝乃詔館職哀集『皇朝文鑑』。臣因及『文苑英華』、雖祕閣有本、然舛誤不可讀。俄聞傳旨取入、遂經乙覽、時御前置校正書籍一二十員、皆書生稍習文墨者。

（孝宗皇帝の間、聖諭江鈿『文海』を刻せんと欲するを聞く。臣、其の去取の差謬をし、觀るに足らざると奏す。帝乃ち館職に詔して『皇朝文鑑』を哀集せしむ。臣因りて『文苑英華』に及び、祕閣に本有りと雖ども、然れども舛誤して讀むべからず。俄に傳旨して取入すると聞き、遂に乙覽を經、時に御前に校正書籍二十員を置くも、皆書生の稍や文墨を習う者なり。）

参照本を明記しない「一作」の校記は、まさに粗雑と言えよう。これは三回目の成果であり、そのまま四回目に受けがれたものと推測する。三回目の所據本が確認できた場合において、彭叔夏らの校者は卷四二「漢高祖斬白蛇賦」の「凡一作、皆集本」のように文末に注記する。それ以外、大部分の校記は卷三一六「松江亭攜樂觀魚宴宿」のように、所據本が確認できなかつたので、注記せずに「一作」にしておいたものである。

むすびとして

以上、『文苑英華』及び校記における『白氏文集』の利用状況を考察した。『文苑英華』が利用した『白氏文集』は七十卷本を越える内容を有する本であると従來の研究ですでに明らかにされているが、その七十卷本の部分は、最善本の那波本よりもよく本來の編成をたもっていることが判明した。

『文苑英華』所收の白氏詩文の本文状況については、確かに先行研究が述べたように、舊抄本と類似するが、日本側の慧萼本とやや異なる中國側の舊抄本であると考えられる。

さらに、彭叔夏などによると、『文苑英華』の校訂には北宋または南宋の『白氏文集』を利用していたので、宋代において『白氏文集』が如何に廣く流傳していたかを反映している。特に「京本」や「蜀本」・「川本」など、現存していない『白氏文集』の本文状況を提供してくれ、宋代の『白氏文集』の刊本系統や那波本の淵源の考察においても有益な資料となっている。

『文苑英華』は『白氏文集』のみならず、廣く唐代文學の研究に利用されるべき資料であるが、その校記をどのように利用すればよいか、これまで十分には検討されなかった。小論が『白氏文集』の利用状況を考察したことを通して、『文苑英華』の校訂状況や校記の體例も明らかにすることもなつたと思われる。『文苑英華』は宋代における唐人の作品の様相を今に傳えており、『白氏文集』及び唐代文學の研究において極めて貴重な資料であることを、ここに改めて確認しておきたい。

注

- ① 小論が中華書局影印本『文苑英華』及び『辨證』を用い、靜嘉堂文庫抄本（以下、「靜嘉堂本」と略稱）と内閣文庫抄本（以下、「内閣本」と略稱）の『文苑英華』の複寫本・傳增湘『文苑英華校記』（北京圖書館出版社、二〇〇六、以下、「傳氏『校記』」）と略稱）も参照する。
- ② 花房英樹氏「『文苑英華』の編纂」（『東方學報』第一九期、一九五〇）・『白氏文集の批判的研究』第一部第三章「金澤文庫本の源流」（朋友書店、一九七四、頁一一七―一二二）。和田浩平氏「白氏文集に於ける舊抄本と刊本の間：總集『文苑英華』所收の「長恨歌」本文について」

〔『白氏文集の本文』、『白居易研究講座』第六卷、勉誠社、一九九五〕。謝思煒氏『白居易集總論』上編「『白氏文集』の傳布及淆亂問題辨析」（中國社會科學出版社、一九九七、頁一八）。神鷹德治氏「『管見記』紙背の『文集』について」（『懷德』第六六號、懷德堂記念會、一九九八）。「『祕府略』紙背白氏詩篇の本文の系統について」（『玉鬘』、勉誠出版、二〇〇六）・『舊抄本』白氏文集』の諸本と『文苑英華』（『舊抄本の世界』、勉誠出版、二〇一一）。

③ 明刊本『文苑英華』巻首に付す。また、周必大『文忠集』（『文淵閣四庫全書』本）巻五五にも収録されている。兩本には文字の相違があるが、小論はすべて明刊本『文苑英華』に従う。

④ 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（再版）、朋友書店、一九七四、頁一二〇。

⑤ 謝思煒氏『白居易集總論』には、「因此『文苑英華』白居易詩文所據的底本、除了一個習見的・五代及北宋諸人著錄的七十卷本之外、還應有一個未經著錄的・包括了『續後集』亡乃至掇拾集外遺篇的本子」（中國社會科學出版社、一九九七、頁一八）とある。

⑥ 「南陽小將張彥破口鎮稅人場射虎歌」（三六八五）以下、「南陽小將歌」と略稱の前に「官牛／白居易」・「馴犀／前人」二首があるので、「南陽小將歌」も白居易の作と誤る。汪立名本『白香山詩集』（以下、「汪本」と略稱）は『文苑英華』によって「南陽小將」を補遺作品に入れるが、『太平廣記』巻四三二「周雄」條には「南陽小將」の本事を記載しており、韋莊の作であることを明らかにしている。「南陽小將歌」の作者については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』にすでに指摘がある（頁二六四）。

⑦ 「過故洛城」（三六八八）は『文苑英華』巻三〇九に収録されており、作者名を「白居易」としている。ところが、『萬首唐人絶句』（文學古籍刊行社影印本）巻七・『錢考功集』（『四部叢刊』本）巻一〇には、それを錢起の作として収録している。『文苑英華』の収録は孤立しており、信を置きたい。

⑧ 「授徐縮兵部員外郎李光嗣右司員外郎制」（三八〇四）は、『文苑英華』巻三九二に収録されており、作者名を「前人」（白居易）と

している。勞格『唐尙書省郎官石柱題名考』によれば、徐綰（該書卷八）・李光嗣（該書卷三）が白居易歿後の人物であるので、『文苑英華』の作者名が衍字であることが判明する。

⑨ 「元和南省請上尊號表・第三表・第四表」（三八〇七―〇九）三篇は、『文苑英華』卷五五四に収録されており、第一表の作者名の處に「類表」とし第三・四表の作者名の處に「前人」としている。『全唐文』卷六六六には三表を白居易の作として収録している。『舊唐書』卷一五「憲宗本紀」によれば、憲宗に尊號を奉ったのは元和十四年（八一九）七月のことであり、當時白居易が忠州刺史であったので、上書は不可能である。たとえ擬作を作ったとしても、題目に南省（尙書省）と書き添えたのは不合理なことである。

⑩ 「論請不用奸臣表其三」（三八一〇）は『文苑英華』卷六二五に収録されており、作者名を「白居易」としている。文末の校記及び『文苑英華辨證』には次のように述べる。「按、表言元稹尙居臺司、裴度爲東都留守事。又云職當諫列。然元白交分、始終不替。方元傾裴時、白亦不在諫列、而集亦無之。」これによれば、「論請不用奸臣表・其三」は白居易の作ではないことが明らかである。

⑪ 「居蔡判一道」（三八一一）・「北斗龜判一道」（三八一二）二篇は『文苑英華』卷五四八に収録されているが、作者名が記載されていない。『全唐文』卷六七二には兩作を白居易の作として収録している。『全唐文』所収の白氏作品の配列順からみれば、編纂者が『白氏文集』を『全唐文』に編入した際に、判文を収録する一巻の巻首に兩作を補入したことが推測できる。

⑫ 「新池」（三七一七）・「南池」（闕番）・「宿池上」（闕番）三首は『文苑英華』卷一六五白居易「秋池二首」の後に収録されており、「新池」・「宿池上」は作者名を「前人」とし、「南池」は作者名を缺く。「新池」は姚合『姚少監詩集』（『四部叢刊』本）卷七・『唐音統籤』卷五二〇「姚合卷」・『全唐詩』卷四九九「姚合卷」に、「南池」は賈島『長江集』（『四部叢刊』本）卷三・『唐音統籤』卷三七〇「賈島卷」・『全唐詩』卷五七二「賈島卷」に、「宿池上」は賈島『長江集』卷五・『唐音統籤』卷三七〇「賈島卷」・『全唐詩』卷五七二「賈島卷」に収録されている。汪本補遺は季振直校本（以下、「季校本」と略稱）によって白居易の作品として補入したのは誤りである。「新池」・「南池」

「宿池上」三首の作者については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』にすでに指摘がある（朋友書店、一九七四、頁二〇〇・二六五）。

⑬ 「曲江」（闕番）は『文苑英華』卷一六四白居易「曲江早秋」の後に収録されており、作者名が記載されていない。内閣本は「曲江春／鄭谷」、靜嘉堂本は「曲江／鄭谷」としている。鄭谷『鄭守愚文集』（『四部叢刊』本）卷一・『唐音統籤』卷七一五「鄭谷卷」・『全唐詩』卷六七四「鄭谷卷」にも本詩を収録しており、鄭谷詩と見做すべきである。汪本補遺は季校本によって白居易の作品として補入したのは誤りである。「曲江」の作者については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』にすでに指摘がある（朋友書店、一九七四、頁二六五）。

⑭ 「宿張雲舉院」（闕番）は『文苑英華』卷七七白居易「華陽觀桃花」の後に収録されており、作者名が「前人」としているが、内閣本は「姚合」としている。姚合『姚少監詩集』卷八にも本詩を収録しており、姚合詩と見做すべきである。汪本補遺は季校本によって白居易の作品として補入したのは誤りである。「宿張雲舉院」の作者については、花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』にすでに指摘がある（朋友書店、一九七四、頁二六五）。

⑮ 「惜花」（闕番）は『文苑英華』卷三三三白居易「惜落花贈崔二十四」の後に収録されており、作者名が記載されていない。内閣本は「方干」としている。方干『玄英集』（『文淵閣四庫全書』本）卷八・『唐音統籤』卷六〇八「方干卷」・『萬首唐人絶句選』卷五九方干の下にも本詩を収録しており、方干詩と見做すべきである。汪本『白香山詩集』は季校本によって白居易の作品として補入したのは誤りである。

⑯ 「授賈餗等中書舍人制」（闕番）・「授李渤給事中鄭涵中書舍人等制」（闕番）二篇は『文苑英華』卷三八二に収録されており、作者名を「前人」（白居易）としている。『全唐文』は兩作を李虞仲の作として収録している。賈餗の仕歴（『舊唐書』卷一九九・『新唐書』卷一七九「賈餗本傳」）によれば、「授賈餗等中書舍人制」は大和三年（八二九）の作であり、また、李渤・鄭涵の仕歴（『舊唐書』卷一七五・『新唐書』卷一一八「李渤本傳」・『舊唐書』卷一五八・『新唐書』卷一六五「鄭餘慶本傳付子涵」）によれば、「授李渤給事中鄭涵中書舍人等制」は長慶四年（八二四）の作である。當時白居易は翰林學士に在任していなかったため、制文を書くはずがない。白居易の擬作である可能性

もあるが、李虞仲の仕歴を考えると、『全唐文』に従ったほうがより妥当であろう。『文苑英華』には李虞仲の作を収録しており、その中に、白居易の作の直後に収録されている例としては、卷三九二「授李行修刑部員外郎制」・卷四一〇「授裴洌郭曠等諸州刺史制」二篇がある。「授賈餗等中書舍人制」と「授李渤給事中鄭涵中書舍人等制」とは、元々李虞仲の作として白居易の作品の後に収録されており、偶然に撰者が失われ、白居易の作と誤認されたと推測する。

⑰ 紹興本の卷七は、前後續集本の卷三二に當たる。

⑱ 「勸酒」(三六八四)は同題の「勸酒」(二二三九)と相連ねて『文苑英華』卷三三六に収録されている。後者は前後續集本(那波本)の卷五一に収録されているので、「勸酒」(三六八四)も『白氏文集』卷五一に屬すと判断できる。

⑲ 「陰雨」(三六八六)一首は同題の「陰雨」(一一四〇)と相連ねて『文苑英華』卷一五三に収録されている。後者は前後續集本(那波本)の卷一八に収録されているので、「陰雨」(三六八六)も『白氏文集』卷一八に屬すと判断できる。

⑳ 「授庾敬休監察御史制」(三八〇三)は『文苑英華』卷三九五に収録されており、作者名を「前人」(白居易)としているが、『白氏文集』卷三七「除拾遺監察等制」(一七七五)と同文である。ただ、『文苑英華』が該作を「憲臺三・監察御史」に収録する際に、元の題目を改めた。

㉑ 「寄荆南淮南二相公」(三六五九)は會昌六年(八四六)に作られ、那波本卷七一にも収録されているので、『白氏文集』續集に屬することが明らかである。

㉒ 「醉吟先生墓誌銘並序」(三七九八)(以下、「自撰墓誌」と略稱)は那波本に収録されていないが、『管見抄』の末卷の卷七一「白氏集後記」に續く九首の最後の一首として収録されている。『管見抄』の収録状況によれば、「自撰墓誌」はもともと北宋刊本卷七一の後(に附される外集、即ち卷七二にあったと平岡武夫氏が推定する(『白氏文集』の金澤文庫本・林家校本・宗性要文抄本・管見抄本について))。さらに、太田次男氏は本文對校を行い、『管見抄』卷七一「後の數篇のみが北宋刊本よりの書寫部分である」と推定する(太田次男氏『白

氏文集本文の研究』巻中、「國立公文書館内閣文庫藏『管見抄』」、勉誠社、一九九七、頁一二三三。『管見抄』の題注によれば、「自撰墓誌」は開成四年（八三九）に作られたが、白居易の卒年や年壽を正しく記載したので、白居易が歿した後、他人の手によって加筆された可能性が高い。「自撰墓誌」は元々七五巻本『白氏文集』の末尾に付録しており、唐末の戦亂の爲に、續集五巻とともに散佚し、ついに補遺作品として拾い上げられて外集に定着したと考えられる。

⑳ 「太湖石記」（三八一三）一首は會昌三年（八四三）に作られたので、『白氏文集』續集に屬することが分かる。

㉑ 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』には、「汪立名編訂本の補遺巻で知られるように、季振直は文苑英華に補遺作品を求めていた」（頁二〇〇）と指摘する。

㉒ 靜永健先生の教示によれば、蓬左文庫所藏の那波本巻五一「勸酒」には、連作に關する書き入れがある。

㉓ 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』、頁二一〇。

㉔ 『宋朝事實類苑』（上海古籍出版社、一九八一）巻三一、「太平興國之初、始建崇文院、合聚昭文・史館・集賢之書。」「文獻通考」巻一七四「經籍考」、「（崇文院）西廊有四庫、分經・史・子・集四部、爲史館書庫。」

㉕ 注意すべきのは、宋敏求『春明退朝錄』巻下には「唐白文公自勸文集、（中略）寄藏廬山東林寺」とあるが、陸游『渭南文集』が記載する「白公嘗以文集留草堂」と合わない。陳舜俞『廬山記』巻一には「（白公草堂）後于遺愛寺竝廢、久之、好事者慕公風跡、以東林寺北藍墻之外作堂焉。五代衰亂、復爲兵火野燒之所毀。至道中、郡守孫考功追□之」とあり、これによれば、唐末以降の「白公草堂」は東林寺の近傍にあったので、東林寺の付屬部分と見做される。宋人の所謂「白公草堂本」は、「東林寺本」と同じものであろう。景德四年東林寺に奉納した『白氏文集』は、恐らく東林寺の白公草堂に奉納したものであると思われる。

㉖ 岑仲勉氏「論『白氏長慶集』源流」には、「因五代至末初、只言七十卷也」（岑仲勉氏『岑仲勉史學論文集』、中華書局、一九九〇、

頁四五）とある。

③〇 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』、頁一二〇

③① 戸崎哲彦氏「『白氏文集』宋代諸本の系譜」には、「皆篇目次第非眞」とは『集』全體の編次ではなく、直前の「後人亦補東林所藏」について謂うものではなからうか、「今本・廬山本・吳本・蜀本がいずれも廬山東林寺本七〇卷を祖本とするならば、篇目次第は基本的に同じであったはずであり、「しかし後に補缺されて」おり、「その部分について「非眞」と謂うのではなからうか」とある（頁四四）。

③② ただ、『崇文總目』原書の流傳状況は複雑であり、後の改訂や散佚が相當存在している。それに、北宋館閣の所藏には、同書であっても複数本が保存された場合もある（陳樂素氏『宋史藝文志考證』、廣東人民出版社、二〇一四、「館閣書有多本」、頁六八四）。それによれば、當時の崇文院には必ず七十卷本以外の『白氏文集』を保存していないと斷言できない。

③③ 郭勉愈氏「『唐文粹』「詮擇」『文苑英華』說辨析」、北京師範大學學報（人文社會科學版）、二〇〇二年第六期。

③④ 『宋史』（中華書局、一九八五）卷四四一「姚鉉傳」には、「淳化五年、直史館」とある。

③⑤ 『唐文粹』（四部叢刊本）「文粹序」には、「由是大中祥符（一〇一一）紀號之四禩、皇帝祀汾陰后土之月、吳興姚鉉集文粹成。（中略）十年於茲、始就厥志。」

③⑥ ただ、『文苑英華』校記によれば、『唐文粹』と『文苑英華』との兩本所收の「太湖石記」には異文四箇所あり、それは各自の流傳中に改變されたものであろう。

③⑦ 戸崎哲彦氏「『白氏文集』宋代諸本の系譜」、頁四五。

③⑧ 前掲の注二一を参照されたい。

③⑨ 陳捷氏「白氏文集の宋版諸本について」、『白氏文集の本文』、『白居易研究講座』第六卷、勉誠出版、一九九五、頁九六。

④0 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』、頁一一八。

④1 神鷹徳治氏「『祕府略』紙背白氏詩篇の本文の系統について」(『玉鬢』、勉誠出版、二〇〇六、頁三三七)。これ以外、神鷹徳治氏「『管見記』紙背の『文集』について」(『懷徳』第六十六號、懷徳堂記念會、一九九八)・「舊抄本『白氏文集』の諸本と『文苑英華』」(『舊抄本の世界』、勉誠出版、二〇一一)などがある。

④2 和田浩平氏「白氏文集に於ける舊抄本と刊本の間：總集『文苑英華』所收の「長恨歌」本文について」(『白居易研究講座』第六卷『白氏文集の本文』、勉誠社、一九九五、頁一五〇・一五一)。ただし、『文苑英華』所據本の來源について、「特異な白氏文集大集、或いは長恨歌の單行本」より採録したという推定は首肯しかねる。

④3 謝思煒氏『白居易集綜論』、頁一八。

④4 太田次男氏『舊抄本を中心とする白氏文集本文の研究』、頁二〇七。

④5 これは紹興本を底本とする謝思煒『白居易詩集校註』『白居易文集校註』の校勘記に基づく數値である。

④6 『文苑英華』が詩文を収録する際に、よく原題を改變して類目に合わせる。また、「薦李晏韋楚狀其二」(二九二四)のように、原文の決まり文句を削除する場合もある。それらの異文は統計に組み入れない。内閣本などの鈔本の異文を参考として付する。

④7 ただ、『文苑英華』校記に見える京本は文の部分だけに見られると澤崎久和先生が指摘されているが、その原因はまだ不明である。

④8 表二以外、『文苑英華』卷七九四陳鴻「長恨歌傳」校記には、「此篇又見『麗情集』及京本『大曲』、頗有異同、竝錄于後」とある。ここに言及される京本『大曲』は、「長恨歌」を収録するか否かよく分からない。

④9 陳捷氏「白氏文集の宋版諸本について」(『白居易研究講座』第六卷)・戸崎哲彦氏「『白氏文集』宋代諸本の系譜」(『島大言語文化』

第二十四期、二〇〇八)。

⑤0 戸崎哲彦氏「『白氏文集』宋代諸本の系譜」、頁三二。

⑤1 『舊唐書』卷二八「地理志一」、「同州（中略）領馮翊・下邳・蒲城・朝邑・澄城・白水・郃陽・韓城八縣。」

⑤2 「沍寒」は『春秋左氏傳』「昭公四年」に、「深山窮谷、固陰沍寒、於是乎取之」と見える。「祈寒」では意味が通じない。

⑤3 對句を考慮すると、「播於人耳」に作つてよい。

⑤4 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（頁七三）には、「岑（案ずるに、岑仲勉）氏の結論とは逆に、那波本やそれが據る朝鮮本整版、さらに朝鮮銅活字本こそ、南宋における蜀本系諸本と連るものである」とある。

⑤5 文末注には、「凡一作、皆川本」とある。

⑤6 原文は「沐」に作るが、校訂者が「汰」に塗改した。

⑤7 即ち『文苑英華』卷七六二王慶方「明堂大饗議」の「由緒」には、「浙本・文粹作緣由」とある。卷七六八柳宗元「復讎議」の「達理」二箇所には、「二理字、浙本・文粹竝作禮」とある。卷七九五沈亞之「李紳傳」の「墨數十行」には、「墨、浙本・文粹作累」とある。卷九七〇李華「著作郎贈祕書少監權君墓表」の「時節將兼本道使」には、「三字節、浙本・文粹作持節」とあり、「扶曳」には「浙本・文粹作曳杖」とある。

⑤8 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』、朋友書店、一九七四、頁一一八。

⑤9 『文獻通考』卷二四八「經籍考七十五」「唐三百家文粹四百卷」條には、「後村劉氏序略曰、（中略）叔陽薦於鄉、既成此書、丐余序之」とあり、『唐三百家文粹』には劉克莊の序文がついていたことが分かる。しかし、劉克莊（一一八七―一二六九）の生涯を考えると、嘉泰元年（一二〇一）『文苑英華』が刊行された時、彼はまだ十五歳であり、それより早く成立した『唐三百家文粹』の序文を書くことは不可能である。これは恐らく後代の書估が劉克莊の序文を偽造し、『唐三百家文粹』の賣上げを求めたと考えられる。

附論：林羅山『歌行露雪』について

『歌行露雪』一冊は林羅山の手稿本であり、彼が十四歳の時に英甫永雄に「長恨歌」・「琵琶行」の講義を受けて作成した注解書である。小論は『歌行露雪』の成立について探究し、羅山の白詩受容について検討してみたい。

一、『歌行露雪』の成立背景及び英甫永雄の白居易受容

1、『歌行露雪』の成立背景

『歌行露雪』の「長恨歌」と「琵琶行」の間には、師の英甫永雄が撰じた本書の序文に相當する以下引用の一文（以下、「永雄序」と略稱）が挿入されている。

佗力門下之家有少年、其名謂又三郎。去歲之春、十有三歲、而入吾東山、遊於大統庵裏、先于孔丘之治學者二歲。今茲冬之仲、又君袖一書來、以見示予。予開而管窺之、長恨歌之露抄也。予問云、是何人之所抄乎。又君答曰、去秋入和尚之講席、自聽之。爾來本于此、以書之出矣。熟視者、如于回明皇樂盡哀來之起本・玉妃生前沒後之事跡・祿兒反相・方士幻術、各無所缺。加之文字反切之例・義意深密之理、悉現于筆端鼓舞者、

妙中得妙、奇外呈奇者也。而今君之所抄之事歴等、皆非先是予之所講之謬説。寔後生可畏者、其斯之謂乎。昔堯夫十四歳而作明妃引、與今又君十四歳而抄玉妃傳、可謂異曲同工。戲賦唐律一篇以褒焉云。

年少揮毫憐馬嵬

露抄雪纂最奇哉

羨看子學作他力

長恨吾徒無此才

文祿第五仲冬日 前南禪永雄

（佗力門下の家に少年有り、其の名は又三郎と謂う。去歳の春、十有三歳、吾が東山に入り、大統庵の裏に遊ぶ。孔丘の治學に先ずること二歳。今茲の冬の仲、又君一書を袖して來たり、以て予に示さる。予開きて之を管窺するに、長恨歌の露抄なり。予問いて云く、是れ何の人の抄する所やと。又君答えて曰く、去秋和尚の講席に入り、自ら之を聴く。爾來此に本づき、以て之を書き出すと。熟視すれば、明皇の樂盡哀來の起本・玉妃の生前没後の事跡・祿兒の反相・方士の幻術を回する如し、各おの缺く所無し。しかのみならず、文字反切の例・義意深密の理、悉く筆端に現れて鼓舞する者、妙中に妙を得、奇外に奇を呈する者なり。而今君の抄する所の事歴、皆是より先に予の講ずる所の謬説を非とす。寔に後生畏るべき者とは、其れこの謂いか。昔堯夫十四歳にして明妃引を作り、今又君十四歳にして玉妃傳を抄すると、異曲同工と謂うべし。戲れに唐律一篇を賦して以て焉を褒むると云う。

年少揮毫して馬嵬を憐れみ

露抄雪纂最も奇なるかな

羨み見る、子の學他力を作すと

長く恨む、吾が徒此の才無きを

文祿第五仲冬日 前南禪永雄)

と見える。この一文は英甫永雄『倒痴集』^①にも収録されているが、少し文字の相違がある。^②筆跡からみれば、『歌行露雪』所載の一文は羅山の傳録ではなく、永雄が自ら加筆したものである。^③また、林鶯峰『西風淚露』(内閣文庫本)は、『歌行露雪』の撰述の経緯について次のように述べている。

歴一兩年、聞講「長恨歌」「琵琶行」、爲之抄解、號『歌行露雪』。其所引典故甚詳、師見之問曰、何處求書、考其典故哉。答曰、師之藏書、余盡見了。師異之、自是每考事必聞其出處。

(一兩年を歴て、「長恨歌」「琵琶行」を講ずるを聞き、之が抄解を爲し、『歌行露雪』と號す。其の引く所の典故は甚だ詳しく、師は之を見て問いて曰く、何處にか書を求め、其の典故を考うると。答えて曰く、師の藏書、余は盡く見了わんぬと。師は之を異とし、是れより事を考うる毎に、必ず其の出處を聞く。)

ここの「師」は、言うまでもなく英甫永雄を指している。

英甫永雄は安土桃山時代の禪僧であり、文祿三年(一五九四)南禪寺の公帖を受けたが、入寺しておらず、

年二回のペースで建仁寺の再住を繰り返していた。^④ 永雄序によれば、彼が「長恨歌」「琵琶行」の講義を行ったのは、文祿四年（一五九五）の秋以降、建仁寺に移住した後であり、^⑤ 『歌行露雪』の序を記したのは「文祿第五仲冬日」、即ち慶長元年（一五九六）仲冬の頃である。従って、林羅山『歌行露雪』の作成は、概ね文祿四年（一五九五）の後半から慶長元年（一五九六）の冬までの間である。たとえ神童と稱賛されても、羅山が「長恨歌」・「琵琶行」の注釋を作成するのは一年ぐらいがかかったのは理の當然であろう。

永雄序によれば、彼は羅山が自分の講義に参加したことや、歌行の注釋を作ったことにあまり注意を拂わなかった（「予問云、是何人之所抄乎」。しかし、羅山が『歌行露雪』に引用した故事や典據は、彼の講義を越えた内容、ないし誤りを修訂した内容もたくさん存在している（「皆非先是予之所講之謬説」）。永雄の稱賛は幼少期の羅山の學業を勸奨するために、多少の溢譽の嫌いがあるが、『歌行露雪』の作成については、羅山が英甫永雄の助手に過ぎないと言うより、^⑥ 彼が永雄の講義を受けた上、一部の新たな注釋を加えたと言ったほうがより妥當であろう。

英甫永雄の「唐律一篇」にいう「露抄雪纂」の一語は宋の葉適『水心集』卷二五「宋廩父墓誌銘」や明の朱謀堦『續書史會要』「鄒緝」條に見られ、^⑦ 宋元以來の熟語であることが分かる。『歌行露雪』の外題には「歌行露雪」四字が書かれているが、冒頭部には書名が書かれていないので、羅山が書寫した當時、まだ名付けられておらず、永雄序にある「露抄雪纂」の語から取って始めて名付けたと考えられる。また、前掲の寛文六年（一六六六）に成立した『西風淚露』には、すでに「歌行露雪」の書名に言及している。ただし、この書名は羅山自らの命名であるか、他人の命名であるかは不明である。

2、英甫永雄の白居易受容

英甫永雄は五山文學の中で狂歌作者として名高いが、狂歌にとどまらず、彼は「中院通勝の主催する中院月次會にたびたび出席して、當座の和歌題で漢詩を作るなど、和文學との交渉も深かった」という。^⑧ 建仁寺兩足院所藏の『倒痾集』は永雄の漢詩文集であり、彼が高度な漢詩文制作の能力を有したことを示している。前述の『歌行露雪』の序文を除き、『倒痾集』において『白氏文集』中の表現を用いた作品や白居易の事跡に関連する作品を次に抄出して見よう。

①芙蓉滴露始開時、赫々陽鳥出海來。花影涵紅似紅日、液池疑是變咸池。（「初日芙蓉」）

（『白氏文集』卷一二「長恨歌」（〇五九六）、「歸來池苑皆依舊、太液芙蓉未央柳。」）

②紅粧解語掖池上、似待春寒賜浴時。（「臘底荷花」）

（『白氏文集』卷一二「長恨歌」（〇五九六）、「春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂。」）

③楓葉荻花落盡時、庭前菊有折殘枝。（「殘菊」）

（『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」）

④熒熒淡照似霜月、空屋梁間燕子樓。（「螢入燕巢」）

（『白氏文集』卷一五「燕子樓三首及序」（〇八五九—〇八六二）。）

⑤可憐山鹿來遊榼、石火光中寄汝身。

〔『白氏文集』卷五六「對酒五首」その二（二六七七）、「蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。」〕

⑥夢亦潯陽江上客、葉色夜送荻州秋。（「荻聲驚夢」）

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑦幽咽暗泉盈耳清、終宵入枕嬾涼生。（「泉聲來枕」）

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下難。」〕

⑧潯陽旅客夢應懶、瑟瑟颼颼葉初戰。^⑨（「荻風」）

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑨不向潯陽江上生、和涓涓澗水流鳴。

〔『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」〕

⑩知是天公共吾惜、秋來只爲一輪長。（「月斜天未明」）

〔『白氏文集』卷一五「燕子樓三首並序」その一（〇八六〇）、「燕子樓中霜月夜、秋來只爲一人長。」また、卷一四「涼夜有懷」（〇七五二）、「燈盡夢初罷、月斜天未明。」〕

⑪月照青苔地（句題）

〔『白氏文集』卷一四「秋思」（〇七五二）、「烏棲紅葉樹、月照青苔地。」〕

⑫杜鵑聲似哭（句題）

〔『白氏文集』卷一一「江上送客」（〇五四〇）、「杜鵑聲似哭、湘竹斑如血。」〕

⑬樂天四十六新正、嗜酒賦詩慰老生。令我同中還有異、未曾一臥醉江城。（試觚、我今四十六、衰醉臥江城。樂天。）

（『白氏文集』卷七「題舊寫真圖」（〇三三五）、「我今四十六、衰頓臥江城。」ただし、『倒痴集』は「頓」を「醉」に作る。）

⑭一叢風戰小庭側、移得潯陽索索秋。（「幽居荻」）

（『白氏文集』卷一二「琵琶引」（〇六〇三）、「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索索。」）

⑮被單殘臘夜寒天、挑盡孤燈何肯眠。（「夜寒無夢」）

（『白氏文集』卷一二「長恨歌」（〇五九六）、「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠。」）

⑯島郊韓柳冠詩人、後至元和變體新。（又代廣上司）

（『白氏文集』卷五三「余思未盡加爲六韻重寄微之」（二三一九）、「制從長慶辭高古、詩到元和體變新。」）

⑰彼美西方菊光佛、彩雲易散十三余。（杭州蘇小十三テ死タソ彩雲易散瑠璃脆妍如蘇小十三余トアルト也

又奏舞陽十三テ死タトソ）（「木勻菊圃十三」）

（『白氏文集』卷一二「簡簡吟」（〇六〇四）、「大都好物不堅牢、彩雲易散琉璃脆。」）

⑱「追悼月秀正貞信女助宗賢哀」、聞説別離傷暮齡、淚兼霖雨共難停。孤燈挑盡焦思處、定似明星夕殿螢。

（『白氏文集』卷一二「長恨歌」（〇五九六）、「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠。」）

上記の例によれば、英甫永雄は白居易及び『白氏文集』をよく心得ており、白詩の表現を學んだり、白詩を句

題としたりすることがよく見られる。また、白詩を評價した或いは白詩に取材した例も次のように見られる。

①⁹ 桃花輕薄李花俗、春季風光元白詩。（「晚唐詩如晚春景」）

②⁰ 「値修月妙善大姐小斂幾書卒都婆」、修善奉行還會座、鳥窠答處是諸訛。

（白居易の鳥窠問答に取材する。）

五山文學における白居易の受容については、「李杜坡谷にくらべて、禪林の關心の圏外に去りつつあった」と芳賀幸四郎氏が結論するが、平安時代以來、日本の文人に深く馴染まれた白氏詩文は、五山僧侶の創作に影響を與えないはずがないと思われる。特に「鳥窠道林との問答は五山の好箇の詩材」であり、よく彼らの禪詩に採り上げられた。^⑩ 永雄の「値修月妙善大姐小斂幾書卒都婆」は、鳥窠問答に取材した一例である。

値修月妙善大姐小斂幾書卒都婆

修善奉行還會座

鳥窠答處是諸訛

今辰若致這般問

只對化言在月波

と見える。鳥窠の答えが五山僧に稱賛されたことが多く見られるが、永雄がそれを「是諸訛」と批判し、追悼詩の主題に應じて、白居易と鳥窠道林との問答を活用して人生の儂さを慨嘆した。

平安朝以來、日本文學に深い影響を與えてきた「長恨歌」・「琵琶行」にも、永雄はよく親しんでいた。「追悼月秀正貞信女助宗賢哀」を一例として擧げてみる。

追悼月秀正貞信女助宗賢哀

聞説別離傷暮齡

淚兼霖雨共難停

孤燈挑盡焦思處

定似明星夕殿螢

と見える。「孤燈挑盡焦思處、定似明星夕殿螢」の二句は、明らかに「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」を攝取したものであるが、前句の「霖雨」の詩語は「長恨歌」には見当たらない。『楊太真外傳』に、

又至斜谷口、屬霖雨涉旬、于棧道雨中聞鈴聲隔山相應。上既悼念貴妃、因采其聲爲「雨霖鈴」曲、以寄恨焉。

とある。永雄の「淚兼霖雨共難停」句は『楊太真外傳』を攝取したであろう。これは永雄が「長恨歌」の表現を襲用した時、その本文にとどまらず、關連する典據も注意していたことを表している。「五山文學では『史記』『漢書』や杜詩・蘇詩など、多くの抄物が著されたが、白詩抄は殘念ながら管見に入らない」と蔭木英雄氏が述べるが、英甫永雄が講義した「長恨歌」「琵琶行」が、羅山を啓發して『歌行露雪』になったことは、その不足を少し補うと言えよう。羅山『歌行露雪』の「夜雨聞鈴斷腸聲」句の注記にも、『楊妃外傳』の同じ段落

を引用しており、永雄の講義の内容を受けたと考えられる。

二、清原宣賢抄「長恨歌・琵琶行抄」と『歌行露雪』との関係

清原宣賢が書寫した「長恨歌竝琵琶行」（以下、「宣賢抄」と略稱）が多く現存しており、京都大學付屬圖書館清家文庫が所藏する「長恨歌・琵琶行抄」（以下、「京大本」と略稱）はその「源流に位置する本」^⑭であり、「江戸期以降の「長恨歌・琵琶行」注釋において、多大な影響を與えた」^⑮ものであると安野博之氏が論じている。また、「宣賢抄」以降に成立した『歌行露雪』は、「（京大本）の注釋と共通する部分が多く見られる」と安野氏が指摘する。^⑯「宣賢抄」といえば、坂本龍門文庫にはもう一本（以下、「龍門本」と略稱）があり、同様に『歌行露雪』と關連する内容が存在している。「歌行露雪・長恨歌」の冒頭部には、

① 詩人玉屑卷第一、守法度曰詩、載始末曰引、體如行書曰行、放情曰歌、兼之曰歌行、悲如蛩蛩曰吟、通俚俗曰謳、委曲盡情曰曲。

とあり、龍門本「宣賢抄」の「長恨歌」の末尾にも、『詩人玉屑』の同じ部分を引用している。また、『歌行露雪』の「琵琶行」の初めには、

② 白居易、字樂天、號香山居士。見長恨歌抄。

とあり、龍門本「宣賢抄」の「琵琶引」の余白には、白居易の字號や生涯に關する内容がある。また、『歌行露雪』の「琵琶行」の同じ箇所には、

③引行事、見長恨歌抄。抑揚頓挫、流離沉鬱之態者、此比巴行文章之體也。是則古文眞寶注者之詞也。

とある。京大本「宣賢抄」の同じ部分には、「具抑揚頓挫、流離沉鬱之態、雖千載之下、宛然琵琶哀愁之聲也」と注する。羅山が宣賢抄を機械的に寫したのではなく、清原宣賢が利用した資料の來源を明らかにしたことが窺える。

また、『歌行露雪』の「琵琶行」の「杜鵑啼血猿哀鳴」句には、

④文選廿六、謝靈運入彭蠡湖詩、乘月聽哀猿、浥露馥芳葉。哀猿、見長恨抄。

と見える。京大本「宣賢抄」の「琵琶行」の同じ句には、「謝靈運哀猿啼月」と注する。ここの「長恨抄」は、「長恨歌」「琵琶行」二首の抄の併稱であると考えられる。羅山が宣賢抄から「哀猿」の典據を提示し、『文選』から原詩の詩題及び該當部分を注記したと推測できる。ただし、『歌行露雪』の「琵琶行」の「十三學得琵琶成」句には、

⑤十八史略五、開元二年、置左右教坊。見長恨歌抄。

とあるが、京大本や龍門本「宣賢抄」ともに見當たらない。「宣賢抄」の諸本が多く存在している事實を考えれば、

羅山が使ったのは京大本や龍門本に類似しているが、少し異同のある一本であろう。羅山本人の出身を考えると、彼の一家が兩足院建仁寺の林氏と親交を有し、その林氏は「代々清原家の門人で清原宣賢の經書詩集の抄物を多く傳承していた」^⑮。後に成立した羅山學は、清原家と「學問的系譜に連なる」ものであり、^⑯幼少期の羅山は林氏の關係を通じて、清原宣賢の「長恨歌・琵琶行抄」を讀んだことがあったと思われる。

また、英甫永雄も「母方を通じて姻戚關係」を有した清原家とよく交際しており、「二十歳代前半の頃」から清原宣賢の息子の喜賢と知り合った。^⑰天文十六年（一五四七）に生まれた永雄が清原宣賢に直接師事することが不可能だが、清原家に傳存されていた白氏歌行の抄物を閱覽したことはあり得る。従って、永雄が「長恨歌」「琵琶行」を講義した際に、宣賢抄本やその傳抄本を参照したことも自然である。さらに、彼の講義を仲介として、林羅山が作った『歌行露雪』の本文及び注記は、清原宣賢の「長恨歌・琵琶行抄」とある程度の繋がりを有していると考えられる。そこで以下には、京大本・龍門本を例として、清原宣賢抄「長恨歌・琵琶行」と『歌行露雪』との關係を詳しく論じてみたい。

1、兩書の本文状況

「長恨歌」（〇五九六）・「琵琶行」（〇六〇三）二首は古くから日本の文人に親しまれ、『白氏文集』及び選本の『古文眞寶』など以外、『歌行詩』（『長恨歌傳・長恨歌・琵琶行・邪馬臺』）の單行本も編まれて盛行した。^⑱だが、京大本「宣賢抄」は『白氏文集』や單行本によらず、『古文眞寶前集』卷八・九によって兩作を傳寫している。

それに對し、龍門本「宣賢抄」は「古文眞寶の影響を受けぬなど、本邦所傳の古い書き本である」と川瀬一馬氏が論じている。²²さらに、川瀬氏が京大本「宣賢抄」について疑いを抱き、「むしろ宣賢以前に禪僧の講述したものを、宣賢が講義の参考用に手寫したものと見るべきであらう」と述べている。²³それに對し、國田百合子氏が「これは、室町時代から江戸時代にかけて教科書や参考書として大いに流行した『古文眞寶集』の本文を採用したため」と論じている。²⁴さらに、近藤春雄氏が「(京大本)が『古文眞寶』愛讀の風潮を反映したものであり、「當時、『古文眞寶』の叢林の間に流行したのと關連」し、「讀者の轉變とその普及を意味するものでもあった」と述べている。²⁵

次に擧げる表一によれば、龍門本には舊抄本『白氏文集』の代表たる金澤本と類似する所がよく見られるが、「回頭一笑百媚生」や「排風馭氣奔如電」・「九華帳裏夢魂驚」・「似訴平生不得志」・「輕攏慢撚撥復挑」・「曲罷常教善才服」・「繞船明月江水寒」・「潯陽地僻無音樂」・「滿座聞之皆掩泣」のように、金澤本と異なっており、京大本や『歌行露雪』・『古文眞寶』と一致する所も相當存在している。これによれば、龍門本は舊抄本系統と看做されるが、京大本と同じく刊本系の影響を受けており、京大本は單に禪僧の講述したものを手寫した本ではないと考えられる。そこで、小論は川瀬一馬氏の説を採らず、國田百合子・近藤春雄兩氏の結論を是とする。

『歌行露雪』の「長恨歌」の篇目には「古文眞寶前集第八卷載之」と注記されており、「琵琶行」には「古文眞寶前集九卷有之」と注記されていることから見れば、羅山が『歌行露雪』の作成に採用した「長恨歌」「琵琶行」は、京大本「宣賢抄」と同じように『古文眞寶前集』によっていることが窺える。それは禪林の風潮、特に英甫永雄に影響されていたと思われる。ただし、下にあげた表一によれば、『歌行露雪』の本文は『古文

眞寶』及び京大本・龍門本「宣賢抄」と概ね一致しているが、異なる箇所も見える。それは羅山が「長恨歌」「琵琶行」を抄寫した際に、他本によって改變したからであろう。特に「琵琶行」の「春江花朝秋月夜、往往取酒還獨傾」一聯は『古文眞寶』の本文には見られず、他本によって補入したものであると思われる。

表一 「長恨歌」「琵琶行」異文表

*本表は宮内廳書陵部所藏那波本『白氏文集』の本文を採り、『歌行露雪』及び異文注・大英圖書館所藏南北朝刊本『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』^⑧・京大本宣賢抄・龍門本宣賢抄・『和刻本漢詩集成』本『歌行詩』・金澤本『白氏文集』所收の「長恨歌」「琵琶行」を用いて校勘した異文表である。

那波本	歌行露雪・注記	『古文眞寶』	宣賢抄・注記	『歌行詩』	金澤本
御宇多年求不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本：○○○○○○○○ 龍門本：○○○○○○○○	○○○○○○○○	○寓○○○○○
養在深閨人未識	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本：○○○○○○○○ 龍門本：○○○窓○○○○	○○○○○○○○	○○○窓○○○
回眸一笑百媚生	○頭○○○○○○ 頭字、文集作眸。	○頭○○○○○○	京大本：○頭○○○○○○ 一作眸。 龍門本：○頭○○○○○○	○頭○○○○○○	○○○○○○○○
始是新承恩澤時	○○○○○○○○	○○○○○○○○	京大本：○○○○○○○○ 龍門本：○○○○○○○○	○○○○思○○	○○○○○○○○

夜雨聞鈴腸斷聲	峨嵋山下少人行	云棧繁紆登劍閣	迴看血淚相和流	君王掩面救不得	宛轉蛾眉馬前死	翠華搖搖行復止	漁陽鼙鼓動地來	緩歌縵舞凝絲竹	玉樓宴罷醉和春
○ 鈴、 或作猿。	○	○	○	○	○ 蛾	○	○ 鞞	○ 慢 字、 文集縵。	○
○	○	○	○	○	○ 蛾	○	○	○	○
龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○ 蛾	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○	龍門本： ○ 京大本： ○ 慢	龍門本： ○ 京大本： ○ 如、 和イ。
○ 鈴 猿	○	○	○ 首	○	○	○	○	○ 慢	○
○ 猿	○ 蛾 行人	○ 迴	○ 淚血	○ 眼	○	○ 花	○	○ 慢	○

九華帳裏夢中驚	中有一人字玉眞	其中綽約多仙子	樓閣玲瓏五雲起	山在虛無縹緲間	排空馭氣奔如電	能以精誠致魂魄	臨邛道士鴻都客	翡翠衾寒誰與共	鴛鴦瓦冷霜華重
魂、文集作中。			殿		風、文集作空。	神			花
魂			殿		風	神			
龍門本：○花○魂	京大本：○魂	龍門本：○	京大本：○殿	龍門本：○	龍門本：○風	京大本：○神	龍門本：○	京大本：○舊枕故衾1。	龍門本：○
魂			殿		風	神			
花	名妃	上	殿	眇			方	舊枕故衾	花

釵擘黃金合分鈿	釵留一股合一扇	唯將舊物表深情	回頭下望人寰處	昭陽殿里恩愛絕	一別音容兩渺茫	含情凝睇謝君王	玉容寂寞淚攔干	風吹仙袂飄飄舉	雲鬢半垂新睡覺
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 渺○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 欄○	○○○○○○○○ 飄○	○○○○○○○○ 偏、文集作垂。
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 渺○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 欄○	○○○○○○○○ 飄○	○○○○○○○○ 偏○
龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○ 渺○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○ 闌○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○ 飄○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○ 偏○
○劈○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 渺○	○○○○○○○○ 眸○	○○○○○○○○ 欄○	○○○○○○○○ 飄○	○○○○○○○○ 偏○
○○○○○○○○	○○○○鈿○○○	空持○○○○○○	○○○○視○○○	○○○○歌○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 闌○	○○○○○○○○	○○○○○○○○ 偏○

憫默	賈人婦	本長安倡女	舟船中	送客湓浦口	元和十年	詩題 琵琶引	那波本	此恨綿綿無盡期	但令心似金鈿堅
○然	商○○	○是○○○家○ 文集無家字。	○○○	○○○至○○○	○○○五○秋 文集無秋字。	○○○行	歌行露雪・注記	○○○○○絕○ 絕期、文集作盡期。	○○○○○○○
○然	○○○	○○○○○	○○○	○○○○○	○○○○○	○○○行	『古文眞寶』	○○○○○絕○	○○○○○○○
龍門本：○然 京大本：○然	龍門本：○○○ 京大本：○○○	龍門本：○○○○○家○ 京大本：○○○○○	龍門本：○○○ 京大本：○○○	龍門本：○○○○○ 京大本：○○○○○	龍門本：○○○○○ 京大本：○○○○○	龍門本：○○○ 京大本：○○○行	宣賢抄・注記	龍門本：○○○○○絕○ 京大本：○○○○○絕○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○
○然	商○○	○是○○○家○	○○○	○○○至○○○	○○○五○秋	○○○行	『歌行詩』	○○○○○	○○○○○○○
○○	○○○	○是○○○家○	舟中	○○○至○○○	○○○五○秋	○○○	金澤本	○○○○○絕○	○教○○○○○

嘈嘈切切錯雜彈	小弦切切如私語	初爲霓裳后綠腰	輕攏慢捻抹復挑	似訴平生不得意	尋聲闇問彈者誰	楓葉荻花秋索索	命曰琵琶行	六百一十二	少小時
○○○○○○○○	○○○○○○○○	腰。 ○○○○○○六幺	○○○撚撥○○○ 撥、文集作抹。	○○○○○○○志	○○○暗○○○○○ 暗、文集作闇。	○○○○○○○瑟瑟 文集亦如此。	○○○○○○○	○○二○○○	○年○ 年、文集作小。
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○六幺	○○○撚撥○○○	○○○○○○○志	○○○暗○○○○○	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○	○○二○○○	○○○
龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○六幺	龍門本：○○○撚撥○○○ 京大本：○○○撚撥○○○	龍門本：○○○○○○○志 京大本：○○○○○○○志	龍門本：○○○暗○○○○○ 京大本：○○○暗○○○○○	龍門本：○○○○○○○瑟瑟 京大本：○○○○○○○瑟瑟	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○○	龍門本：○年○ 京大本：○○○
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○六幺	○○○撚撥○○○	○○○○○○○志	○○○○○○○○	○○○○○○○瑟瑟	○○○○○○○	○○二○○○	○○○
○○竊竊雜錯○	○○竊竊○○○	○○○○○○○○	○○○撚○○○	○○○○○○○○	○○○暗○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○引	○○○○○○○	○○○

附論：林羅山『歌行露雪』について

夢啼粧淚紅闌干	繞船月明江水寒	商人重利輕別離	門前冷落鞍馬稀	鈿頭云篋擊節碎	曲罷曾教善才伏	沉吟放撥插弦中	曲終收撥當心畫	冰泉冷澁弦凝絕	幽咽泉流水下灘
○○○○○欄○	○○明月○○○ 明月、文集作月明。	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	伏。 ○○常○○○服 常、事文作曾、服作	○○收○○○○	○○抽○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○ 難難、或作灘。
○○○○○○○	○○明月○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○銀○○○○	○○常○○○服	○○收○○○○	○○抽○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
龍門本：○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	龍門本：○○○○○○○ 京大本：○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ 難
○○○○○○○欄○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○
○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ 離別	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ (收)	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ (收)	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ □○○○○○	○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ ○○○○○○○ 難

滿座重聞皆掩泣	嘔啞嘲哢難爲聽	往往取酒還獨傾	春江花朝秋月夜	杜鵑啼血猿哀鳴	住近湓江地低濕	潯陽小處無音樂	謫居臥病潯陽城	相逢何必曾相識
如此。 ○○聞之○○○ 事文作重聞、文集亦	文如此。 ○○○ 嘲□、當作啁哢、事	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○ 事文、啼血作啼哭。	○○○ ○○○ ○○○ ○○○ 事文、江作池。	○○地僻○○○ 地僻、事文作小處、 文集亦同。	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○
○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ 啁○○○ ○○○	無	無	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ 地僻○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○ ○○○
京大本：○○○ 龍門本：○○○ 聞之○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○ 啁○○○	京大本：無 龍門本：○○○	京大本：無 龍門本：○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○ 地僻○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○	京大本：○○○ 龍門本：○○○
○○○ 聞之○○○	○○○ 啁○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ 地僻○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○
○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ 哭○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ ○○○ ○○○	○○○ 病臥○○○	○悲○○○

2、兩本の注解状況

本文以外、『歌行露雪』の注釋にはしばしば「本注」を引用しているが、大英圖書館所藏の南北朝刊本『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』（以下、『箋解』と略稱）と對照してみれば、すべて『箋解』の内容を抄録したものである。羅山が『古文眞寶』から『歌行露雪』を書寫した際に、同時にその注釋を利用したからこそ、『箋解』の内容を「本注」と略稱したと考えられる。

龍門本「宣賢抄」には『箋解』による注釋はあまり見られないが、表二によれば、京大本「宣賢抄」の注記には『箋解』によって注記した内容が相當存在している。さらに、『箋解』の「琵琶行」の「夜深忽夢少年事」「我聞琵琶已歎息」二聯には注釋があるが、京大本・『歌行露雪』ともに引用されていない。それは羅山が『箋解』を引用した際に、京大本系統の「宣賢抄」に影響を受け、この本に引用されている部分だけを抄録していたからであろう。

表二 宣賢抄の注記と『魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集』注釋との關連

白詩原文	京大本宣賢抄	『歌行露雪』	『古文眞寶』注
漢皇重色思傾國 御宇多年求不得	明皇思得傾城美貌之婦、不敢斥言唐君、借漢爲喻。	明皇思得傾城美貌之婦女、不敢斥唐君、借漢爲喻。	同。

楊家有女初長成 養在深閨人未識	楊玄琰女、小字玉環。	楊玄琰女、小字玉環。	同。
天生麗質難自棄 一朝選在君王側	開元十一年歸于壽邸、爲壽王妃、(後略)。	開元十一年歸于壽邸、爲壽王妃、(後略)。	同。
春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂	三秦記、始皇至驪山與神女遊、(後略)。明皇雜錄、天寶六載、更溫泉曰華清宮湯、(後略)。	三秦記、始皇至驪山與神女遊、(後略)。明皇雜錄、天寶六載、更溫泉曰華清宮湯、(後略)。	同。
雲鬢花顏金步搖 芙蓉帳暖度春宵	假名注、『禮記・明堂位』を引用する。	記、明堂位注、副首飾也。今步搖是也。	同。
遂令天下父母心 不重生男重生女	杜詩、生女猶可嫁比隣、生男埋沒隨百草。	杜詩、生女猶可嫁比隣、生男埋沒隨百草。	同。
漁陽鞞鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲	天寶十四載、祿山卒、藩兵十餘萬起漁陽、(後略)。 西清詩話、葉法善引明皇入月宮、(後略)。	天寶十四載、祿山卒、藩兵十餘萬起漁陽、(後略)。 〔西清詩話〕の引用無し。	同。
翠華搖搖行復止 西出都門百餘里 六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死	玄宗幸蜀、軍次馬嵬驛。將士飢疲、皆憤怒、(後略)。	玄宗幸蜀、軍次馬嵬驛。將士飢疲、皆憤怒、(後略)。	同。
峨嵋山下少人行 旌旗無光日色薄	峨嵋、成都府山名。	峨嵋、成都府山名。	同。
馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處	嵬、五回反。	嵬、五回反。	同。

芙蓉如面柳如眉 春風桃李花開夜	對此如何不淚垂 秋雨梧桐葉落時	見芙蓉則思貴妃之面、見柳則思貴妃之眉。春風花開艷陽之辰、秋雨葉落淒涼之際。對比景物、使人傷悲。	見芙蓉則思貴妃之面、見柳則思貴妃之眉。春風花開艷陽之辰、秋雨葉落淒涼之際。對比景物、使人傷悲。	同。
梨園弟子白髮新	椒房阿監青娥老	唐・禮樂志、初隋有法曲、(後略)。漢官儀、皇后稱椒房、(後略)。阿音握。	唐・禮樂志、初隋有法曲、(後略)。又阿音握。漢官儀、皇后稱椒房、(後略)。	同。
臨邛道士鴻都客	能以精神致魂魄	道士姓楊名通幽。	道士姓楊名通幽。	同。
中有一人字玉眞	雪膚花貌參差是	玉眞、乃貴妃也。參、初令反。羌、楚宜反。	玉眞、乃貴妃也。參、初令反。羌、楚宜反。	同。
七月七日長生殿	夜半無人私語時	長生、唐殿名。天寶十載、明皇憑楊妃肩、(後略)。	長生殿、唐殿名。又天寶十載、明皇憑楊妃肩、(後略)。	同。
在天願作比翼鳥	在地願爲連理枝	鳥各一羽、相比而飛、爲比翼鳥。樹一枝、相向連接脈理而生、(後略)。	鳥各一羽、比而飛、爲比翼鳥。又樹一枝、相向連脈理而生、(後略)。	同。
天長地久有時盡	此恨綿綿無絕期	觀天長地久、此恨綿綿之句、則其命名之意可知矣。	觀天長地久、此恨綿綿之句、則其命名之意可知矣。	同。

『箋解』以外、宣賢が「長恨歌」を注釋した際に、「天隱注を主體に季昌注の一部を加えた」増注本『三體詩』(以下、「三體詩注」と略稱)を引用している。『歌行露雪』にも三體詩注をよく引用しており、これは前述する『箋

解』の引用と同じく宣賢抄からの影響であろう。ただし、表三によれば、京大本「宣賢抄」における三體詩注の引用は主に「長恨歌」の前文に見られるのに對し、『歌行露雪』における三體詩注の引用は京大本より多く存在している。²⁹鈴木健一氏『林羅山年譜稿』「文祿四年（一五九五）」には、

建仁寺大統庵に入り、長老古澗慈稽に學ぶ。（後略）（年譜・行狀）
あるいは、この年の永雄の『三體詩』講義も聽講したか。（小高）³⁰

とあり、それは羅山が同時に英甫永雄から『三體詩』の講義を聞いていたので、三體詩注に詳しかったことからであろう。

表三 増注本『三體詩』との關連

白詩原文	京大本	『歌行露雪』	『三體詩』出典
冒頭部前文	假名注。『三體詩』卷一・杜牧「過勤政樓」注を引用している。	（引用無し。）	卷一、杜牧「過勤政樓」。
	假名注・漢文注混在。『三體詩』卷一・杜常「華清宮」注を引用している。	（引用無し。）	卷一、杜常「華清宮」。
天生麗質難自棄 一朝選在君王側	（引用無し。）	唐史、玄宗以後宮數千、（後略）。三體詩中注。	卷二、李商隱「馬嵬」。

<p>春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂</p>	<p>假名注。『三體詩』卷一・杜常「華清宮」注を引用している。</p>	<p>漢文注。圓至天隱注三體詩曰、驪山溫泉宮、太宗所建、(後略)。又李昌增注、華清宮在唐關內道京兆府昭應縣驪山下、(後略)。</p>	<p>卷一、杜常「華清宮」。</p>
<p>姊妹弟兄皆列土 可憐光彩生門戶</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>三體詩載張祐集靈臺、(中略)。天隱注、楊妃有三姨、(後略)。</p>	<p>卷一、張祐「集靈臺」。</p>
<p>驪宮高處入青雲 仙樂風飄處處聞</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>三體詩注、玄宗天寶元年分置會昌縣、(後略)。</p>	<p>卷一、顧況「宿昭應」。</p>
<p>漁陽鞞鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>三體詩三注曰、漁陽今檀州、(後略)。天寶十四年六月一日、華清宮爲貴妃作生日、(中略)。三體注。</p>	<p>卷三、劉長卿「穆陵關北逢人歸漁陽」。 卷一、杜常「華清宮」。</p>
<p>九重城闕煙塵生 千乘萬騎西南行</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>杜常華清宮詩、行盡江南數十程、曉風殘月入華清。注、江南、指蜀江之南(後略)。</p>	<p>卷一、杜常「華清宮」。</p>
<p>六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>三體詩中、李商隱馬嵬詩、此日六軍同駐馬、當時七夕笑牽牛。注、唐書百官志、(中略)三體中注。</p>	<p>卷二、李商隱「馬嵬」。</p>
<p>黃埃散漫風蕭索 雲棧繁紆登劍閣</p>	<p>(引用無し。)</p>	<p>馬戴、送人歸蜀詩、(中略)。注、大安軍棧道連空、(中略)。三體下。 雍陶詩、(中略)。注、斜谷道至鳳州界百五十里、(中略)。三體詩上。 嚴維、送鄭有入蜀詩、(中略)。注、大劍山即劍門也、(中略)。三體下。</p>	<p>卷三、馬戴「送人歸蜀」。 卷一、雍陶「西歸出斜谷」。 卷三、嚴維「送鄭有入蜀」。</p>

悠悠生死別經年 魂魄不曾來入夢	鴛鴦瓦冷霜華重 翡翠衾寒誰與共	梨園子弟白髮新 椒房阿監青娥老	歸來池苑皆依舊 太液芙蓉未央柳	馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處	天旋日轉迴龍馭 到此躊躇不能去	行宮見月傷心色 夜雨聞鈴腸斷聲	峨眉山下少人行 旌旗無光日色薄
(引用無し。)	(引用無し。)	假名注・漢文注混在。『三體詩』卷一・薛能「吳姬」注を引用している。	(引用無し。)	(引用無し。)	(引用無し。)	(引用無し。)	(引用無し。)
朱褒、悼亡妓詩、魂歸溟漠魄歸泉、只住人間十五年。注、禮記、(中略)。三體。	張又新詩、湖光迷翡翠、草色解蜻蜓。注、翡、赤羽雀、(中略)。三體下。	(引用無し。)	上陽宮詩注、郊祀志、(中略)。三體。上陽、唐宮殿名。 未央宮、高祖七年蕭何造。杜詩、杜陵韋曲未央前。同注。	馬嵬故城在興平縣西北二十三里、(中略)。三體二注。史云、祿山反、上出延秋門、至馬嵬驛、(中略)。同注。仙傳拾遺曰、玄宗幸蜀、自馬嵬之後、(中略)。三體中注。	王建詩、太平天子朝元日、五色云車駕六龍。注、太平天子、謂玄宗也。三體詩。	崔塗、繡嶺宮詩、(中略)。注同上、三體二。李商隱聞歌詩、(中略)。注、唐武宗疾篤、孟才人者、(中略)。三體二。	洞天記、峨眉山在嘉州峨眉縣、兩山相對如峨眉。三體下注。
卷一、朱褒「悼亡妓」。	卷三、張又新「三月五日汎長沙東湖」。	卷一・薛能「吳姬」。	卷一、竇庠「上陽宮」。 卷一、雍裕之「宮人斜」。	卷二、李商隱「馬嵬」。	卷一、王建「宮詞」。	卷二、崔塗「繡嶺宮」。 卷二、李商隱「聞歌」。	卷三、岑參「夜宿龍吼灘思峨眉隱者」。

臨邛道士鴻都客 能以精神致魂魄	(引用無し。)	道經云、人行大道號道士、身心順理、從道爲事、故稱道士。道者、理也。士者、事也。三體下注。 唐六典、道士修行、其德高思精、謂之鍊師。按此、則鍊當作煉。同上注。	卷三、賈島「山中道士」。 卷一、鮑溶「贈楊鍊師」。
爲感君王展轉思 遂教方士殷勤覓	(引用無し。)	岑參詩、且欲求方士、無心戀史君。注、杜預曰、方、法也、法術之士。三體下。	卷三、岑參「夜宿龍吼灘思娥眉隱者」。
中有一人字玉眞 雪膚花貌參差是	(引用無し。)	李商隱馬嵬驛詩、海外徒聞更九州、他生未卜此生休。注、仙傳拾遺曰、楊妃死、(中略)。三體中。	卷二、李商隱「馬嵬」。
白詩原文	京大本	歌行本	『三體詩』出典
潯陽江頭夜送客 楓葉荻花秋瑟瑟	(引用無し。)	三體詩二、皇甫冉、送李錄事赴饒州詩、山從建業千峰出、江至潯陽九派分。注、吳九江郡鄱陽縣本楚地、(後略)。	卷二、皇甫冉「送李錄事赴饒州」。
十三學得琵琶成 名屬教坊第一部	(引用無し。)	三體詩二注、元宗開元初於蓬萊宮側立教坊、置使領之。	卷二、王建「早春五門西望」。
五陵年少爭纏頭 一曲紅綃不知數	假名注。『三體詩』卷一・吳融「閨鄉卜居」注を引用しており、出典を明記していない。	三體詩、吳融詩、五陵年少如相問、阿對泉頭一布衣。注、五陵、(後略)。	卷一・吳融「閨鄉卜居」。

以上の『箋解』・『三體詩』以外、京大本「宣賢抄」には『句解』を引用している。この「句解」は「どうい

うものかよく分らない」³¹が、『歌行露雪』にも同じく『句解』を引用している。³²これは京大本系統の「宣賢抄」からの影響であろう。

三、羅山の白詩受容における『歌行露雪』及び羅山手校本『白氏文集』との関係

『歌行露雪』が英甫に奉呈されたのは慶長元年（一五九六）であるが、原書には後の加筆や修訂が時に見られる。「琵琶行」の冒頭部の欄外には、五年後の慶長六年（一六〇一）六月十一日、舟橋秀賢と「司馬」の一語について検討した追記がある。

極廊秀賢告余曰、司馬者、日本ノ國守ノ下に使々掾ト云者ナリ云々。又云、卿見唐書否、樂天依何罪左遷江州司馬之事不審、古來未詳之、定是在唐書樂天傳乎。余領之而已。于時慶長六年六月十一日。

現存する羅山の年譜資料や舟橋秀賢が著した『慶長日件録』によれば、二人の交際に関する最も早い記載は、慶長八年（一六〇三）のことである。鈴木健一氏『林羅山年譜稿』には、

十月二十九日、船橋（清原）秀賢を訪問する。（慶長日件録）

十一月四日、船橋秀賢が羅山宛書簡を著す。（慶長日件録）

とある。『慶長日件録』は慶長六年の部分を缺いているが、『歌行露雪』に保存されている追記によれば、二人

が早くから學問的交流を始めたことが分かる。それは『歌行露雪』の研究に留まらず、羅山と舟橋秀賢との交遊關係にも貴重な資料と見做してよい。また、「長恨歌」の「天生麗質難自棄」句の欄外には、

道春云々、開元二十一年、(不詳)、天寶四載、冊爲貴妃、時年廿七、十五載、縊殺妃于馬嵬、時卅八。開元七年妃生二天寶十五載死。

と見え、それは羅山が慶長十二年(一六〇七)剃髮して名を「道春」と改めた後の追記である。さらに、「峨嵋山下少人行」句の欄外には、

考究不精。○志林、白樂天長恨歌云ノ峨嵋山下少人行、峨眉在嘉州、與幸蜀路全無交涉云々。此文章之病也。事文文別五。³³⁾

と記し、昔の注釋を批判した例もある。『歌行露雪』は少年期の林羅山と『白氏文集』との關係において貴重な資料であり、生涯に亘った羅山の白詩享受の始まりと言えよう。

元和四年(一六一八)、羅山は弟子の那波道圓から新刊本『白氏文集』を獻呈され、その一部に加點・校勘した。東京國立博物館所藏の林羅山手校本『白氏文集』(以下、「東博本」と略稱)として伝えられており、中年期の羅山の白詩享受を反映している。³⁴⁾ 東博本には羅山の息子の鷲峰によって加點された部分があるが、村上雅孝氏によれば、卷十二、即ち「長恨歌」「琵琶引」が収録されている部分は羅山によって加點されたものである。³⁵⁾ 従つて、卷十二の行間或いは欄外の注釋も羅山のものであると考えられる。兩本を對照してみれば、羅山の白詩受

容の變遷を説明することができよう。

『歌行露雪』には異文を行間や余白に注記する所が多く存在している。それらの異文注記は、『歌行露雪』が成立した後に書き添えたものであろう。後掲の表四によれば、『歌行露雪』の傍注には「文集作某」の校記が十ヶ所見られ、それら「文集」の「某」字は元和四年（一六一八）に刊行された那波本の字と同じである。羅山が元和四年「那波道圓から刊行したばかりの『白氏文集』三十冊を贈られ」る前には、「新樂府」及び金澤本を中心とした『白氏文集』の「繕寫一通」のみを所持していたことを考えると、傍注の「文集作某」の校記は、『歌行露雪』が成立した二十年余り後、那波本『白氏文集』を用いて追記したものである。恐らく元和四年、那波本に加點したと同時に、『歌行露雪』にその異文を記入したと考えられる。

また、『歌行露雪』の傍注には「事文作某」の校記が六ヶ所あり、これは『事文類聚』によって注記したものである。これらの校記が「琵琶引」の部分だけに存在しているのは、『事文類聚』（『國文學研究資料文庫』影印寛文本）には白居易「琵琶行」を續集卷二十二樂器部に収録しているが、「長恨歌」を収録していないからである。さらに、「潯陽地僻無音樂」一句には「地僻、事文作小處、文集亦同」と、「滿座聞之皆掩泣」一句には「事文作重聞、文集亦如此」と注しており、羅山が元和四年以降、那波本の異文と一緒に書き入れたと思われる。林鶯峰『西風淚露』には、羅山の『事文類聚』の受容について、次のように述べている。

先考少年好讀『事文類聚』、壯年得朝鮮本、全部加朱句畢。鮮本罹災、其舊唐本余傳之。

（先考は少年好んで『事文類聚』を讀み、壯年朝鮮本を得、全部朱句を加えて畢る。鮮本は災に罹り、其

の舊き唐本は、余之を傳う。）

元和四年の羅山は三十六歳であり、まさに「壯年」の一語に相應する。ここに言及される壯年に入手した朝鮮本『事文類聚』は、『歌行露雪』に加えた『事文類聚』異文の來源であろう。また、「鮮本罹災」は、明暦の大火に焼失したことを指していると思われる。

以上によれば、幼少期の羅山が慶長元年（一五九六）から『歌行露雪』の典據を注記した後、數年に亘って修訂しており、彼の學問への慎重な態度を反映している。さらに、中年期に入った羅山は手元にある那波本『白氏文集』や朝鮮本『事文類聚』などを利用して『歌行露雪』の異文を注記したが、これは彼の『白氏文集』本文への關心を表しているよう。

表四 『歌行露雪』・東博本異文注表

那波本	歌行露雪・異文注	『古文眞寶』	金澤本	東博本異文注
御宇多年求不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○寓○○○○○	宇、乍寓。
養在深閨人未識	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○窓○○○○○	閨、窓イ。
回眸一笑百媚生	○頭○○○○○ 頭字、文集作眸。	○頭○○○○○	○○○○○○○○	(無し。)
承歡侍宴無閒暇	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○寢○○○○○	宴、寢イ。
君王掩面救不得	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○眼○○○○○	面、眼イ。

唯將舊物表深情	回頭下望人寰處	昭陽殿里恩愛絕	雲鬢半垂新睡覺	九華帳裏夢中驚	中有一人字玉眞	樓閣玲瓏五雲起	山在虛無縹緲間	排空馭氣奔如電	翡翠衾寒誰與共	遲遲鐘鼓初長夜	椒房阿監青娥老	宮葉滿階紅不掃	西宮南苑多秋草	春風桃李花開夜	夜雨聞鈴腸斷聲
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○偏○○○	魂、文集作中。	○○○○○○○○	○殿○○○○○○	○○○○○○○○	○風○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○鈴、或作猿。
○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○偏○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○殿○○○○○○	○○○○○○○○	○風○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○
持○○○○○○○	○○○視○○○	○○○○○○○○歇	○○○偏○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	○殿○○○○○○	○○○○○○○○	○○○○○○○○	舊枕故衾○○○	○○○漏○○○	○○○○○○○○	○(落)○○○○○○	○○○內○○○	○○○○○○○○	○○○猿○○○
唯、空イ、持イ。	望、視イ。	絶、歇イ。	(無し。)	中、魂イ。	眞、字、名、妃イ。	閣、殿イ。	緲、眇イ。	(無し。)	翡翠衾寒、舊枕故衾。	鼓、漏。	娥、蛾イ。	宮、落イ。	苑、内イ。	夜、月イ。	(無し。)

附論：林羅山『歌行露雪』について

釵留一股合一扇	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇鈞〇〇〇	股、イ乍鈞。
但令心似金鈿堅	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇教〇〇〇〇〇〇	(無し。)
此恨綿綿無盡期	〇〇〇〇〇〇〇〇 絶期、文集作盡期。	〇〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇 絶	盡、絶イ。

前述のように、『歌行露雪』には『箋解』や『三體詩』を用いて注記する所が数多く存在しており、當時の讀書風潮、とりわけ禪林の風潮を反映している。それに對し、東博本「長恨歌」「琵琶行」には『箋解』や『三體詩』を引用する例は全く見當たらなく、『唐詩解』を引用するのみである。『唐詩解』は明の唐汝詢の編纂であり、早期の版本には、萬曆四十三年(一六一五)楊鶴刻本(『四庫全書存目叢書』本)がある。羅山が當時読んでいた『唐詩解』は、明國から輸入した唐本であろう。

羅山が東博本を注記した際に、金澤本を参照したことが從來の研究によってすでに明らかにされているが、金澤本と異なる所も相當見られる。表五の「九華帳裏夢中驚」「楓葉荻花秋索索」「幽咽泉流水下灘」三句はその例であり、『唐詩解』によって注記したものであろう。『唐詩解』(『四庫全書存目叢書』本)卷二〇には、白居易「琵琶行」「長恨歌」二首を収録している。その本文來源について、「全集本とは別個に流布した單行本系のテキストではないか」と神鷹徳治氏が推測しているが、『唐詩解』の「凡例」には、

諸家詩散佚汗漫、廷禮之選、已無遺珠。故是編悉掇『品彙』之英、不復外索。雖盛唐諸公、間有一二參入、而中晚及初、一無采焉。至若白香山之「長恨歌」、搜之本集、然亦寥寥無幾矣。

と見え、『唐詩解』が収録している「長恨歌」は、某本「本集」（『白氏文集』）から採録されたことが分かる。羅山が『唐詩解』によって那波本を注記したことは、『唐詩解』本文の特別な價值に注意したあらかもしれない。

表五 東博本注記・金澤本・『唐詩解』異文對照

那波本	金澤本	『唐詩解』	東博本注記
御宇多年求不得	○寓○○○○○	○十○○○○○	宇、乍寓。
養在深閨人未識	○○○窓○○○	○○○○○不○	閨、窓イ。
回眸一笑百媚生	○○○○○○○	○○○○○○○	（無し。）
承歡侍宴無閒暇	○○○寢○○○	○○○寢○○○	宴、寢イ。
君王掩面救不得	○○○眼○○○	○○○○○○○	面、眼イ。
夜雨聞鈴腸斷聲	○○○猿○○○	○○○○○○○	（無し。）
春風桃李花開夜	○○○○○○○	○○○○○○○	夜、月イ。
西宮南苑多秋草	○○○内○○○	○○○内○○○	苑、内イ。
宮葉滿階紅不掃	○○（落）○○○○○	落○○○○○○○	宮、落イ。
椒房阿監青娥老	○○○○○○○	○○○○○○○	娥、蛾イ。
遲遲鐘鼓初長夜	○○○漏○○○	○○○漏○○○	鼓、漏。
翡翠衾寒誰與共	舊枕故衾○○○	舊枕故衾○○○	翡翠衾寒、舊枕故衾。
山在虛無縹緲間	○○○○○眇○	○○○○○○○	緲、眇イ。
樓閣玲瓏五雲起	○殿○○○○○	○殿○○○○○	閣、殿イ。

嘈嘈切切錯雜彈	○○竊竊○○○	○○○○○○○○	切切、作竊竊。
幽咽泉流水下灘	○○○○○○○難	○○○○○水○○	氷、作水。灘、作難。
銀瓶乍破水漿迸	○○○閉○○○	○○○○○○○○	乍、作閉。
曲罷曾教善才伏	○○○○○○○○	○○常○○○服	(無し。)
繞船月明江水寒	○○○○○○○○	○○明月○○○	(無し。)
相逢何必曾相識	○悲○○○○○	○○○○○○○○	逢、悲イ。
潯陽小處無音樂	○○○○○○○○	○○地僻○○○	(無し。)
住近湓江地低濕	○○○○○○○○	○○○○○底○	(無し。)
杜鵑啼血猿哀鳴	○○○哭○○○	○○○○○○○○	血、哭イ。
嘔啞嘲哳難爲聽	○○○○○○○○	○○啞○○○○	(無し。)
滿座重聞皆掩泣	○○○○○○○○	○○聞之○○○	(無し。)

むすびとして

以上、内閣文庫に所藏される林羅山手抄の『歌行露雪』について考察した。『歌行露雪』の内容は、禪僧の英甫永雄から深い影響を受けたが、「宣賢抄」によって典據を注記した部分も時に見られた。それらの注記は、永雄の講義から聞いたものか、自ら「宣賢抄」から寫したものか、明らかにし難いが、羅山の學問は早くから禪林と博士家との二系統の内容を含んでいたことが窺える。

『歌行露雪』原書は慶長元年(一五九六)に成立したものである。しかし慶長六年(一六〇一)以降羅山によつ

て書き添えられた内容も相當存在している。特に那波本『白氏文集』によつて異文を注記する部分が確認でき、さらに羅山手校の東博本を加えて考察してみたところ、中年期の羅山が『白氏文集』の本文に深い關心を示していたことが分かる。

注

① 小論が所引する『倒痴集』は、『室町ごころ：中世文學資料集』（角川書店、一九七八）に収録されている翻刻に従う。その翻刻は建仁寺兩足院所藏本を底本に用い、東京大學史料編纂所所藏本で校訂するものである。

② 「佗力」は「洛下他力」に作る。「門下之家」は「門下」に作る。「少年」は「好少年」に作る。「東山」は「東而」に作る。「遊於」は「遊」に作る。「孔丘之治學」は「孔丘治學」に作る。「茲冬之仲」は「茲冬仲」に作る。「以見示予」は「見示予」に作る。「開而」は「二字無し」。「和尚之講席」は「和尚講席」に作る。「反相」は「又相」に作り、誤りである。「幻術」は「幻術等」に作る。「各無所缺」は「一一無所缺」に作る。「現于」は「顯于」に作る。「予之所講」は「予所講」に作る。「可謂異曲同工」は「異曲而同工也」に作る。「戲賦」の上、「不孰稱美之」の一文ある。「褒焉」は「褒之」に作る。

③ 「この詩と長い詞書とがそのまま、内閣文庫藏『歌行露雪』に英甫自筆で綴じ込まれている」と堀川貴司氏が断定する（堀川貴司氏『倒痴集』について、『論集：中世の文學（韻文篇）』、久保田淳編、明治書院、一九九四、頁三四七）。

④ 伊藤東慎氏「狂歌師雄長老と若狭の五山禪僧」、『禪文化研究所紀要』三、一九七一。

⑤ しかしながら、鈴木健一氏が「文祿四年」の條に、「英甫永雄の許へ行き、藏書を閲覽した」と記載しているのみ（『林羅山年譜稿』、ぺりかん社、一九九九、頁一一）。

⑥ 堀勇雄氏『林羅山』（吉川弘文館、一九九〇、頁二〇）・鈴木健一氏『林羅山年譜稿』（頁一二）を参照する。

⑦ 『水心集』（『四部叢刊』本）卷二五「宋殿父墓誌銘」「家居或盡一史、露抄雪纂、踰月不出門」。『續書史會要』（『文淵閣四庫全書』本）「鄒緝」條、「見異書、必露抄雪纂」。

⑧ 蔭木英雄・濱田啓介『『倒病集』解題』、『室町ごころ：中世文學資料集』、頁五六〇。

⑨ 『古文眞寶』などの刊本系所收の「琵琶引」は「楓葉荻花秋索索」に作るが、金澤本は「楓葉荻花秋瑟瑟」に作る。英甫永雄の作品（⑧）には「索索」「瑟瑟」の使用とも見られ、彼が讀んだ『白氏文集』には抄本系のものであったと考えられる。

⑩ 芳賀幸四郎氏『中世禪林の學問および文學に關する研究』、思文閣出版、一九八一。

⑪ 蔭木英雄氏「五山文學における白居易の受容」（『白居易研究講座（第四卷）：日本における受容（散文篇）』、勉誠社、一九九四、頁二八二）、または、太田次男氏「白居易と道林禪師との問答について」（『成田山佛教研究所紀要』、第一四號、一九九一）を参照されたい。

⑫ 柳田征司氏「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」（『訓點語と訓點資料』、二〇〇四年第九期）を参照する。

⑬ 小論は引用する京大本は、國田百合子氏『長恨歌・琵琶行抄』（武藏野書院、一九七六）所收の影印本・京都大學圖書館が公開する「長恨歌竝琵琶行祕抄」畫像に従う。

⑭ 大塚光信氏「長恨歌・琵琶行抄」解題、『室町ごころ：中世文學資料集』、頁五八九。

⑮ 安野博之氏「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」、『國語と國文學』、二〇〇三年第一二期。

⑯ 安野博之氏「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」。

- ①⑦ 小論は引用する龍門本は『坂本龍門文庫複製叢刊』本（龍門文庫、一九六二）に従う。
- ①⑧ 今中寛司氏『近世日本政治思想の成立：惺窩學と羅山學』、創文社、一九七二、頁一六二。
- ①⑨ 『近世日本政治思想の成立：惺窩學と羅山學』、頁四〇四。
- ②⑩ 堀川貴司氏『『倒痴集』について』、頁三五〇。
- ②⑪ 『歌行詩』は「室町末期の寫、慶長・元和間の古活字、寛永・慶安間の付訓整板本等が存する」（神鷹徳治『歌行詩解題』、勉誠社、一九八八、頁四）。
- ②⑫ 川瀬一馬氏「清原宣賢筆「長恨歌並琵琶行」解説」（『長恨歌並琵琶行二卷』、清原宣賢筆、白居易作、龍門文庫、一九六二、頁五）。
- ②⑬ 川瀬一馬氏「清原宣賢筆「長恨歌並琵琶行」解説」（頁六）。
- ②⑭ 國田百合子氏『長恨歌・琵琶行抄』、頁二二四。
- ②⑮ 『長恨歌・琵琶行の研究』、頁一三二—一三三。
- ②⑯ 金程宇氏編『和刻本中國古逸書叢刊』第一卷、鳳凰出版社、二〇一二。
- ②⑰ 金澤本『白氏文集』には胡粉を用いて塗抹する内容があり、括弧で本來の文字を示す。
- ②⑱ 安野博之氏「清原宣賢自筆『長恨歌・琵琶行抄』の成立」。
- ②⑲ 服部宇之吉氏校訂『増註三體詩』、富山房、一九七二。また、『唐詩選三體詩總合索引』（禪文化研究所編、一九九一）を参照する。
- ③⑩ 『林羅山年譜稿』、頁一一。
- ③⑪ 『長恨歌・琵琶行の研究』、頁一三七。
- ③⑫ 例えば、「云鬢花顔金步搖」には「句解、鬢髮如雲、容貞如花、戴金步搖之冠」「春從春遊夜專夜」には「句解、春則隨帝遊觀、夜則專房」

結論

唐代文學は古くから日本の文人に親しまれたので、日本には唐代文學に關する資料が極めて豊富に存在する。これらの資料は中國文學研究者のみならず、日本文學研究者からも注目されている。日本傳存古文獻による唐代文學に關するこれまでの研究は、主に唐人佚書の利用及び日本傳存漢籍の利用の二方面に大別できる。

唐人佚書の利用における過去の業績として、江戸後期の市河寛齋『全唐詩逸』がある。これは日本の古文獻の『文鏡祕府論』などを用いて『全唐詩』を輯佚したものであり、『全唐詩』補正の嚆矢として、從來の研究者に高く評價されている。『全唐詩逸』に啓發されて近年に至り、日本に残存する唐人の佚書への關心が高まった。『全唐詩補編』（一九九二）を編纂した陳尙君氏、「資料紹介 伏見宮舊藏『雜抄』卷十四」（一九九九）を著した住吉朋彦氏を代表とする中國文學・文獻學研究者は、『翰林學士集』・『趙志集』・伏見宮舊藏『雜抄』などの佚書を利用して唐代文學の新たな資料を提供している。これらの資料は『全唐詩』『全唐文』の補正において量的にも質的にも重要で、二十世紀以來の唐代文學研究の主要な推進力となったと言っても過言ではない。また、羅國威氏『日本傳存弘仁本文館詞林校證』（二〇〇一）などは、『翰林學士集』・『文館詞林』などの唐代佚書が唐代の宮廷詩の成立狀況を傳えていることに注意を促し、從來、個人の創作に偏重していた唐代文學の研究領域を大きく擴大した。

しかし、現在では日本に残存する唐人佚書は殆ど利用し盡くされ、新たな資料の出現は期待しがたいと見な

す傾向が強い。それゆえ、近年の大部分の研究者の關心は唐代の資料から宋代以降の資料に移っている。ところが、唐人佚書以外の『江談抄』『菅家文章』など日本の文人の著作にも唐代文學に關する資料が相當傳えられている。これらの資料は日本文學研究者にはよく知られているが、中國文學研究者の關心の圏外にある。また一部の内容は研究者に注目されたが、その解讀にはかなりの問題點が残されている。それに、『和漢朗詠集』などの日本文人の著作はすでに『全唐詩』補正の資料として利用されているが、その古注釋の價値は全く認識されていないと思われる。これらの未開拓の資料を廣く發掘して検討を加えれば、日本傳存古文獻を用いた唐代文學の研究に多くの成果をもたらすことが期待できるであろう。

日本傳存漢籍の利用において、内閣文庫・靜嘉堂文庫などの日本の公私の所藏機關には、唐人別集・總集などの大量の漢籍が所藏されている。その中には、中國現存の通行本と異なる刊本が數多くある。例えば、靜嘉堂文庫所藏の麻沙本『王右丞文集』は、中國國家圖書館所藏の蜀刻本『王摩詰文集』と雙璧をなす貴重本であり、蜀刻本とは異なる特徴を有している。これに類似する例としては、天理圖書館藏宋本『劉夢得文集』・書陵部藏紹定本『寒山詩集』などがある。これらの漢籍は清末・民國初から、董康などの有識者によつて中國に紹介されて、現在では研究の基本資料として廣く利用されている。また、日本傳存漢籍には中國では傳存まれな唐人詩集の寫本が多く見られる。花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（一九六〇）・太田次男氏『舊寫本を中心とする白氏文集本文の研究』（一九九七）等に論じられているように、『白氏文集』の金澤文庫本・神田本などの寫本は、白居易手定の文集の原姿に近いので、唐代の寫本から宋代の刊本への轉換過程においていかなる改變が行われたかを傳えている。これらの寫本の存在は、唐代文學の本文系統の研究にとどまらず、中國書

籍史においても類まれなる資料である。

拙論は『白氏文集』を基軸として、日本所藏古文獻における唐代文學の研究を多面的に展開した。

第一章『江談抄』所引白氏詩文考三則」は、『江談抄』の資料に基づいて、白居易に關する二つの問題を考察した。『江談抄』は大江匡房の談話を筆記した院政期の故實書であり、白居易の作品に關する記事が多く見られ、『白氏文集』の考察に重要な役割を果たすことができる。これらの資料を踏まえ、白詩の本文の複雑さ及び白氏詩文の流傳の實態を明らかにし得た。

第二章「『天寶集』について」は、『和漢朗詠集』や『李嶠雜詠』・『百詠和歌』の古注釋を用い、『日本國見在書目錄』に見える唐代佚書の『天寶集』の成立及び收録内容を考察した。第三章「顧陶『唐詩類選』について」は、日中兩國の古文獻を考證して唐代佚書の『唐詩類選』の復元を行った。以上の『天寶集』と『唐詩類選』の二種の唐代佚書は、古い時代に日本に傳來したが、長い時間を経てすべて散佚したので、詳しく考察することは不可能であると従來の研究者は考えていた。拙論は古注釋に着目し、これら二種の唐代佚書の復元を試みた。

第四章「『文苑英華』に於ける『白氏文集』諸本の利用狀況」は、北宋初年に成立した『文苑英華』が、どのような『白氏文集』を底本として利用したかを明らかにした上で、北宋當時になお存在していた舊抄本『白氏文集』は、日本古寫本と異なる系統の本であることを確認した。さらに、南宋に成立した『文苑英華』校記を利用し、當時の『白氏文集』の刊本系統を検討してみた。こうした『文苑英華』に於ける『白氏文集』の利用狀況を考察することによって、『文苑英華』の校訂狀況や校記の體例を明らかにすることもできると思われる。

附論「林羅山『歌行露雪』について」は内閣文庫所藏の林羅山手稿の『歌行露雪』について考察したものである。『歌行露雪』がどの底本・注釋本を利用したかを明確にし、羅山の學問は早くから禪林と博士家との二系統の内容を含んでいたことが確認できた。さらに、『歌行露雪』と東京博物館本『白氏文集』の注記内容を對照し、林羅山の白詩受容と日本に流傳していた『白氏文集』の寫本及び日本刻本との深い關連を明らかにした。

拙論は以上の五部分によって構成されている。各章・附論で検討された内容は、時間的に初唐から晩唐まで、地域的に大陸から日本までの範圍にわたっているが、日本傳存古文獻を利用するという方法を用い、唐代文學の研究を推進するという主題が各論に互って統貫している。日本傳存古文獻の利用は、唐代文學研究の先端領域として、新たな研究資料を提供するのみならず、日本文人の唐代文學の受容という觀點から、研究を新たに開拓することも期待できる。これは唐代文學の研究にとどまらず、和漢比較文學・日本文學ないし東アジア文學までの幅廣い研究に關連し、唐代文學が漢字文化圏に如何に大きな影響力を與えたかを解明することへと發展すると言えよう。